

# 下原遺跡

(株)平和時計製作所の工場建設に先立つ  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1989. 3

(株) 平和時計製作所  
長野県飯田市教育委員会

# 下原遺跡

(株)平和時計製作所の工場建設に先立つ  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1989. 3

(株) 平和時計製作所  
長野県飯田市教育委員会

## 序 文

先人達の残した様々な文化遺産を守り、後世に継承していくことは、我々の責務であることは、言うまでもありません。ことに、埋蔵文化財は、歴史・文化を考えるうえでの実証者がありますが、遺跡数には限りがあり再生が不可能という弱点を持っています。

近年の開発の進捗状況は著しく、更に大規模化していく傾向にあります。埋蔵文化財の保護か開発かという問題をはらんだまま現在に至っています。しかし、埋蔵文化財も国民共有の文化財産・地域文化の基盤であることを再認識して、その保護のために新しい施策を進める時期にきていると思います。

このたび、㈱平和時計製作所が伊賀良下殿岡地籍に工場を建設するにあたり、市教育委員会に発掘調査の申し出があり、県を交えての協議の結果、発掘調査を実施し記録保存を行なうこととなりました。

現地は県道駄野科大瀬木線の沿線で伊賀良を形成する大扇状地の扇端部に位置し、北に気賀沢川、南に新川の谷にはさまれた小高い丘陵地帯で、現在は市内でも有数の果樹地帯となっているところです。地形的にみれば、人々の生活には適していると考えられる場所です。

発掘調査の結果については、以下調査報告書を熟読いただければ幸いです。

最後に、埋蔵文化財保護の主旨をご理解いただき多大なるご協力を賜わった㈱平和時計製作所ならび地元の皆様、嚴冬の中発掘に従事いただいた作業員のみなさん他関係各位に心からお礼申し上げます。

平成元年3月

飯田市教育長 福島 稔

## 例　　言

1. 本書は、株式会社平和時計製作所の新工場建設に伴う飯田市伊賀良下殿岡地区における埋蔵文化財包藏地「下原遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社平和時計製作所からの委託をうけ飯田市教育委員会が実施した。
3. 本遺跡の略号は、T S Hとし発掘から整理作業まで一貫して使用した。
4. 本書の掲載については、住居址を優先し時代順を原則とした。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物図及び写真図版は本文末に統一した。
5. 本書は小林正春・佐々木嘉和・馬場保之・吉川 豊の分担執筆とし、文末に執筆者名を付した。なお、原稿の一部につき小林正春が加筆訂正を行なった。
6. 本書に掲載した図面の整理、遺物実測は佐々木が行なった。なお、整理作業実施にあたり、吉川が補佐した。
7. 石器実測図中の実線、矢印付実線、破線、網掛け部分はそれぞれ、摩滅痕・砥面の範囲、研磨痕、敲打痕・潰しの範囲、ロウ状光沢物付着部分を示す。
8. 本書に掲載した遺構図の中に記した数字はそれぞれの穴の床面ないしは周囲からの深さ（単位cm）を表わしている。
9. 住居址・土坑のエレベーションの基準線は、すべて標高521.50mとした。
10. 遺構番号については、試掘調査の段階から順次番号を付し、試掘調査時に3号住居址とした地点について、最終的に検討の結果遺構から除外したため、3号住居址は欠番となっている。
11. 本書の編集は、調査員全員の協議をふまえ、佐々木、吉川が行ない、小林が総括した。
12. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館で保管している。

# 本 文 目 次

## 序 文 例 言 目 次

### I 経 過

1. 調査に至るまでの経過 .....	1
2. 調査の経過 .....	1
3. 調査組織 .....	2

### II 遺跡の環境

1. 自然環境 .....	4
2. 歴史環境 .....	4

### III 調査の結果

#### 1. 住居址

1) 縄文時代	
(1) 1号住居址 .....	9
(2) 2号住居址 .....	9
(3) 4号住居址 .....	11
(4) 5号住居址 .....	11
(5) 6号住居址 .....	12
(6) 7号住居址 .....	13
(7) 8号住居址 .....	14
(8) 9号住居址 .....	16
(9) 10号住居址 .....	17
(10) 12号住居址 .....	19
(11) 13号住居址 .....	20

#### 2) 弥生時代

(1) 11号住居址 .....	21
------------------	----

#### 2. 土 坑

(1) 土坑 1 .....	(2) 土坑 2 .....	(3) 土坑 3 .....	(4) 土坑 4 .....
(5) 土坑 5 .....	(6) 土坑 6 .....	(7) 土坑 7 .....	(8) 土坑 8 .....
(9) 土坑 9 .....	(10) 土坑 10 .....	(11) 土坑 11 .....	(12) 土坑 12 .....

13	土坑 13	04	土坑 14	05	土坑 15	06	土坑 16
17	土坑 17	08	土坑 18	09	土坑 19	20	土坑 20
21	土坑 21	22	土坑 22	23	土坑 23	24	土坑 24
25	土坑 25	26	土坑 26	27	土坑 27	28	土坑 28
29	土坑 29	30	土坑 30	31	土坑 31	32	土坑 32
33	土坑 33	34	土坑 34	35	土坑 35	36	土坑 36
37	土坑 37	38	土坑 38	39	土坑 39	40	土坑 40
41	土坑 41	42	土坑 42	43	土坑 43	44	土坑 44
45	土坑 45	46	土坑 46	47	土坑 47	48	土坑 48
49	土坑 49	50	土坑 50	51	土坑 51	52	土坑 52
53	土坑 53	54	土坑 54	55	土坑 55	56	土坑 56
3. 遺構外出土遺物				40			
IV まとめ				41			

## 挿 図 目 次

挿図 1.	調査遺跡位置及び周辺遺跡図	3
挿図 2.	調査位置及び周辺地図	6
挿図 3	T S H 調査区遺構分布図	7・8
挿図 4	T S H 1・2・4・5号住居址	10
挿図 5	T S H 6号住居址	12
挿図 6	T S H 7号住居址	14
挿図 7	T S H 8号住居址・土坑26	15
挿図 8	T S H 9号住居址	16
挿図 9	T S H 10号住居址	18
挿図10	T S H 12号住居址	19
挿図11	T S H 13号住居址	20
挿図12	T S H 11号住居址	21
挿図13	T S H 土坑1～4・6～11・24	23
挿図14	T S H 土坑5・14～19・23・32	26
挿図15	T S H 土坑12・13・20～22・25・33～38・55・56	29
挿図16	T S H 土坑27～31・39	32
挿図17	T S H Aトレンチ土坑40～46・52	36

## 図 版 目 次

第1図	T S H	1号住居址出土遺物	44
第2図	T S H	2号住居址出土遺物	45
第3図	T S H	2・4号住居址出土遺物	46
第4図	T S H	4号住居址出土遺物	47
第5図	T S H	5号住居址出土遺物	48
第6図	T S H	5号住居址出土遺物	49
第7図	T S H	6号住居址出土遺物	50
第8図	T S H	6号住居址出土遺物	51
第9図	T S H	6号住居址出土遺物	52
第10図	T S H	6号住居址出土遺物	53
第11図	T S H	6号住居址出土遺物	54
第12図	T S H	7号住居址出土遺物	55
第13図	T S H	7号住居址出土遺物	56
第14図	T S H	7号住居址出土遺物	57
第15図	T S H	7号住居址出土遺物	58
第16図	T S H	8号住居址出土遺物	59
第17図	T S H	8号住居址出土遺物	60
第18図	T S H	8号住居址出土遺物	61
第19図	T S H	8号住居址出土遺物	62
第20図	T S H	9号住居址出土遺物	63
第21図	T S H	9号住居址出土遺物	64
第22図	T S H	9号住居址出土遺物	65
第23図	T S H	9号住居址出土遺物	66
第24図	T S H	9号住居址出土遺物	67
第25図	T S H	9号住居址出土遺物	68
第26図	T S H	9号住居址出土遺物	69
第27図	T S H	9号住居址出土遺物	70
第28図	T S H	9号住居址出土遺物	71

第29図	T S H 10号住居址出土遺物	72
第30図	T S H 10号住居址出土遺物	73
第31図	T S H 10号住居址出土遺物	74
第32図	T S H 10号住居址出土遺物	75
第33図	T S H 10号住居址出土遺物	76
第34図	T S H 10号住居址出土遺物	77
第35図	T S H 10号住居址出土遺物	78
第36図	T S H 10号住居址出土遺物	79
第37図	T S H 12号住居址出土遺物	80
第38図	T S H 12・13号住居址出土遺物	81
第39図	T S H 13・11号住居址出土遺物	82
第40図	T S H 11号住居址・土坑3~8出土遺物	83
第41図	T S H 土坑9~15・17出土遺物	84
第42図	T S H 土坑17・19~21・23~26・28~31・35~38・41出土遺物	85
第43図	T S H 土坑42~45・47・50・51・53・54・56・6出土遺物	86
第44図	T S H 土坑8~10出土遺物	87
第45図	T S H 土坑10・12・13・17・23・24出土遺物	88
第46図	T S H 土坑25・27~29・38・39・50・51・54・56・6・遺構外出土遺物	89
第47図	T S H 遺構外出土遺物	90
第48図	T S H 遺構外出土遺物	91
第49図	T S H 遺構外出土遺物・表面採集遺物	92

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	下原遺跡調査区全景・遺構分布状況	94
図版 2	2号住居址・4号住居址・5号住居址	95
図版 3	6号住居址・7号住居址・8号住居址	96
図版 4	9号住居址・9号住居址炉址	97
図版 5	10号住居址・10号住居址埋甕	98
図版 6	12号住居址・13号住居址・11号住居址	99
図版 7	土坑群全景・土坑6・10・12・13・25	100
図版 8	1号住居址出土遺物	101
図版 9	2号住居址出土遺物	102
図版10	2号住居址出土遺物	103

图版11	4号住居址出土遗物	104
图版12	5号住居址出土遗物	105
图版13	5号住居址出土遗物	106
图版14	6号住居址出土遗物	107
图版15	6号住居址出土遗物	108
图版16	7号住居址出土遗物	109
图版17	7号住居址出土遗物	110
图版18	7号住居址出土遗物	111
图版19	8号住居址出土遗物	112
图版20	8号住居址出土遗物	113
图版21	9号住居址出土遗物	114
图版22	9号住居址出土遗物	115
图版23	9号住居址出土遗物	116
图版24	10号住居址出土遗物	117
图版25	10号住居址出土遗物	118
图版26	10号住居址出土遗物	119
图版27	12号住居址出土遗物	120
图版28	13号住居址出土遗物	121
图版29	11号住居址出土遗物	122
图版30	上坑1~9出土遗物	123
图版31	上坑12~15·21·23·24出土遗物	124
图版32	遗构外出土遗物	125
图版33	调查履景	126

# I 経 過

## 1. 調査に至るまでの経過

中央道西宮線飯田インターチェンジを持つ飯田市伊賀良地区は、都市計画道路運動公園通り（市道知久町中村線）の全線開通と国道153号飯田バイパスの一部共用開始により、大きく変貌し、飯田・下伊那における経済活動の中心が伊賀良地区へ移動することも考えられる状況である。この地区は、桑畠・果樹園を中心とした農業地域であり、その規模は飯田市近郊では比較的大規模な経営が行なわれている。

このような状況のもと、現在北方に工場をもつ株式会社平和時計製作所が業務拡張を目的に飯田市工業課を通して、県道駄科大瀬木線沿い伊賀良下殿岡372番地1他の17,500m<sup>2</sup>の工場建設のために造成し、その内の2,800m<sup>2</sup>に新工場を建設するとの開発行為の計画を示した。

この場所は、埋蔵文化財包蔵地として登録されており、開発も大規模なため、これを受けた市教育委員会では、県教育委員会文化課担当職員の立会いを求めて、現地で保護協議を実施した。

その結果、試掘調査を実施し、その結果により本格的な発掘調査の要否を決することとした。これを受けて、昭和62年10月3日に株式会社平和時計製作所（代表取締役社長宮下秀夫）より埋蔵文化財包蔵地下原遺跡内における土木工事の届出があり、これに対して、市教委では、「開発やむなし、しかし、完全な記録保存を」との意見書を文化庁あてに提出した。（吉川農）

## 2. 調査の経過

関係機関の協議・調整を経て、昭和62年12月8日より試掘調査にはいった。試掘としては、造成計画用地境及び用地の中心に1.5m幅のトレンチを合計9本設定し、さらに、用地西隅には2×2mのグリッドを4箇所あけた。（挿図2参照）その結果トレンチより遺物の出土とともに遺構が確認され、この一帯の遺構分布状態はかなり濃密であろうとの判断を下した。そこで、再度の協議により、用地の造成については、土0.5m程度であり、地下まで影響することないと判断したものの今後建物等の施設を建設するときには発掘調査を実施することとの確約を取付け、今回の建物部分（2,800m<sup>2</sup>）の全面発掘を行なうこととした。

建物部分をトレンチで言うと、県道駄科大瀬木線沿いに道路と平行に開けたAトレンチ、用地の東端で道路に直行する方向にあけたB・Eトレンチ、用地中央部で道路と直行する方向に開けたC・Fトレンチ及び用地南境で平行方向にあけたIトレンチに囲まれた部分である。（挿図3）

参照)

早速、重機にて表土を剥ぎを開始したのが12月12日。表土剥ぎと平行してトレンチ内の遺構の掘り下げ、実測及び写真撮影を行なった。

建物部分の検出を開始したのは12月15日からで、7件の住居址・1つの竪穴及び56個の土坑を確認し、順次掘り下げ・写真撮影・実測を行ない、現場の作業を終了したのは、暮もおしまつた12月27日であった。

整理作業は、翌昭和63年度になってから上川路の飯田市考古資料館で、遺物・図面・写真的整理、出土土器等の実測及び報告書の編集を行なった。

(吉川 豊)

### 3. 調査組織

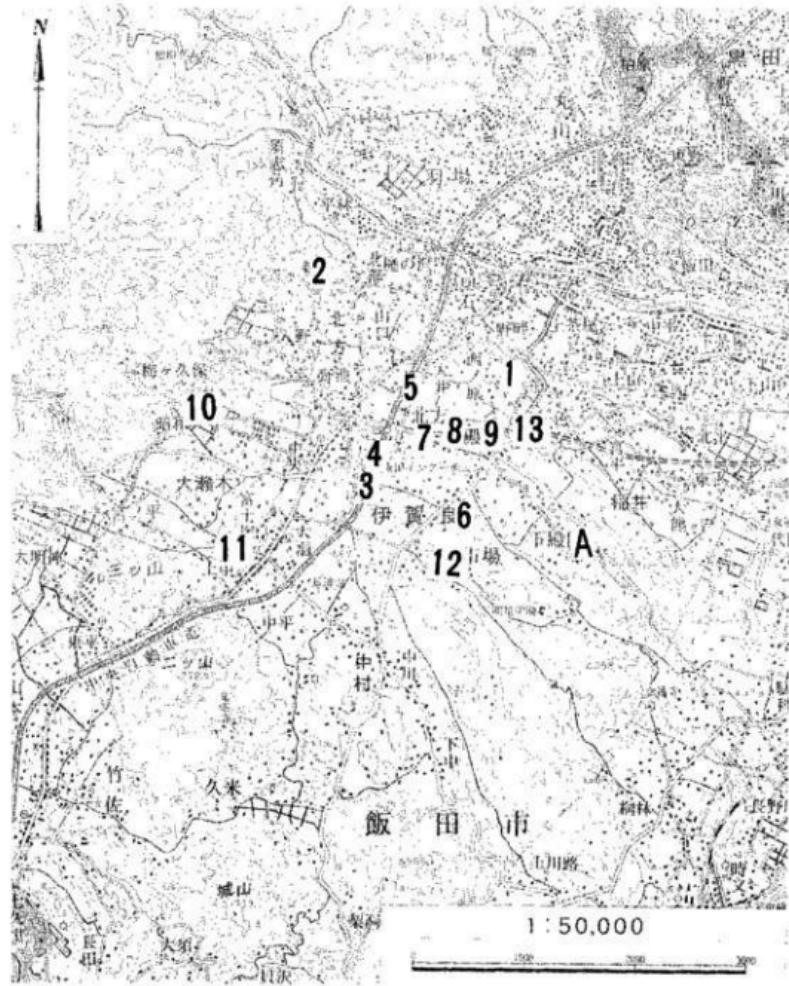
#### 1) 調査団

調査担当者	小林 正春	佐合 英治	吉川 豊	馬場 保之
調査員	佐々木嘉和	北村 重実	木下 和子	木下喜代恵
作業員	大島 利男	木下 当一	佐々木 啓	木下 傳
	高橋収二郎	窪田多久三	高木 義治	高橋 寛治
	松下 真幸	中平 隆雄	福沢トシ子	正木実重子
	池田 幸子	溝上 清見	細田 七郎	柳沢 謙二
	鷲原 勝子	向田 一雄	森 章	木下 紗子
	福沢 育子	川上みはる	河尻真美珠	林 勢紀子
	吉川 悅子	小平不二子	丹羽 由美	宮内真理子
	牧内 八代	田中 恵子	松本 恵子	森 信子
	吉川 紀美子	吉沢まつ美		

#### 2) 事務局

##### 飯田市教育委員会社会教育課

塩沢 正司	(社会教育課長)	昭和62年度
竹村 隆彦	(社会教育課長)	昭和63年度
池田 明人	(社会教育課文化係長)	昭和62年度
中井 洋一	(社会教育課文化係長)	昭和63年度
小林 正春	(社会教育課文化係)	
吉川 豊	(社会教育課文化係)	
馬場 保之	(社会教育課文化係)	
土屋 敏美	(庶務課)	



**A 下原遺跡**

- 1 西の原遺跡
- 2 立野道路
- 3 酒屋前遺跡
- 4 滝沢井尻遺跡
- 5 上の金谷道路
- 6 中島平遺跡
- 7 小坂外遺跡
- 8 八幡面遺跡
- 9 殿原遺跡
- 10 梅ヶ久保遺跡
- 11 島平遺跡
- 12 宮ノ先遺跡
- 13 田井庄遺跡

挿図1 調査遺跡位置及び周辺遺跡図

## II 遺 跡 と 環 境

### 1. 自然環境

下原遺跡は飯田市下殿岡下原に位置する。下殿岡は昭和32年度飯田市合併前は伊賀良村下殿岡で、飯田市街地の南約2kmにある。伊賀良地区の大部分が、中央アルプス南端の山麓に発達した大扇状地上に位置する。この大扇状地を数本の河川が浸食しており、扇状地中央付近からは舌状台地が発達して地形に変化が生じている。

下原遺跡は扇状地の端部に近く、標高520m前後であり北東側は気賀沢川に切られ河床まで約40m、南西側は新川に切られ河床まで約30mと、共に急傾斜の崖になっている。扇状地端に発達した大舌状台地上の遺跡である。台地上は緩やかな起伏はあるが平坦といって良く、黄色土（ローム層）に黒色土が100~50cmのっている。黒色土中には石の混入は無く、黄色土の下層になって大小の石が混入している。

土地利用の現状は農地が主体であり、宅地工場等が散在している。農地は桑園、果樹、水田であり、水田は飯田松川から取水した大井が通っておりその水を利用したもので、台地の中央から南西側である。

気候は台地上の為、風当りは強いが伊那谷の中央部に近く、比較的温暖な場所である。

(佐々木嘉和)

### 2. 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全城が埋蔵文化財の包蔵地といつて良く99遺跡を数える。調査がなされた遺跡は西の原（注1）、立野（注2）、よ志野、上の平東部、寺山、六反田、大東、酒屋前、滝沢井尻、小垣外（辻垣外）、三瀧淵、上の金谷（注3）、中島平（注4）、宮ノ先（注5）、酒屋前（注6）、鳥屋平（注7）、岐原（注8）、八幡面、小垣外（注9）、梅ヶ久保（注10）遺跡などである。

縄文時代から中世まで各期の好資料、遺構が発見され飯田・下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地区といえる。

特に立野遺跡は戦後間もなくから数度の調査がなされ（注2）、立野式土器の様式認定により、長野県を代表する縄文時代早期の遺跡である。しかし、遺跡は耕地整備・土取り工事等により消滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴なう各遺跡の調査では各期の住居址等が検出され扇状地中央の遺跡状態が明

確にされた。

伊賀良地区の古墳は52基（注11）を数える。現存するものは9基であるが、墳丘をわずかに残すものが大半である。古墳の分布は扇状地端部がほとんどである。

奈良時代に入って、古代東山道に「育良駅」の名がある。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるがその所在は確認されていない。伊賀良地区内のどこにあると思われ、その位置については諸説がある。諸説共に中央自動車道から南東側の扇状地端部にかけて設定されている。（注13）

中世に入ると伊賀良庄の記録（注13）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が、北条時政で江馬氏が司り、北条氏滅亡後は、小笠原氏の所領となり（注13）、小笠原氏繁栄の基盤のひとつとなった地区である。

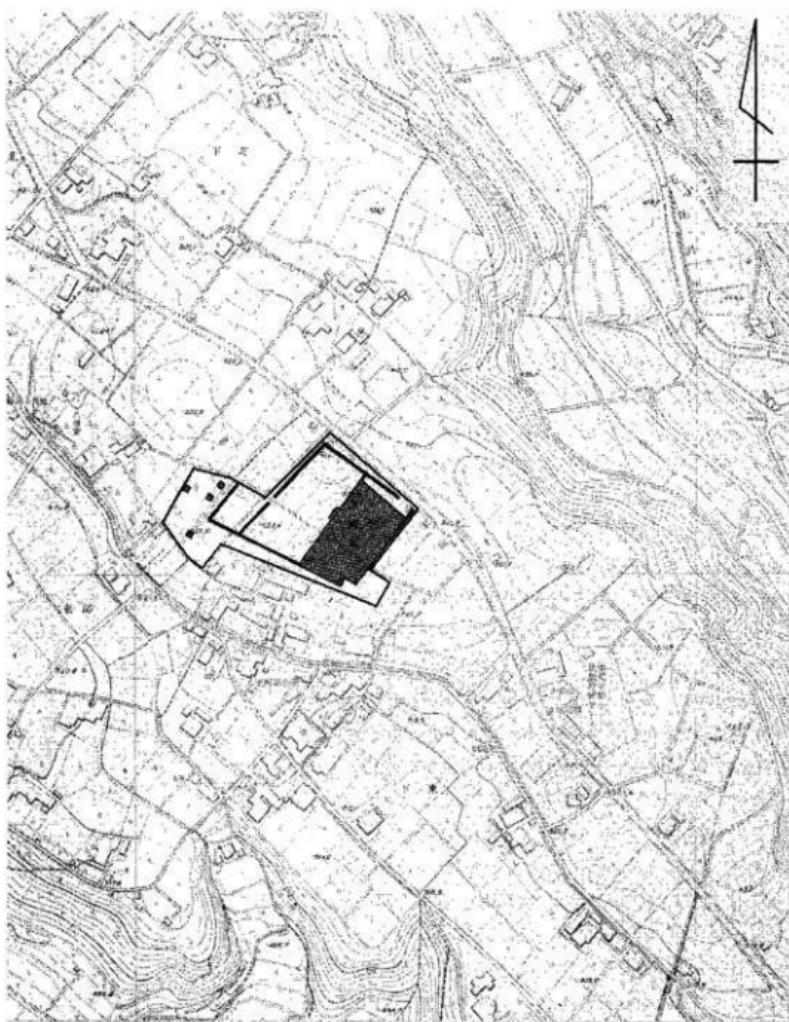
この様に伊賀良地区を歴史的に概観すれば広大で肥沃な地であり、原始より古代・中世・近世・近代・現代と大いに栄えた地ということができる。

なお今回調査の下原遺跡は、古くから遺物散布地として知られ登録記載されているが、発掘調査は行なわれておらず、今回の発掘調査が行なわれるまでは具体的な状況は不明であった。

（佐々木嘉和）

#### 注

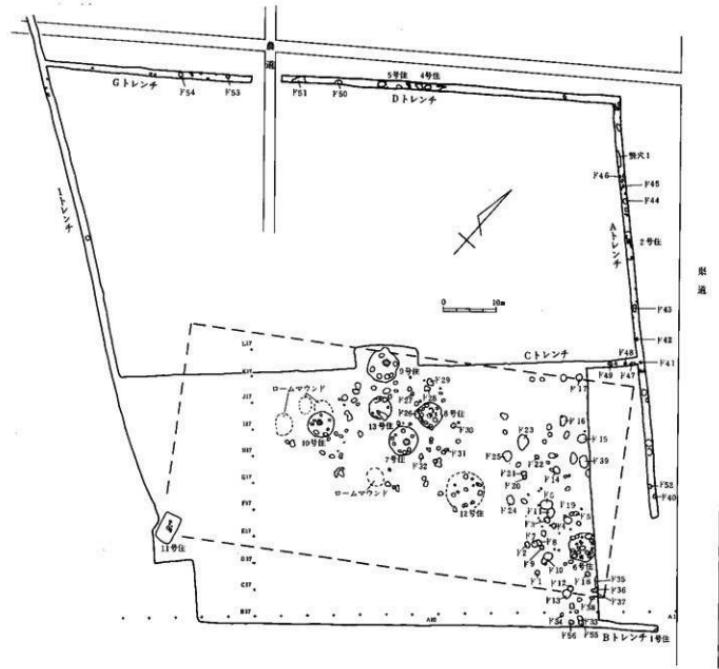
1. 伴信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西の原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
2. 神村透 1968、69 「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号  
1982 「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
3. 岡田正彦ほか 1972 「中央道調査報告一飯田市内その2ー」長野県教育委員会
4. 佐藤魁信 1977 『伊賀良中島平』飯田市教育委員会
5. 佐藤魁信 1978 『伊賀良宮の先』飯田市教育委員会
6. 佐藤魁信 1983 『酒屋前遺跡』飯田市教育委員会
7. 佐藤魁信 1983 『烏屋平』飯田市教育委員会
8. 佐藤魁信 1987 『般原遺跡』飯田市教育委員会
9. 佐藤魁信 1988 『小垣外・八幡面遺跡』飯田市教育委員会
10. 小林正春 1987 『梅ヶ久保遺跡他』飯田市教育委員会
11. 長野県史刊行会 1981 『考古資料編一遺跡地名表』
12. 市村成人 1955 「下伊那史」第2巻下伊那誌編纂会
13. 市村成人 1961 「下伊那史」第4巻下伊那誌編纂会
14. 宮下操 1967 「下伊那史」第5巻下伊那誌編纂会



調査区

1 : 5,000  
0 200m

擇図2 調査位置及び周辺地図



挿図3 TSH 調査区遺構分布図



### III 調査の結果

#### I 住居址

##### 1) 縄文時代

###### (1) 1号住居址 (挿図4、1図)

Bトレント東端にかかる、地表下70cm程の地山上面で遺構のごく一部が検出された。規模等詳細は不明であるが、円形を呈する竪穴住居址と考えられる。トレント中央の浅い掘り込みは掘りすぎによるものである。壁はかなり急な立ち上がりを示し、深さ42cmを測る。壁下にやや硬い床面が検出された。

遺物 1は器面がやや荒れる。3・6とも内面はきれいにナデが施され、3は外面横ナデ後に平行沈線文が施文される。7・8・10は、原体RLの縄文が施文され、8は条が縱走し、10は細かい筋である。1・2は勝板式、3・4は平出Ⅲ類aに、7~10は、唐草文系土器の後半に比定される。11は硬砂岩製で、基部を欠損し、刃部及び側縁に調整の施される肉厚な石器である。12は硬砂岩製の横刃型石器で左半を折損する。本址出土遺物は縄文時代中期中葉のものが主体的で、中期後葉終末の遺物は混入と考えられ所属時期も前者に求められる。 (馬場保之)

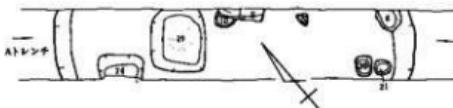
###### (2) 2号住居址 (挿図4、2図・3図1~8)

Aトレントの北寄りで確認された。径約5.1mの円形を呈する竪穴住居址と考えられる。主軸方向は推定N48°Wを示す。本址中央部はやや低くなつておき周辺に比して硬く締っている。壁はゆるやかな立ち上がりを示し、調査した範囲で周溝は確認されていない。本址に伴なうビットは5つが検出されているが、いずれが柱穴を構成するか不明である。中央より北西寄りに検出された方形の掘り込みは、中央部に焼土が認められ、炉と考へられる。炉石の抜き取り痕は確認されなかつたが平面形等から石組炉であると考へられる。あるいは本址中央トレント壁下に検出された柱状の石が炉石の一部にあたるかもしれない。炉址西側の穴は深さ74cmを測る。

遺物 第2図1は無文の鉢形土器で外面にミガキ状の光沢があり、内面に接合痕をとどめる。2・3は口縁部の無文帶である。7は内面に屈曲をもつ。唐草文系の土器は主要モチーフが沈線で描かれるもの(5・6・12・13)、縞帶で描かれるもの(10)、陰沈線で描かれるもの(9・11)があり、いずれも結節縄文が充填されるなど中期後半でも後出的な様相を示す。 (馬場保之)



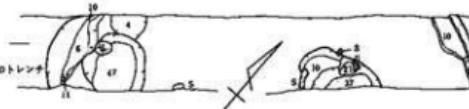
1 9m



2 9m



4 9m



5 9m

擇図4 TSH 1・2・4・5号住居址

### (3) 4号住居址 (挿図4、3図9~14・4図)

本住居址はDトレンチほぼ中央で確認された。1m幅のトレンチ調査の為全体形は不明と言わざるを得ない。壁はやや急に立ち上がり壁下に部分的に幅広の周溝が検出された。本址に伴う穴はおむね30cm内外の深さであるが、明確に柱穴と判断されるものはない。

遺物 本址からは唐草文系の土器のほか、打製石斧、敲打器、磨石、石錘、横刃型石器等、多様な石器群が出土した。第3図11は外面に縦方向のミガキ痕を顯著に残す。地文はR L繩文が多く(14、第4図1・2)いずれも縦位施文である。第4図6は青黒色を呈し定かでないが粘板岩製と思われる。7は緑泥岩製、両側縁に細かい調整が施され、刃部に擦痕を認める。8は硬砂岩を素材とし、両側に粗い剥離痕を残し、刃部を折損する。10は先端が顯著に潰れる。11は花崗岩製で表面に擦痕が僅かに残る。13~15はいずれも粗い剥離面を残しており、13は緑泥岩、14・15は硬砂岩製である。

出土遺物等から繩文時代中期後葉後半に比定される。

(馬場保之)

### (4) 5号住居址 (挿図4、5・6図)

Dトレンチ西側、4号住居址に接して検出された。詳細は不明であるが規模は推定6m、円形を呈する竪穴住居址である。床面はほぼ平坦であるが、貼床はなくあまり締っていない。北東壁に比して南西壁はゆるやかな立ち上がりを示し、周溝についても同様である。周溝の幅は一定せず幅広の部分と狭い部分があるが、深さは割合一定している。中央より東壁寄りに検出された二段掘り込みのピット中央付近に焼土がみられた。

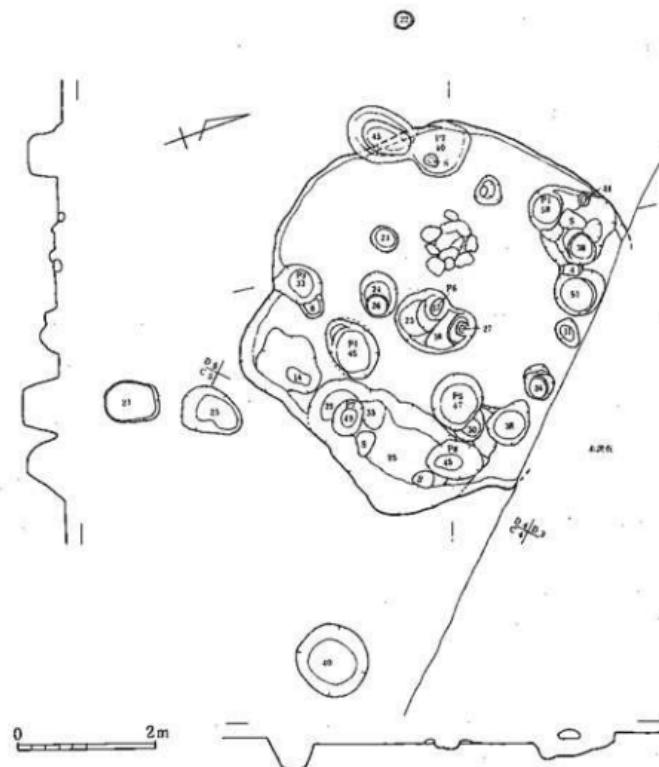
遺物 第5図1は刻みの施された陰帶および沈線+刺突で区画された楕円文で構成され、楕円文内に繩文が充填される。3は約手土器の約手部分で刺突によりモチーフが描かれる。2、4はそれぞれ隆沈線、沈線で区画文が描かれ、地文に繩文が施文される。8は竹管によって横位の平行沈線が浅く施文された土器で平出Ⅲ類aに比定される。9はほぼ完形の鉢形土器で把手及び口縁部に押引き沈線により藤手状の文様が施文される。器面の著しく荒れた砂粒を多く含む土器である。第6図3~7は隆沈線によって区画され、3・4・7は陰带上に刻みが施される。他に綫杉状沈線(13)、蛇行沈線(10)、結節繩文(11)が施文される土器がある。14~19は打製石斧で、14を除いて他は緑色岩素材である。14は刃部に自然面を残し、身中央で最大幅を示す。15は刃部に擦痕をとどめる。20・21はいずれも硬砂岩製の横刃型石器で、20は刃部に微妙にロー伏光沢が認められる。21は左端を折損しており、刃部には二次調整が加えられる。

出土遺物等から本址は繩文時代中期後葉に属すると考えられる。

(馬場保之)

(5) 6号住居址 (挿図5・7~11図)

調査区東隅近くのD4グリットに検出した。調査区外にかかり、穴に切られる。直径はほぼ5.4mを測る、不整円形の窪穴住居址であり、主軸方向はN85°Wである。検出面から床まで10cm余と浅く、壁はやや緩く傾斜している。床面は平坦で堅く良好であった。主柱穴の確定はできないが、壁ぎわにあり、比較的大きな平面形を有し、床面から30cm以上を測る穴P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>が該当する可能性が強い。また炉の東側にある住居址のはば中央P<sub>6</sub>は床面から57cmを測り主柱穴に加える事も可能であろう。東側壁下P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>は入口部施設であり、入口部が張り出す形態かもしれない。



挿図5 TSH 6号住居址

両方共そばに石が検出された。P<sub>1</sub>のそばの石は石皿である。炉は石組で床面中央からやや奥壁よりに位置し、床をわずか掘り凹め、30~20cmの石を方形に並べてあり、抜かれた石もある。炉の底部は良く焼けており、厚さ10cm前後の焼土化が認められる。炉南側には炉内より引き出したと推測される焼土が、床面より3cm前後の高さに検出された。

遺物 土器の出土量は比較的少なく、器形の確認できるものも少ない。土器を概観すると、口頭部が無文で頸部以下体部に施文を持つものが多い。7図1は口頭部が無文で頸部が一段ふくらみ、特異な装飾帯を持っている。5も同様式の深鉢形土器であり、勝坂式系である。7図2・4 8図4・8~17は井戸尻Ⅲ式系である。9図7・8・9は平出Ⅲ類a系である。

石器の出土量は多く打製石斧・横刃型石器・石鎌・石錐・敲打器・使用痕の残る円錐・石皿など出土している。打製石斧は緑泥岩製（9図28~30・10図1~5、7~9）と硬砂岩製（9図27・10図6・8）があり緑泥岩製がほとんどであって、刃部に著しい使用痕を残すものもある。横刃型石器（10図11~13・11図1）はすべて硬砂岩製であり、11にはわずかであるがロー状光沢が残っている。石鎌（11図2）は玻璃質安山岩製で、不整形な仕上げである。石錐（11図3・4）は硬砂岩で打ち欠いた4と、フォルンヘルス製の3がある。敲打器（11図5・6）は平面部に敲打痕の残る5、花崗岩で使用痕のハッキリしない6がある。砥石（11図7）と推測したきの細い硬砂岩錐は、平面に使用痕が残っている。

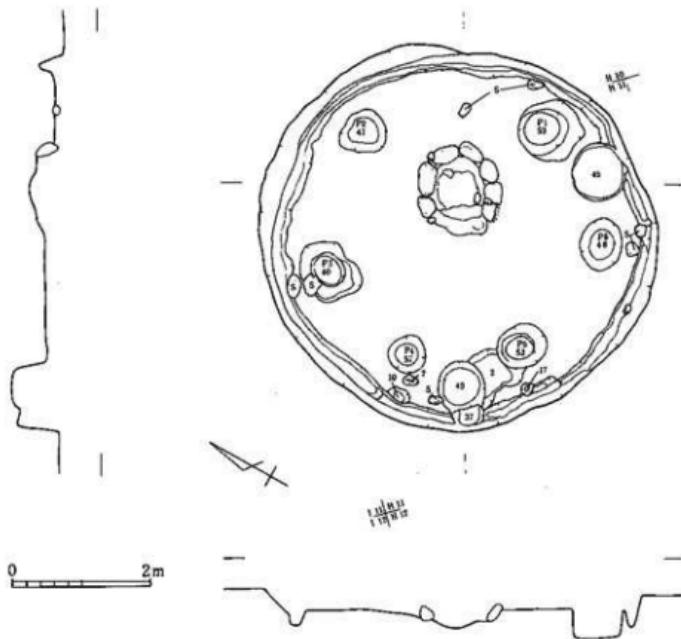
（佐々木嘉和）

#### (6) 7号住居址 (挿図6・12~15図)

調査区北西側中央付近、Hリグリットに検出した。直径5.6mの円形堅穴住居址であり、主軸方向はN61°Eを測る。検出面から20cm前後の壁高があり急傾斜である。床面は奥壁から入口部方向に緩く傾斜しており、凹凸があったが堅く良好である。周溝は壁直下を全周しており、床面から20~10cmの深さである。主柱穴は6本P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>で、深さも57~41cmとそろっている。入口位置両側のP<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>間は他に比べてやや狭く、壁側周溝ぎわに小穴を伴なっている。この主柱穴間中央壁ぎわに穴が検出され、深さは50cmであるが使用目的は不明である。炉は石組で、床面中央からやや奥壁寄りに位置する。床を掘り凹め石を長方形に設置しており、抜かれた石もある。炉の中央は緩く凹み床面から30cmの深さである。

遺物 土器の出土量は他の住居址に比較して少ないが、ほぼ完型で無文（12図1）の1個体の他に、ほぼ器形の確認できるものが3個体ある。櫛状工具による条線文を地文に、沈線文を施した（12図5~7・13図6・7）ものと、条線文（12図8~10）のみの破片があり、条線地文がこの住居址の特徴である。出土位置はほとんどが床面に接している。1・12は床面に倒れた状態であり、11は伏っていた。5・6の体部に波状沈線を施すのは、東海地方の土器の影響を受けたものと考えられる。土器製円板（13図10・11）が2個出土している。

石器は打製石斧・横刃型石器・敲打器・砥石などが出土している。打製石斧（13図12・13）は



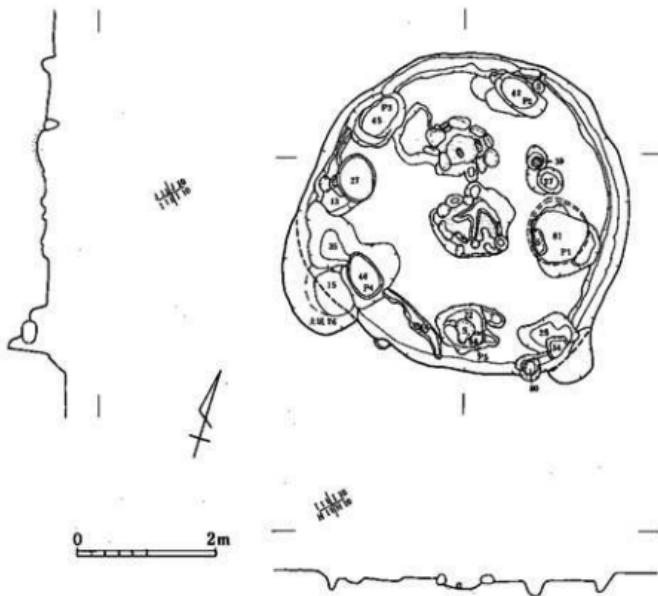
挿図6 TSH 7号住居址

2個と少なく、12は緑泥岩製13は硬砂岩製である。横刃型石器（13図14～17・14図1～13）は打製石斧に比較してその量は多く、ほとんど硬砂岩製で緑泥岩製（14図2）は打製石斧の可能性もある。敲打器（14図14・15）には磨痕が残っており、14は硬砂岩精円錐で平面に著しい磨痕があり、周辺に敲打痕が残る。15は緑泥岩で磨痕はわずかである。砥石（15図3）は砂岩で著しい使用痕があるが、破損しており全体形は不明である。花崗岩の丸い石（15図1・2）が出土しているが性格は不明である。P<sub>3</sub>のそばから石皿が出土しているが、図版の都合で割愛した。

（佐々木嘉和）

#### (7) 8号住居址 (挿図7・16～19図)

7号住居址の北、J10グリットに検出し、土坑26に切られる。直径4.6mではほぼ円形の竪穴住居址であり主軸方向はN17°Wを測る。検出面から25～10cmの壁高があり傾斜には緩急がある。床面は奥壁から入口方向に10cm緩く傾斜しているが堅い。周溝は南側に検出されなかったが、壁下



挿図7 TSH 8号住居址・土坑26

3分の2で確認した。床面から10cm前後の深さがあり巾は比較的広い。主柱穴は5本と推測され、P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>であるが深さは70～40cmと差が著しい。入口部はP<sub>5</sub>付近と推測したが施設と確認できるものはない。炉は新旧2個が検出され、中央に位置するものが古い。焼土は床面とほぼ同じ高さで、周囲に不規則な穴が検出され、石組炉であったと推測できる。新しい炉は古い炉の北側で床を少し掘り凹め、石を不整梢円形に並べており雑な作りで、石を抜いた所もある。炉の中央は緩く凹み最深部は16cmを測る。

遺物 土器の出土量は多く器形の推測できる3個体がある。地文に縄文と柳状工具による条線文を施し、沈線文で飾る個体が多い。破片には勝坂・平出Ⅲ類a・井戸尻Ⅲ式などがある。16図1の地文は縄文であるが器面が荒れ、残っている部分は少ない。2は半裁竹管による条線文であり、3は柳状工具による条線文を施し、沈線文で飾る。ミニチア(19図4)はていねいに作られ、波状口縁で完形である。

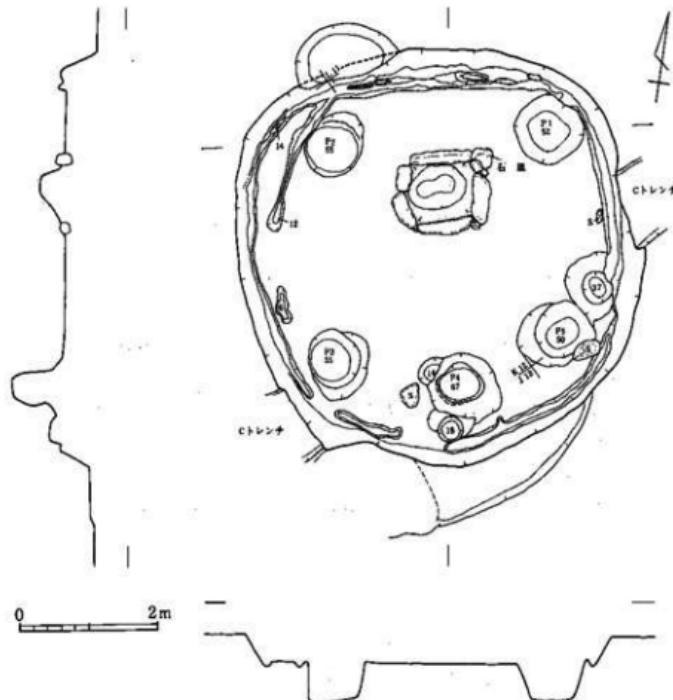
石器は比較的少なく打製石斧・横刃型石器・石錐・石皿などである。打製石斧(19図5～8)は緑泥岩製(6・8)と硬砂岩製(5・7)であり、使用痕の著しいものである。横刃型石器(19図9～13)で緑泥岩製は1個のみで他は硬砂岩製である。石錐(19図14)は緑色の変成岩隕を

打ち欠いている。石皿（19図15）は花崗岩で少し破損している。凹みはまったくなく一面がよく擦れている。

（佐々木嘉和）

⑧ 9号住居址 （挿図8・20～28図）

試掘Cトレンチにかかり確認、K11・12グリットに位置する。土坑状の穴、試掘Cトレンチに壁を切られる。5.8×5.6mの不整5角形の堅穴住居址である。主軸方向はN10°Wを測り、壁高は検出面から40cm余りあれば垂直である。床面は平坦で堅く良好であり、周溝は壁下にはば全周検出した。部分的に切れる所、2重になる所があり、深さは10～2cmで凹凸がある。主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>の5本であり、掘り方は大きく深さも50cm前後ある。P<sub>4</sub>の西側には石皿（28図2）が出土した。P<sub>5</sub>と周溝の間には長さ40cm巾20cm弱の石が出土し、何らかの意味を持った石と考えられる。P<sub>4</sub>と壁の間に深さ15cmの穴を検出したが、入り口部の確認はできなかった。炉は石組で中央から



挿図8 TSH 9号住居址

北寄りに位置し、ほぼ方形で大きな石が使用され、北東隅に石皿利用の副炉が設けられている。石組の石は床面から10~4cm出た状態であり、内側は石のそばで床面から20~10cm低く、中央は緩く凹み深さ30cmを測る。

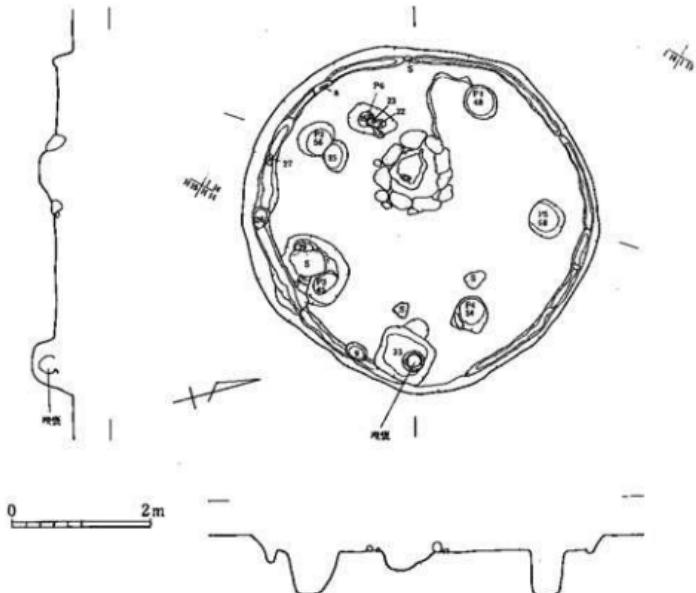
遺物 土器の出土量は多く器形の確認可能なものは数個体あるが、完形になるものはない。深鉢型土器は唐草文系で、結節縄文の施文が特徴である。20図1~8は口頭部が外反し、沈線の渦文で区画し、結節縄文を施している。20図9~17は口頭部体部共に沈線文で区画し結節縄文を施す。21図の土器片は、ほぼ全部同じ施文方法で、口頭部は無文で体部との間を刺突文で区切り、体部は懸垂する沈線文の間に結節縄文を施す。22図8の底部には木ノ葉痕が残っている。23・24図の破片は加曾利E式土器がほとんどである。24図15・16は浅鉢形土器であり、18は器台である。14も器台片と思われる。19は無文の耳栓である。

石器は磨製・打製石斧・横刃型石器・敲打器・砥石・石錐・台石などである。磨製石斧（24図20~22）は3個出土しており、共に緑泥岩製で23は乳棒状石斧の破損であろう。打製石斧（24図23・25図1~8）は硬砂岩製25図1・3・4・7と緑泥岩製24図23・25図5・6・8があり25図2は安山岩製と思われる。23は先端が突り擦痕が著しく、他にも擦痕の残るものがある。横刃型石器（25図9~18・26図1~5）はほとんどが硬砂岩製であるが、10・12・18が緑泥岩、9は粘板岩質であり、12には著しい使用痕が残っている。敲打器（26図8~13・25図1）は大小様々であり、擦痕の残ったものも含まれ、砥石に利用されたものであろう。石錐（27図2・3）は硬砂岩の椎円錐を打ち欠いている。砥石（27図4・5）は砂岩製で使用痕が著しい。台石（27図6）は花崗岩の円錐で使用痕らしい凹みが残っている。28図1は炉の北東隅に置かれた石皿の半欠品で、副炉に利用したものであり、花崗岩である。2も偏平な石皿で、入口部分から出土し花崗岩である。3は石質・性格共に不明であるが、白く軟かい石で四面共に切り出して整形してある。

（佐々木嘉和）

#### (9) 10号住居址 （挿図9・29~36図）

I14グリットに検出し、10号住居址より古いロームマウンドを切っており、5mのほぼ円形の竪穴住居址である。主軸方向はN74°Wを測り、壁高は検出面から20cm前後で、比較的急傾斜である。床面は平坦で堅く良好であったが、炉の北西側がロームマウンド周囲の黒土のため不明確であった。周溝は壁下にはほぼ全周確認し、巾はやや狭く深さは20~3cmと差が著しく、所々で穴状になっていた。主柱穴は5本でP1~P5である。掘り方は50~40cmと小さめで、深さは68~45cmである。P5のそばから48×40cmの偏平な石が出土した。P5は底まで20cm余で浅いが、緩い傾斜の壁は叩き締められた様に堅くなっていた。入口部は埋甕出土付近と推測されるが、施設らしいものは検出されなかった。炉は中央からやや西寄りに位置し石組であり、床面を少し凹め石を不整方形に並べている。石の上面は床面から10cm前後出ており、内側は緩く凹み床面から20cmの深さで、良く焼けていた。埋甕は東側壁下に正位で埋められていたが、底は無く蓋石も無かった。甕を入



挿図9 TSH 10号住居址

れた穴はほぼ方形で壁に接して掘られている。

遺物 土器の出土量は多く、ほぼ器形の推測できるものは5個体あり大形のもの3個体が含まれる。29図は大形の深鉢形土器で、口頭部が外反し口唇部が内側に水平に近く折れ、緩い波状口縁になっている。平面的には8角形の口縁であり口唇部8箇所に、S字形の隆線文を持ち間を竹管による押し引き文・刻突文で埋めている。口頭部にも8箇所の下垂する竹管押し引き文を施している。これと同様な施文を持つものは、31図1で体部は櫛状工具による条線文である。30図1は隆線文と沈線文が主体で、把手が着く。隆線文の間は竹管による押し引きと条線文、体部の下垂する沈線文の間は条線文で埋めている。これと同様な個体は32図20図の把手、31図5の体部がそうであろう。30図2は埋壺であり、櫛状工具による条線文と沈線文で飾っている。32図の破片のほとんどは条線文のみの施文であり、33図の破片はいずれも中期後葉段階の土器である。31図7・8はミニチアで、8は炉の中から出土しており極めて小さい。

石器は磨製・打製石斧・横刃型石器・敲打器・石錐・凹石・摺り石・石皿などである。34図1・2は磨製石斧の半欠品で、1は乳棒状石斧であり、1・2共に石質は不明である。34図3～8は打製石斧で、3・6・8が綠泥岩製、他は硬砂岩製であり使用痕の著しいものもある。横刃型石

器（34図9～15・35図1～12）は4の粘板岩製をのぞいてすべて硬砂岩製であり、使用痕の残るものもある。35図13は黒曜石であり石核と推測した。14は硬砂岩礫を打ち欠いた石錐である。15・16は敲打器で15は緑泥岩16は花崗岩である。36図1～4はすべて花崗岩礫で、使用痕、凹みが残るものがある。5は石皿で花崗岩である。

（佐々木嘉和）

#### （10）12号住居址 （挿図10 第37図・38図1～7）

E 9 グリット付近において、土器、石器及び焼土が出土し、それを囲む形でピットを検出したため、住居址とした。形態からみて5本柱とみられるが、主柱穴が確定できず主軸方向は不明である。

推定で  $6.3 \times 5.8 m$  の円形を呈するものと考えるが、検出時に深く掘りすぎたため、壁は残存しておらず、周溝もない。床はやわらかく不明瞭である。焼土を認めた場所を炉としたが形態は不明である。

遺物 出土遺物としては、土器片（第37図1～11）がある。そのうち2、3は胎土及び施文から同一固体であり、また1、5、6、10、11は平出Ⅲ類aの土器である。石器は、乳棒状石斧（第37図12）は、緑泥岩製ではあるが基部のみ出土、打製石斧（第37図13～18）が6点出土した。そのうち硬砂岩製のものには、完形で比較的薄い13と、幅広の16の2点が、緑泥岩製のものには刃部のみが厚い14、基部は欠損しているが、刃部先端にごくわずか摩滅痕が残る15、完形の17の3



部のみが厚い14、基部は欠損しているが、刃部先端にごくわずか摩滅痕が残る15、完形の17の3点が、また、硬質の泥岩製の18は刃部が欠損している。その他に硬砂岩製の横刃型石器（第37図19～24・第38図1）7点のうちには、ごく薄く背部にも調整面を残す19、刃部に顯著な調整面がみられる21・22や刃部に摩滅痕をもつ24もみられる。敲打器（第38図2、3、5）3点、硬砂岩で全体に剥離面が残っているが用途は不明の石器（第38図4）、花崗岩製の摺り石（第38図6）と敲打器を凹み石として使用したとみられるもの（第38図7）も出土している。（吉川 豊）

### (II) 13号住居址 (挿図11・38図8～18・39図1～3)

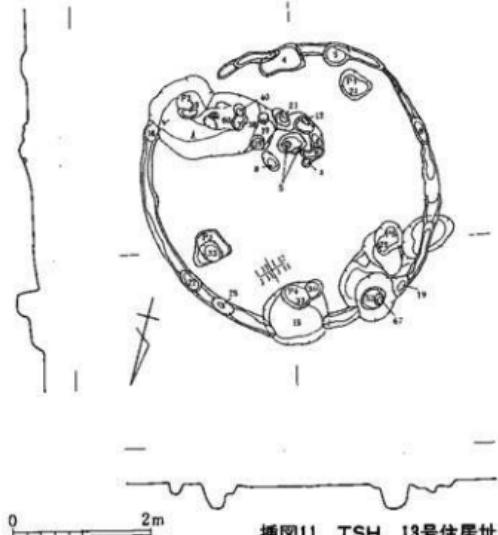
検出時に周溝を確認13号住居址とし、I12グリットに位置する。周溝外側で4.3m前後を測り、方軸方向は他の住居址と炉の位置が異なり、南壁側にあってS29°Eである。検出面の黄褐色土に周溝を確認したので、壁は確認できなかったが、堅穴住居址と推測される。床面は平坦で堅く良好であり、周溝はほぼ全周確認した。巾20～5cm深さ15～3cmで部分的に深い所がある。主柱穴は5本と推測しP1～P5であるが、深さは30cm前後とやや浅い。P3P4間で周溝中の穴が入口施設と考えられる。炉は新しい穴に切られているが、中央から南側に位置し、石は抜かれており、炉の中央は緩く凹み床面から10cmを測る。良く焼けた周囲に石の入っていた穴があり、不整円形の炉と推測される。

遺物 検出面が床面となり、出土量は少ない。38図8の深鉢型土器は、口頸部が外反し口縁部

が内側に緩く折れる。口縁部に沈線の溝文を施こし、地文は条線文であり、15も同類であろう。

石器は打製石斧、石錐、敲打器、摺り石などである。打製石斧（38図17）は緑泥岩製であり、石錐（38図18）は硬砂岩礫を打ち欠いている。39図1～3は敲打器兼用の凹石、摺り石で、1、3が花崗岩2は安山岩で使用痕が著しい。

（佐々木嘉和）



挿図11 TSH 13号住居址

## 2) 弥生時代

### (1) 11号住居址 (挿図12 第39図4~14、第40図1)

試掘時にIトレンチの東端で確認した住居址である。建物建設予定地の南端にあたるため範囲を拡張し、検出、掘り下げを行なった。

平面プランは $5.5 \times 3.4\text{m}$ 隅丸方形で、いくぶん縱長であり、主軸方向はN $19.5^{\circ}\text{W}$ を示す。床面は良好な貼床になっており、ほぼ中央部には焼土を伴う $70 \times 60\text{cm}$ の不整楕円形で深さ8cmの落ち込みがあり、地焼炉とした。

形態からみて4本柱と考えたが、東隅で $16 \times 12\text{cm}$ のはば円形、深さは7cmの穴を検出したため、これを主柱穴の一つとした。しかし、他の3本は検出できなかった。

周溝は、北側の壁下ではほぼ全域に長さ $2.4\text{m}$ 幅 $14\text{cm}$ 深さ $4 \sim 2\text{cm}$ 、東壁下では、中央付近に長さ $1.1\text{m}$ 幅 $10\text{cm}$ 深さ $2\text{cm}$ で残っている。また、南壁下も中央付近で長さ $90\text{cm}$ 幅 $20\text{cm}$ 深さ $3\text{cm}$ のものが両側に小穴を伴って残っている。西側は小穴が数個あるが、周溝は残っていない。

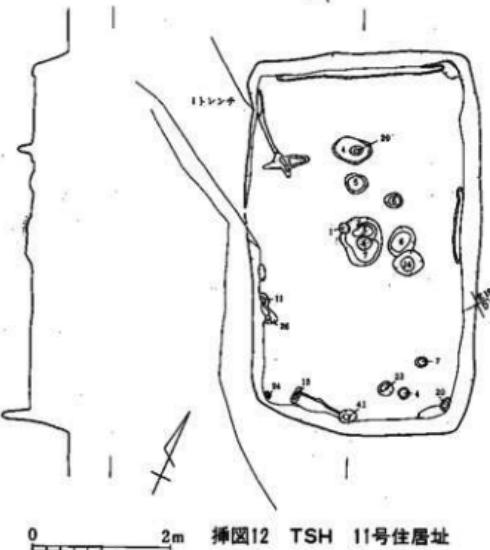
壁はIトレンチにかかった西側半分は残っていないが、その他の壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物 漆黒色をした覆土から出土した土器は少ない。箇削りによる調整痕がみとめられる甕の下部(第39図10)、小片ではある

が甕の口縁(第39図4~7)、このうち4には波状文がみられる。甕の口縁(第39図8)および波状文を施した小破片(第39図9)がある。また、石器としては、硬砂岩製の構刃型石器(第39図11)、打製石斧(第39図12、13)2点、硬砂岩製で節理面を顕著に残す12と、緑泥岩製で全体的に磨かれている13がある。他にも花崗岩の擱り石(第39図14)・同じく花崗岩の石皿(第40図1)が出土地している。

弥生時代後期の遺構として本住居址1軒のみが確認され、その性格・位置付け等今後の研究課題といえる。

(吉川 豊)



挿図12 TSH 11号住居址

## 2. 土 坑

### (1) 土坑 1 (挿図13)

C 6 グリッドで検出し、完掘した。径90cmの不整円形を呈する。底部はほぼ平坦であり、深さは25cmを測る。壁は比較的急角度にたちあがる南壁を除いては、ほぼ垂直にたちあがっている。覆土からは、土器が出土したが小片のため図化できず、時期決定にはいたらなかった。

### (2) 土坑 2 (挿図13)

D 6 グリッドのはば中央部、土坑 7 の西南で検出した。130×100cmの不整楕円形で、底部は南から北にむかってやや傾いており、北壁際の最深部で深さ32cmに達する。壁は西北の壁がやや緩やかにたちあがる以外は、比較的急角度なたちあがりである。

覆土からは、少量の土器が出土したが小片のため図化できず、時代決定はできない。

### (3) 土坑 3 (挿図13、第40図 2、3)

E 5 グリッド、土坑 4 と土坑11との間で検出した。平面プランで直径 110cmの不整楕円形の土坑である。底部はほぼ平坦であり、深さは35cmを測る。壁は急角度にたちあがり、断面形は逆台形になる。

覆土からは縄文時代中期土器（第40図 2、3）が出土している。2は勝坂、3は平出Ⅲ類aである。

### (4) 土坑 4 (挿図13、第40図 4)

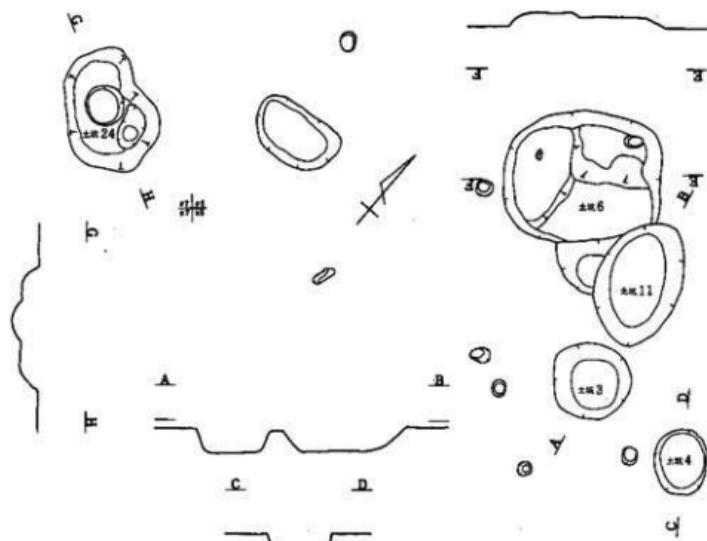
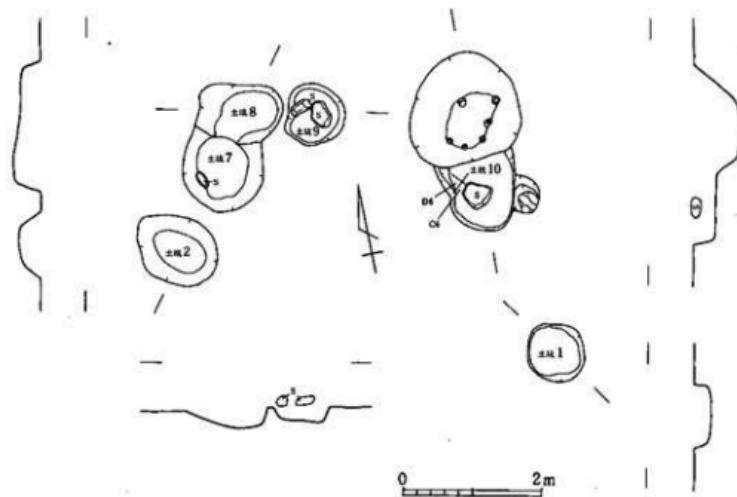
E 5 グリッドの東側で検出した。90×80cmの楕円形の土坑である。底部は中央付近がやや凹んだ鍋底形をしており、深さは31cmを測る。壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは縄文時代中期にあたる勝坂式土器の破片（第40図 4）が出土している。

### (5) 土坑 5 (挿図14、第40図 5)

E 4 グリッドの西端で検出した。平面プランは160×80cmの不整楕円形であるが、形態とすれば南側の直径70cmのビットがその北側にある楕円形のビットを切ったものである。底部は大きく三つに分かれ凸凹しているが、深さはいずれの部分でも20cmを測る。また、南側のビットの底部北側には深さ10cmの落ち込みがある。壁は北側ではほぼ直角にたちあがるが、南ではやや緩やかになり、それ以外の部分は比較的急角度でたちあがっている。

中央部の覆土から、縄文時代中期の土器片（第40図 5）が出土しているものの、詳細時期は不明である。



插図13 TSH 土坑1～4・6～11・24

#### (6) 土坑 6 (挿図13、第40図6~13、第43図29~31)

E 5、E 6、F 5、F 6 グリッドにかかるて検出した。東側で土坑11及びピットに切られており、全容はわからないが推定で  $220 \times 190$  cm の隅丸方形になる。底部は3段に分かれており整っているとはいえない。一番深い落ち込みは北側にあり検出面からの深さは26cmと比較的浅く、ほぼ平坦な底の北端は小ピットにより切られている。深さ20cmを測る中段は土坑の南半分を占め、ほぼ平坦な底をもつ。一番浅い部分は東側にあり土坑底部の3分の1程度になる。これもまたほぼ平坦な底部で深さは14cmとごく浅い。壁は全面的にやや急角度にたちあがっている。

覆土からは比較的多量の土器が出土（第40図6~13）している。6は波状口縁土器の口縁の一部で細い隆帯を貼り付けてある。また、9、10は平出Ⅲ類aである。石器としては、硬砂岩製の乳棒状石斧（第43図29）は刃部が欠損している。その他、緑泥岩製の敲打器（第43図30）、硬砂岩製の凹み石の破片（第43図31）が出土した。縄文時代中期の遺構である。

#### (7) 土坑 7 (挿図13、第40図14~16)

D 6 グリッドで検出した。北側で土坑8を切るが、検出時に新旧関係不明なため同時に掘り下げた。推定で直径120cmの円形を成す。底部までの深さ36cmで、北から南へやや傾斜しており、壁は比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、若干の土器（第40図14~16）が出土しているが、時期決定にはいたらなかった。

#### (8) 土坑 8 (挿図13、第40図17、第44図1)

D 6 グリッドで検出した。南側で土坑7に切られるため全容は不明である。掘り下げた部分で  $120 \times 90$  cm の不整形になる。底部はほぼ平坦で、深さ26cmと比較的浅い。壁は西側でごく緩やかなたちあがりとなる以外は、ほぼ垂直にたちあがる。

覆土中からは、縄文時代中期の勝板式土器（第40図17）の出土があった。また、石器としては、緑泥岩製の敲打器（第44図1）が出土した。

#### (9) 土坑 9 (挿図13、第41図1~5、第44図2~5)

D 6 グリッド、土坑8の東側で検出した。平面プランで直径90cmの不整円形を呈する。底部は南から北へ向かって傾斜しているものの、最深部の北壁際でも深さ21cmと浅い。壁はどの部分でもほぼ垂直にたちあがっている。

覆土中からの石器としては、緑泥岩製の打製石斧（第44図2、3）が2点、2は刃部が欠損しており、3は刃部、基部ともに欠損している。また、花崗岩の石皿（第44図4）も出土している。その他に、縄文時代中期の土器（第41図1~5）も出土している。

#### 00 土坑10 (挿図13、第41図6~8、第44図5~7、第45図1)

C5、C6、D5、D6グリッドにかかり検出した。平面プランで $260 \times 160\text{cm}$ の不整形、北側の直径 $160\text{cm}$ の不整円形のものが南側の楕円形のものを切った形になっている。

北側は、深さ $65\text{cm}$ ではほぼ平坦な底部をもち、壁際には径 $10\text{cm}$ 程度の小さな穴が5個ある。壁は比較的急角度にたちあがっている。土坑とした南側は、 $100 \times 90\text{cm}$ の半楕円形に残っているのみであるが、底部はほぼ平坦で深さ $30\text{cm}$ を測る。壁はほぼ垂直にたちあがる。なお、東側の壁上にはピットがある。

覆土からは、完形で刃部には摩滅痕がある緑泥岩製の打製石斧（第44図5）、硬砂岩の円錐（第44図6）、風化している砂岩製の敲打器（第44図7）、花崗岩で敲打器か凹み石と考えられるもの（第45図1）と、若干の土器（第41図6~8）が出土しているが、小片で時期は決定できなかった。

#### 01 土坑11 (挿図13、第41図9)

E5グリッドの西端で検出した。北西側で土坑6を西側でピットを切っている。 $180 \times 120\text{cm}$ の楕円形、底部は土坑6を切る北西から南に向かってごくわずか傾斜している。深さは $36\text{cm}$ を測る。なお、壁はやや急角度にたちあがっている。

覆土からは、表面に黒斑をもち、緩く曲がっている土製円盤（第41図9）と、若干の土器が出土しているが小片で図化できず、時期の決定はできなかった。

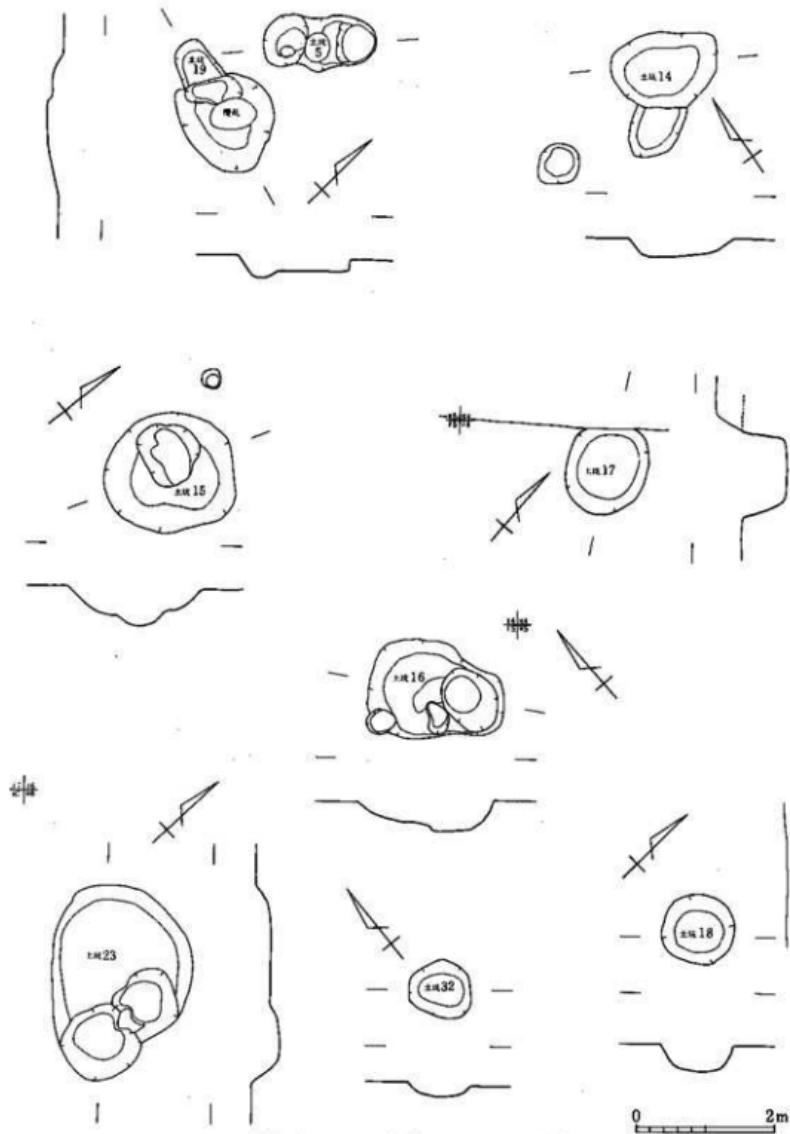
#### 02 土坑12 (挿図15、第41図10~12、第45図2)

グリッドB4、B5にかかるて検出した。南側は土坑13を切っている。平面プランは径 $100\text{cm}$ の円形で、底部は平坦で深さ $50\text{cm}$ を測る。壁は、土坑13と同時に掘下げたため南壁は不明であるが、他は垂直にたちあがる。

覆土からは、深鉢の底部（第41図11、12）、このうち11にはナデによる調整痕がみとめられる。また、細い隆帯を貼り付け、間には沈線や半裁竹管の押引きで文様を施した土器片（第41図10）が出土した。この破片は土坑13の覆土から出土したものと接合した。その他緑泥岩製の打製石斧（第45図2）が完形で出土している。縄文時代中期の遺構である。

#### 03 土坑13 (挿図15、第41図10、13、14、第45図3)

B4グリッドで検出した。北側で土坑12に切られている。平面プランは径 $180\text{cm}$ の円形を呈している。底部は中央がやや凹んでおり、深さは、最深部となる東壁際で $52\text{cm}$ を測る。北壁及び西壁はやや急角度にたちあがっているが、南・東壁についてはゆるやかにたちあがっている。なお、東壁には $60 \times 10\text{cm}$ の三日月形の中段をもつ。



挿図14 TSH 土坑5・14～19・23・32

覆土からは、縄文時代中期の土器（第41図10、13、14）が出土した。このうち10は土坑12の覆土から出土したものと接合した。そのほか、刃部の欠損している緑泥岩製の打製石斧（第45図3）も出土している。

⑩ 土坑14 （挿図14、第41図15～17）

G 5 グリッドで検出した。南西側でピットを切る  $150 \times 110\text{cm}$  の梢円形を呈する。底部は東から西に向かって傾斜しており、最深部での深さは26cmと比較的浅い。壁は比較的緩やかにたちあがっている。

覆土からは縄文時代中期土器（第41図15～17）が出土している。

⑪ 土坑15 （挿図14、第41図18～22）

H 4 グリッドで検出した。平面プランで  $190 \times 170\text{cm}$  の不整円形を呈する。底部の西半分には、 $90 \times 80\text{cm}$  の範囲で12cmの落ち込みがあるため、土坑本来の底部は、東半分を中心にして残っているのみで、東壁際から中央に向かってやや傾斜し、落ち込みの直上で深さ43cmを測る。壁は比較的緩やかにたちあがる。

覆土からは、若干ではあるが、縄文時代中期の土器（第41図18～22）が出土している。縄文時代中期後半である。

⑫ 土坑16 （挿図14）

I 5 グリッドで検出した。平面プランで  $200 \times 130\text{cm}$  の不整梢円形を呈する。底部の南半分は  $90 \times 70\text{cm}$  のピットにより切られる。その西側を不整形のピットにより切られるため、北から南に向かって傾斜している土坑本来の底部は北側に少し残る程度である。深さは、それぞれの最深部で43cm、35cm、39cmである。壁はいずれも緩をもち二段にたちあがる。その角度は東側の上段でほぼ垂直になる以外は、やや急角度にたちあがっている上段に比べ、下段の方がやや緩やかである。なお、西壁は  $40 \times 30\text{cm}$  のピットで切られている。

覆土からは、縄文時代中期の土器が出土しているが小片で圓化できなかったため、詳細時期については不明である。

⑬ 土坑17 （挿図14、第41図23～27、第42図1、2、第45図4～6）

J 4 グリッドで検出した。北西の壁の一部が用地外にかかり完掘はできなかったものの平面プランが  $140 \times 120\text{cm}$  の梢円形の土坑である。底部はほぼ平坦で、深さは62cm。壁はほぼ垂直にたちあがっており、しっかり掘り込まれた土坑である。

覆土からは、土器（第41図23～27、第42図1、2）が出土しているほか、緑泥岩製の打製石斧（第45図4、5）2点、のうち、4は基部を欠損して、5は基部のみが出土した。また硬砂岩製

の摺り石（第45図6）も出土している。縄文時代中期後半の遺構である。

08 土坑18 （挿図14）

C 4 グリッド、6号住居址の東側で検出した。直径100cmの円形を呈している。底部は中央が凹む鍋底形であるが、深さは24cmと比較的浅い。壁は比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、土器が出土しているが小片で図化できず、時期決定は困難である。

09 土坑19 （挿図14、第42図3、4）

E 4 及び E 5 グリッドにかかるて検出した。平面プランで 200 × 130 cm の不整形で、大きく東西に二分できる。東半分は攪乱が底部まで及び土坑の形態は不明瞭である。それに対し西半分は土坑自身の形態が残っている。底部の中央はやや凹んでいるが、深さは14cmとごく浅い。壁は緩やかにたちあがっている。

覆土からは、縄文時代中期の土器（第42図3、4）が出土している。

10 土坑20 （挿図15、第42図5、6）

G 6 グリッド土坑21を切って検出した、90×90cmの隅丸方形の土坑である。底部は北から南へやや傾斜しており、最深部となる南壁下でその深さは29cmを測る。壁は、比較的急角度にたちあがる。

覆土からは上器（第42図5、6）が出土している。縄文時代中期の遺構である。

11 土坑21 （挿図15、第42図7～9）

G 6 グリッドで検出した。西側で土坑20に切られる。平面プランは推定で 100 × 70 cm の楕円形を呈する。底部は中央がやや凹んだ鍋底形であるが、南側では径30cm深さ30cmのビットが底を切っている。壁は比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、土器（第42図7～9）が出土している。縄文時代中期の遺構である。

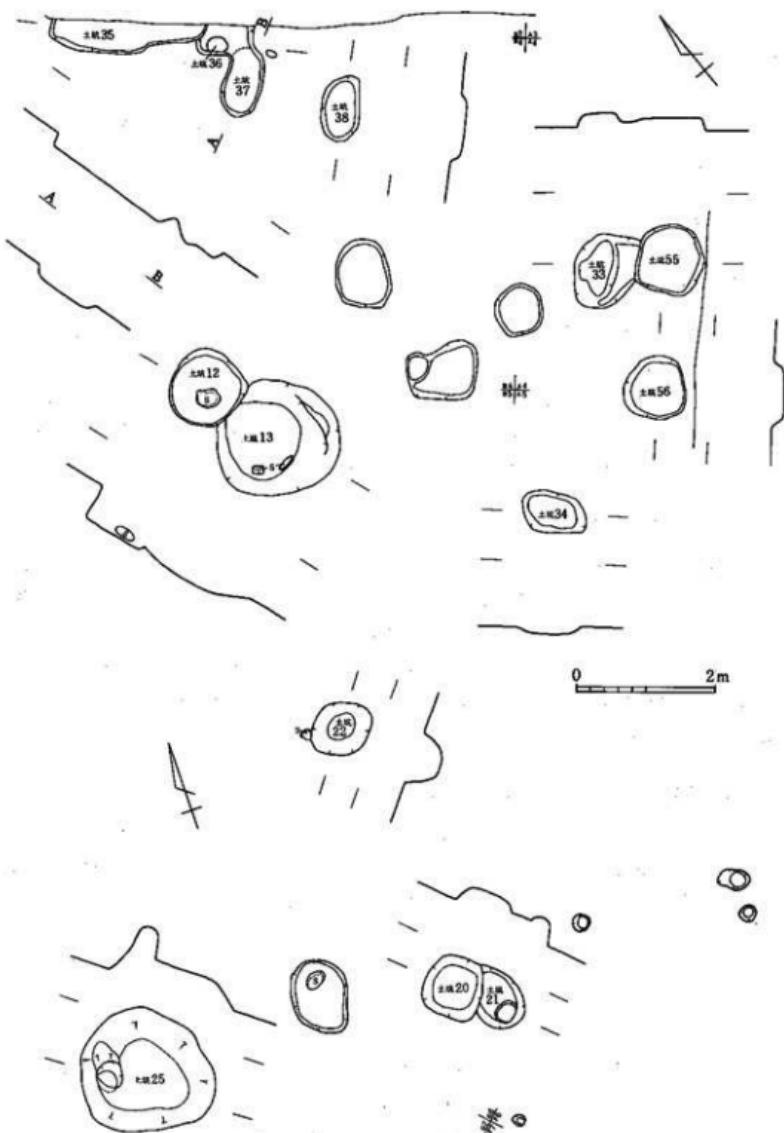
12 土坑22 （挿図15）

G 6 グリッドで検出した。80×80cmの隅丸方形の土坑である。底部は中央が凹み、深さは42cmを測る。壁は、比較的急角度にたちあがり、摺鉢状になる。

覆土からは縄文時代中期土器が出土しているが小片で図化できず、詳細時期は不明である。

13 土坑23 （挿図14、第42図10～17、第45図10～14）

H 6 グリッドで検出した。平面プランで 280 × 200 cm と比較的大規模な不整格円形を呈した土坑である。底部はほぼ平坦であるが、東壁際を2つのビットに切られている。深さは最深部で26



插図15 TSH 土坑12・13・20～22・25・33～38・55・56

cmを測る。壁は比較的緩やかにたちあがっている。

覆土からは比較的多量の土器（第42図10～17）が出土しており、10は全面に鏡磨きを施しており、わずかに朱塗りが認められる。また、13、14は平出Ⅲ類aである。そのほか石器としては、緑泥岩製の打製石斧（第45図7、8）は刃部を欠損している7と、完形で刃部に摩滅痕をもつ8の2点と、同じく緑泥岩製の敲打器（第45図9）も出土した。縄文時代中期の遺構である。

#### ㉙ 土坑24（挿図13、第42図18、19、第45図10～14）

F 7グリッドで検出した。平面プランで180×100cmの不整橿円形をしている。底部中央には、底部からの深さが14cmで直径50cmを測る円形の柱穴があり、その東側には底部からの深さが17cmを測る80×40cmの不整橿円形のピットを持つ。そのため土坑自体の底部は西側半分程度しか残っていないが、西から東へごくわずか傾斜し、最深部である東壁下で26cmをはかる。

覆土からは、縄文時代中期の土器（第42図18、19）と緑泥岩製ではあるが、刃部のみの打製石斧（第45図10）、同じく緑泥岩製で刃部の欠損している乳棒状石斧（第45図11）、砂岩の用途不明石器（第45図12）、硬砂岩製の横刃型石器（第45図13、14）2点が出土している。

#### ㉚ 土坑25（挿図15、第42図20～22、第46図1）

G 7グリッドで検出した。平面プランで200×180cmの不整橿円形を呈した土坑である。底部はほぼ平坦であるが、西壁直下は径30cmで深さ43cmの斜めに掘られたピットで切られている。深さはそのピット直上の最深部で34cmを測る。壁は比較的緩やかにたちあがっている。

覆土からは若干の土器（第42図20～22）が出土している。そのうち20は細い隆帯を貼り付けた波状口縁土器の口縁部である。また、基部のみではあるが、緑泥岩製の打製石斧（第46図1）も出土している。縄文時代中期の遺構である。

#### ㉛ 土坑26（挿図7、第42図23、24）

I 10グリッドで、8号住居址の南壁を切って検出した。住居址を優先して掘ったため、全容は不明である。推定で180×120cmの橿円形を呈する。底部はほぼ平坦であり、深さは検出面から39cmを測る。壁は、西では稜を持ち二段にたちあがる。北では傾く、南ではほぼ垂直になるが、東は残っていない。

覆土からは土器（第42図23、24）が出土している。

#### ㉜ 土坑27（挿図16、第46図2）

J 10グリッドで検出した。平面プランで直径70cmの不整円形を呈した土坑である。底部はほぼ平坦で、深さは19cmとごく浅い。壁は比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、ごくわずか縄文時代中期の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。そ

のはかに硬砂岩の石鍬（第46図2）が出土している。

#### ㉙ 土坑28（挿図16、第42図25、第46図3）

J10グリッドで検出した。平面プランで  $110 \times 100\text{cm}$  の不整形を呈した土坑である。底部までの深さは最深部である東壁下で  $27\text{cm}$  を測る。南壁下は二つのピットで切られ、その東側には落ち込みがある。底部は、中央がやや膨らんでいる。全体として整っていない。壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは、土器（第42図25）が出土しているほか、刃部・基部ともに欠損しているが、硬砂岩製の打製石斧（第46図3）も出土している。縄文時代中期の遺構である。

#### ㉚ 土坑29（挿図16、第42図26～28、第46図4）

J10グリッド、土坑28の北側で検出した。平面プランで  $150 \times 100\text{cm}$  の不整楕円形を呈しているが、南半分の  $110 \times 80\text{cm}$  の不整楕円形のものを土坑とした。底部はほぼ平坦で検出面までの深さ  $56\text{cm}$  を測り、壁は急角度にたちあがっている。この土坑に切られた不整楕円のピットは、底部は北から東にかけて残るのみで、中央にやや凹み深さ  $32\text{cm}$  を測る。壁は北側が残るのみであるが、ほぼ垂直にたちあがっている。

土坑の覆土からは縄文時代中期後半の土器（第42図26～28）と基部だけではあるが、磨製石斧（第46図4）も出土している。

#### ㉛ 土坑30（挿図16、第42図29～31）

I9グリッドで検出した。平面プランで  $110 \times 80\text{cm}$  の不整楕円形を呈した土坑である。底部は中央がやや凹んだ鍋底形で、深さ  $36\text{cm}$  を測る。壁は比較的急角度にたちあがる北側を除けば、ほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは縄文時代中期の土器（第42図29～31）が出土している。

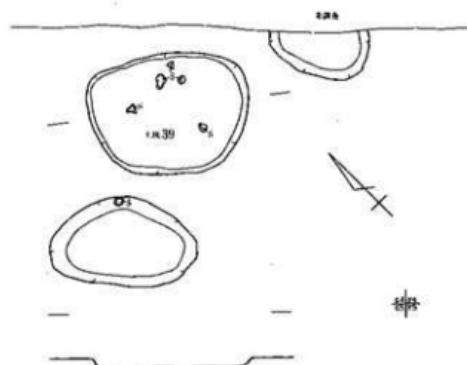
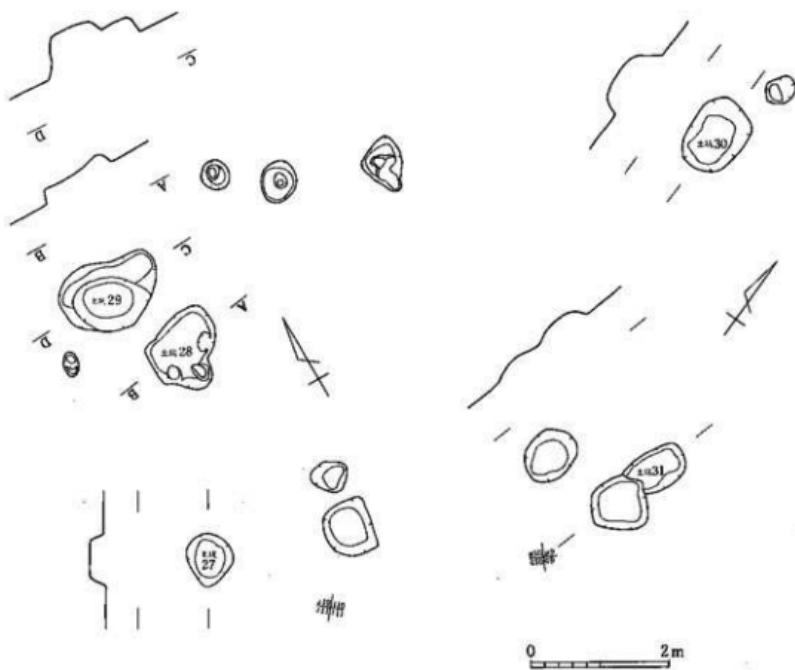
#### ㉜ 土坑31（挿図16、第42図32）

H9グリッドで検出した。南側をピットに切られるため、平面プランは推定で  $(90) \times 60\text{cm}$  の楕円形の土坑である。底部はやや南から北に向かって傾斜していたり、深さは最深部の北壁下でも  $13\text{cm}$  とごく浅い。壁は西側がほぼ垂直にたちあがる以外は、比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは縄文時代中期の土器（第42図32）が出土しているものの、詳細時期決定は困難である。

#### ㉝ 土坑32（挿図14）

G10、H10グリッドにかかって検出した。平面プランは  $100 \times 80\text{cm}$  の楕円形の土坑である。



挿図16 TSH 土坑27~31・39

底部はやや中央が凹み、深さは20cmを測る。壁は底がそのまま壁となってたちあがる。

覆土からは、ごくわずか縄文時代中期の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

### 33 土坑33 (挿図15)

A 4 グリッドで検出したが、東側で土坑55に切られるため全容はわからない。平面プランは推定で(110)×100cmの不正形。底部は南東及び北西で二段になっている。東側は南に傾斜し最深部の南壁下で13cm、西側は北に傾き最深部の北西壁下で29cmを測る。壁は比較的急角度にたちあがる。

覆土からは、縄文時代中期の土器が出土したが小片で図化できなかったため、詳細時期は決定できなかった。

### 34 土坑34 (挿図15)

A 5 ブリッド、土坑56の西側で検出した。平面プランは100×60cmの橢円形である。底部はほぼ平坦で深さは12cmとごく浅い。壁は、北側がほぼ垂直にたちあがる以外は、比較的緩やかにたちあがっている。形態は、土坑37・土坑38とよく似ている。

覆土からは、縄文時代中期の土器が出土したが小片で図化できなかった。

### 35 土坑35 (挿図15、第42図33、34)

調査範囲の北東端で、B 4 及びC 4 グリッドにかかり検出した。土坑36を切っているが、半分ほどが用地外となり、土坑の全容はわからない。掘り上げた部分で220×40cmの不整形ではあるが横長の半楕円である。底部は北西から南東へわずか傾くがほぼ平坦で深さは22cmと比較的深い。壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは、土器(第42図33、34)が出土している。縄文時代中期の遺構である。

### 36 土坑36 (挿図15、第42図35~37)

B 4 グリッドで検出した。北西で土坑35に切られ、南では土坑37と切り合うが新旧関係は不明である。用地外に統くため全容はわからないが、掘り上げた部分で80×40cmの不整形ではあるが長方形に近い。底部はほぼ平坦であるが西側に底から深さ5cmとごく浅い落ち込みを持つ。この土坑自体の底部は東側半分での深さは、検出面から14cmを測るのみである。壁が残るのは、ほぼ垂直にたちあがる東側とそれよりやや緩やかにたちあがる西側のみである。

覆土からは、勝板式と見られる土器(第42図35~37)が出土している。縄文時代中期の遺構である。

#### ③ 土坑37 (挿図15、第42図38)

B 4 グリッドで検出した。北側で土坑36と切り合うが新旧関係は不明である。平面プランは  $100 \times 60\text{cm}$  の楕円形である。底部は、ほぼ平坦であり深さ  $8\text{cm}$  とごく浅い。壁は比較的緩やかにたちあがっている。土坑34・土坑38と形態はよく似ている。

覆土からは、土器（第42図38）が出土している。縄文時代中期の遺構である。

#### ④ 土坑38 (挿図15、第42図39、40、第46図5)

B 4 グリッド、土坑37の南東で検出した。平面プラン  $90 \times 50\text{cm}$  の楕円形を呈している。底部はほぼ平坦で、深さは  $15\text{cm}$  とごく浅い。壁は急角度でたちあがっている南壁を除けば、比較的緩やかである。土坑34・土坑37の形態とよく似ている。

覆土から縄文時代中期の土器（第42図39、40）が出土したほか、黒曜石製の石錐（第46図5）も出土した。

#### ⑤ 土坑39 (挿図16、第46図6)

G 4 グリッドで検出した。平面プランが  $230 \times 170\text{cm}$  の楕円形の土坑である。底部はほぼ平坦で深さは  $15\text{cm}$  とごく浅い。壁は比較的急角度にたちあがっている。断面形では逆台形を呈する。

覆土からは、硬砂岩の石錐（第46図6）と若干の土器が出土したが小片で図化できなかった。時期は縄文時代中期とみられるが、詳細時期については確定できない。

#### ⑥ 土坑40 (挿図18)

A トレンチの南東の端より約  $4\text{m}$  付近で検出したが、トレンチの壁にかかり完掘できなかった。掘り上げた部分で  $80 \times 60\text{cm}$  の不整形。東西二段になる。深さはそれぞれ  $40\text{cm}$ 、 $98\text{cm}$  をはかり、比較的しっかりと掘り込まれている。

底部は丸みをもち外側へえぐれこむため、断面形で袋状になる。

覆土からは、少量の縄文時代中期の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### ⑦ 土坑41 (挿図18、第42図41~43)

A トレンチと C トレンチの交差する部分の A トレンチ内で検出した。平面プランは径  $60\text{cm}$  の円形を呈する。

底部は平坦で深さは  $30\text{cm}$  を測る。壁は西側が、ややえぐれ込んでいる他はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは、縄文時代中期の土器（第42図41~43）が出土している。

#### 42 土坑42 (挿図18、第43図5)

Aトレンチ内のCトレンチ交点から北西へ約3.5mといったところで検出した。トレンチの壁にかかり全容はわからないが、推定で $60 \times (50)$ cmの楕円形。

底部は平坦で深さ30cm、壁はほぼ垂直にたちあがっており、断面で逆台形になる。

覆土からは、縄文時代中期後半の結節縄文をもつ土器（第43図1）が出土している。

#### 43 土坑43 (挿図18、第43図2～4)

Aトレンチ内の土坑42と2号住居址の間で $80 \times 60$ cmの長方形のものと $70 \times 60$ cmの不整楕円形のものが切り合う格好で検出した。切り合い関係が不明のため双方同時に掘り下げたが、結局新旧関係は明らかにできなかった。

土器片の出土した東側のものを土坑43としたが、底部はほぼ平坦で深さ20cmを測る。壁は比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、縄文時代中期の土器（第43図2）と粘土塊（第43図3、4）が出土している。

#### 44 土坑44 (挿図18、第43図5、6)

Aトレンチ内の2号住居址と土坑45の間で検出した。トレンチの壁にかかり完掘できなかったものの掘り上げた部分で $110 \times 90$ cmの半円形をなす。底の中央がやや低くなる鍋底形をしており、深さは最深部で40cmを測る。壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは、縄文時代中期の土器（第43図5、6）が出土しており、このうち5は口縁部のみだが、沈線文と刺突文が施された土坑45から出土したものと接合できた。

#### 45 土坑45 (挿図18、第43図5)

土坑44と土坑46の間で検出した。 $70 \times 40$ cmの不整楕円形で底部は丸みを持ちそのまま壁となってたちあがっている。最深部での深さは16cmとごく浅い。

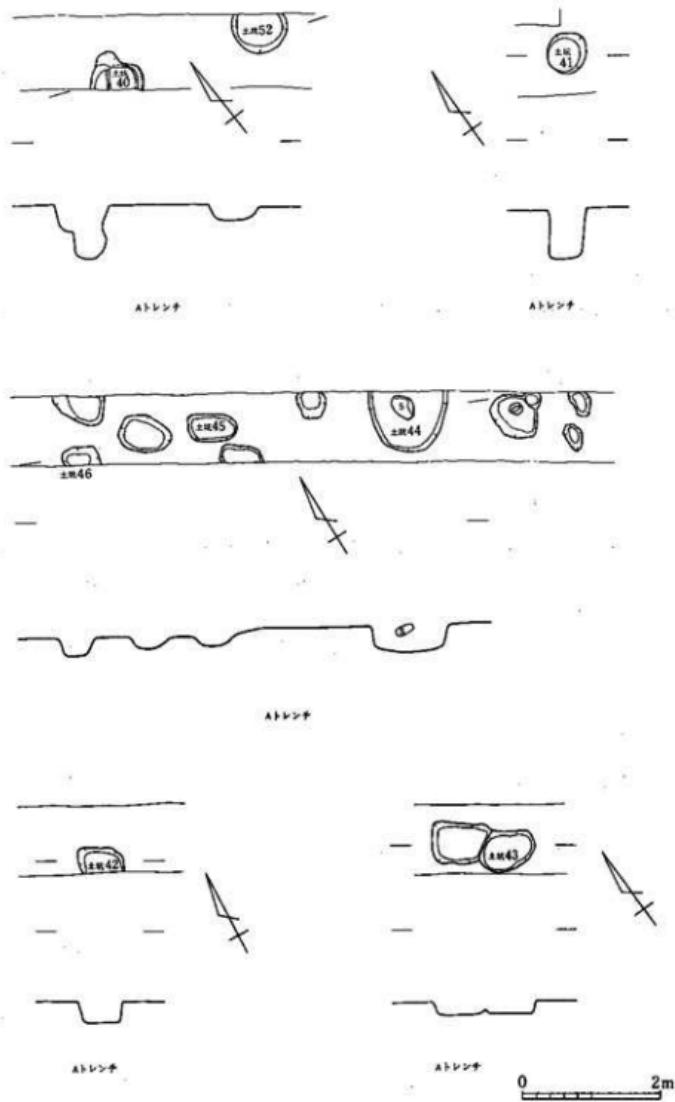
覆土から出土した縄文時代中期の土器（第43図5）は、土坑44で出土した土器と接合できた。

#### 46 土坑46 (挿図18)

Aトレンチ内、土坑45と竪穴1の中間で検出した。トレンチの壁にかかるため完掘できないが、掘り上げた部分で $50 \times 30$ cmの不整半楕円を呈す。

底はほぼ平坦で、深さは26cmと比較的浅いが、壁がほぼ垂直にたちあがっているところから判断して、柱穴であろう。

覆土から少量の縄文時代中期の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。



挿図17 TSH Aトレンチ 土坑40~46・52

#### 47 土坑47 (挿図17、第43図7)

Cトレンチ内、Aトレンチとの交点付近土坑41と土坑48の中間で検出したが、トレンチの壁にかかり完掘できなかったため、全容はわからない。

推定  $120 \times 80\text{cm}$  の楕円形で、底部はほぼ平坦で深さ  $60\text{cm}$  を測る。壁は、比較的急角度でたちあがっており、断面形で逆台形になる。

覆土からは、勝板式土器（第43図7）が出土しており、縄文中期の遺構である。

#### 48 土坑48 (挿図17)

Cトレンチ内で土坑47と土坑49の中間で検出した、直径  $50\text{cm}$  の円形のものである。

底部の西北壁際には  $20 \times 20\text{cm}$  の不整円形の落ち込みがある以外は、平坦で深さは  $60\text{cm}$  を測る。壁はどの方向もすべて乗直にたちあがっている。形態から判断すれば柱穴であろう。

覆土から少量の縄文時代中期の土器が出土したが、小片で図化できず、詳細時期決定まではできなかった。

#### 49 土坑49 (挿図17)

Cトレンチ内でAトレンチとの交点付近で検出した。南東部分はトレンチの壁にかかるため完掘できず全容はわからないが、掘り上げた部分では  $90 \times 60\text{cm}$  の不整形である。

底部には3つの落ち込みがあり凹凸している。深さは最深部でも検出面から  $20\text{cm}$  と比較的浅く、壁もゆるやかにたちあがるため、断面で浅鉢形となる。

覆土から少量の縄文時代中期の土器が出土したが、小片で図化できず、詳細時期決定まではできなかった。

#### 50 土坑50 (挿図17、第43図8、第46図7、8)

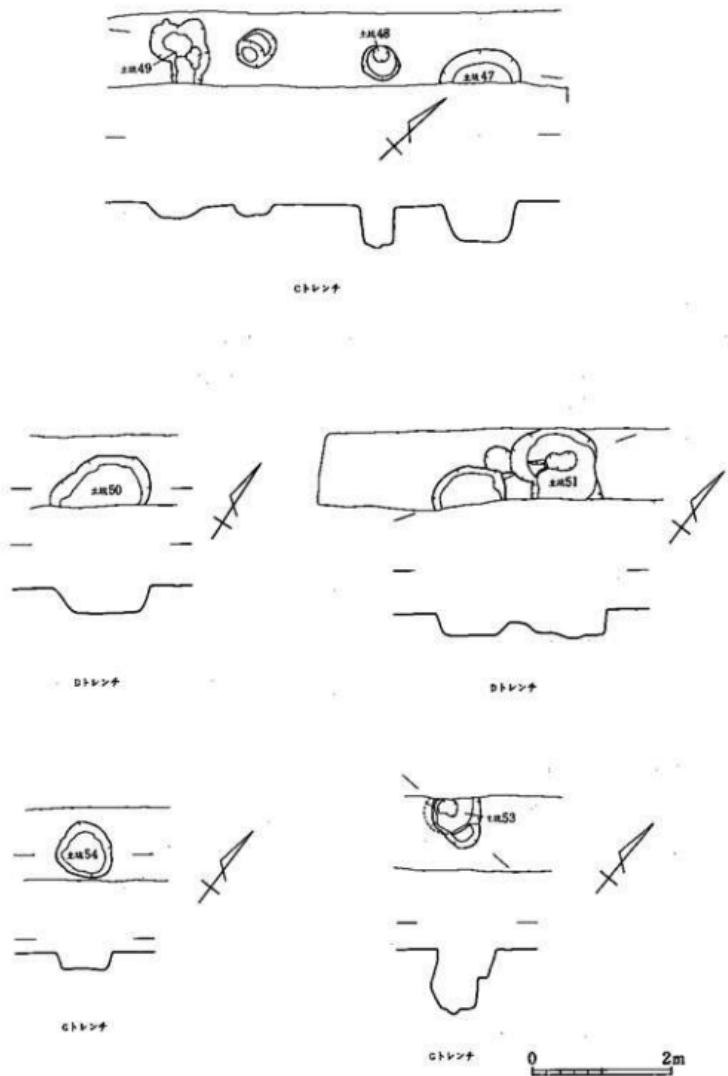
Dトレンチ内5号住居址と土坑51の中間で検出されたもので、北側はトレンチの壁にかかり完掘できないため全容はつかめないが、推定で  $150 \times 100\text{cm}$  の楕円形とみられる。

底部は平坦で深さは  $40\text{cm}$  を測る。壁は西側がゆるやかにたちあがっている以外は、比較的急角度なたちあがりである。

覆土からは、勝板式土器（第43図8）と、緑泥岩製の打製石斧（第46図7）及び硬砂岩の用途不明石器（第46図8）が出土している。

#### 51 土坑51 (挿図17、第43図9～12、第46図9)

北東から南西方向にあけたDトレンチの南西の端付近で二つの円形の土坑が切りあった形で検出した。トレンチ壁にかかり完掘できず全容はわからないものの、掘った部分で  $240 \times 100\text{cm}$  の



挿図18 TSH Cトレンチ 土坑47~49, Dトレンチ土坑50・51, Gトレンチ 土坑53~54

不整形をしている。

推定  $100 \times 80\text{cm}$  の楕円形とみられる南西側のものは、底部が平坦で深さ34cmを測る。また、それと切り合う北東側のものは掘り上げた部分で  $150 \times 120\text{cm}$  の不整形で底部のはば中央に若干の落ち込みがあるもののほぼ平坦で深さは、30cmと比較的浅い。壁はゆるやかにたちあがっている。覆土からは土器（第43図9～12）が出土しているほか、硬砂岩製で刃部に摩滅痕のある横刃型石器（第46図9）が出土している。縄文時代後期に位置づけられる遺構である。

#### 52 土坑52（挿図18）

Aトレンチ内の土坑40から西へ  $250\text{cm}$  付近で検出した。東側はトレンチの壁のため完掘できず全容はわからないが、推定  $80\text{cm}$  の円形とみられる。

底部は西側へやや傾くもののほぼ平坦で、深さは、22cmと比較的浅い。壁はゆるやかにたちあがっている。

覆土から少量の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### 53 土坑53（挿図17、第43図13～17）

北東から南西方向にあげたGトレンチの北東の端付近で検出した。トレンチの壁にかかり完掘できなかつたため全容はわからないが、掘り上げた部分が  $80 \times 70\text{cm}$  の不整楕円形になる。

東壁は中位に検出面から深さ38cmの段がある。また底部中央にはおちこみがあり、深さは最深部で90cm、底部で82cmを測る。壁は、南側がえぐれ込み断面で袋状になる以外はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土からは、土器（第43図13～17）と粘土塊（第43図18、19）が出土している。縄文時代中期後半の遺構と考える。

#### 54 土坑54（挿図17、第43図20～27、第46図10）

Gトレンチの中央付近、土坑53の南西側で検出した、平面プラン  $80 \times 80\text{cm}$  の不整円形を呈する土坑である。

底はほぼ平坦で、深さは22cmを測る。壁は比較的急角度でたちあがり、断面形は逆台形を成している。

覆土からは、硬砂岩製で刃部に摩滅痕のある横刃型石器（第46図10）と比較的多量な縄文時代中期の土器（第43図20～27）が出土している。このうち19～23までは共通の綾杉状沈線文をもち、胎土も共通していることから、同一個体とした。

#### 55 土坑55（挿図15）

A4のBトレンチ壁際、土坑56の北東で土坑33を切っている。平面プランは径  $100\text{cm}$  の不整円

形である。

底はほぼ平坦で、深さは16cmとごく浅い。壁はほぼ垂直にたちあがっている。

覆土から少量の縄文時代中期の土器が出土したが、小片のため図化できなかった。

#### 59 土坑56 (挿図15、第43図28、第46図11)

A4、A5にかかり、Bトレーナーの壁際、土坑55の西南で検出した。平面プランは径90cmの不整円形を呈する土坑である。

底はほぼ平坦で、深さは12cmとごく浅い。壁はほぼ垂直にたちあがる東壁を除けば、比較的急角度にたちあがっている。

覆土からは、縄文時代中期勝板式とみられる土器（第43図28）と、わずかに基部を欠損している綠泥岩製の打製石斧（第46図11）が出土している。

（以上 吉川 豊）

### 3. 遺構外出土遺物 (第46図12~20・第47~49図)

今回の調査により出土した遺物は、住居址及び土坑などの遺構に伴うものが大半であるが、それらの遺構に直接結びつかない土器・石器などが調査範囲内全域より出土している。それらは直接遺構との関連付けが困難であるが、その多くは住居址等の検出された地点周辺からの出土がほとんどであり、本来いざれかの遺構内に所在したものと推測される。

時代的には、遺構の確認されている縄文時代中期のものがほとんどであるが、わずかに縄文時代前期・後期の土器片も認められる。

#### 縄文時代前期 (46図12)

わずかにこの1点が出土したのみである。小破片のため全体形等不明であるが、全面に地文の縄文を施した後に細縦線をはり付け、その上をさらに施縄文しており、焼成等良好であり、関西系の土器と考えられる。

#### 縄文時代中期 (46図13~20、47図1~29)

住居址などの遺構が検出された時期の土器群が主体となる。このうち、13は表面の磨滅が著しく断定は困難であるが、半截竹管の浅い沈線を施した土器片で、前期末もしくは、中期初頭に位置づけられると考えられる。

14~20、47-1~9は、中期中葉に位置づけられる一群で、陸帯・沈線文を主主様とし、上伊那から諏訪地方との関連で把えられるものと、半截竹管による施文を主とするいわゆる平出Ⅲ類aの2大別がされる。

47-10~14は、中期後半の初期に位置づけられる一群である。口縁部から胴上半部全体にわたって陸帯を丁寧にはり付けた当地方を中心分布する土器の一群を主体としている。

47-15~25は、当地方の中期後半に普遍的にみられる一群の土器で、沈線・刺突など多種の文

様を施すもので、図示しなかったものを含め、遺構外出土品の大半を占める。

47-26・27は、詳細時期は不明であるが、前述のいずれかの時期に属すると考えられる。27は器台もしくは、台付壺の脚台部であり、当地方に類例の少ないものである。

47-28・29は、結節縄文が施され、中期終末期に位置づくと考えられる。

縄文時代後期（48図1）

壺もしくは注口土器の底部と考えられ、外面は網代痕のある底部以外は黒色研磨されている。詳細時期は不明であるが、後期後半と考えられる。

石器（48図2～15、49図）

前述の土器のいずれかの時期に共伴する石器類で、図示した以外にも多数の破損品があるが、全体形を知り得るものについてのみ掲載した。全体の構成としては、縄文時代中期の住居址出土品と共にし、打製石斧と横刃型石器を主体に敲打器・石皿・磨石などが若干量みられる。

（小林正春）

## IV まとめ

伊賀良地区内では過去において、数次の発掘調査が全域で行なわれている。その中で、地区的東端部にあたる場所での調査は、本例と昭和51年の中島平遺跡、52年の宮ノ先遺跡、58年の三日市場大原遺跡の4ヶ所である。このうち、中島平と宮ノ先の2遺跡は新川に面した小段丘面及び段丘縁部の微地形の変化に富んだ位置にある。また、本下原遺跡と運動公園用地内の三日市場大原遺跡は、段丘平坦面の比較的乾燥した状況にある。

調査の結果は、中島平・宮ノ先の2遺跡が弥生時代後期の集落遺跡、三日市場大原遺跡は縄文時代の断片的な資料を得たのみ、当原遺跡は本文中に触れたとおり縄文時代中期の住居址12軒をはじめとするかなり大規模な集落が確認されたわけである。

下原と三日市場大原遺跡は、段丘先端部に立地する点はどちらも共通するが、大原遺跡の台地幅が広いのに対し、下原遺跡は細長い尾根状を呈する点で異なっている。さらに、遺跡立地上の決定的な相違点は、溝水地との比高差・距離の点である。大原遺跡では比高差20m程の段丘下まで至らないと溝水が求められず、下原遺跡では同一段丘面端部にそれが求められる。

この両者の比較がすべて共通事項とはいえないが、龍西の段丘上における遺跡立地に一定の姿を見い出すことは可能と考えられる。特に、広範な段丘面上に大規模な遺跡立地例は類例が乏しく、むしろ狭小な尾根上が微地形が複雑な様相を呈する箇所にこそ規模の大きな集落が時代を問わずに形成されている傾向が強い。その好例として、中島平・宮の先・下原の各遺跡のそれぞれの集落址があるといえる。

本遺跡の調査により明らかになった点は本文で触れたとおりで、遺跡の一端を垣間見たのみであるが、新しい事実とそれに基づき類推される重要な歴史事象のいくつかが指摘可能である。

縄文時代中期の集落は、調査地点を中心に台地の尾根頂部辺を境に北側の一帯に広がり、同一時期に20~30軒の家で構成されたムラの存在が予想される。

縄文時代中期の集落存続期間については、今回調査による出土遺物及び以前からの採集資料等により、中期中葉に始まり中期終末期に至っていたと判断され、その延長としての縄文時代後期段階にも一部の集落が所を移して存在したと予想される。

当遺跡に最初に成立したムラは、縄文時代中期中葉と判断されるが、その中心は耕作時に住居址の一部が確認されたことやかつての遺物採集状況などから、調査地点の東方段丘最先端部一帯と考えられる。

続く、中期後葉から終末期の中心部は調査地点を含む、工場用地西側と、その北側に緩く傾斜する一帯にあり、当地方でも屈指の大集落を成していた可能性が強い。

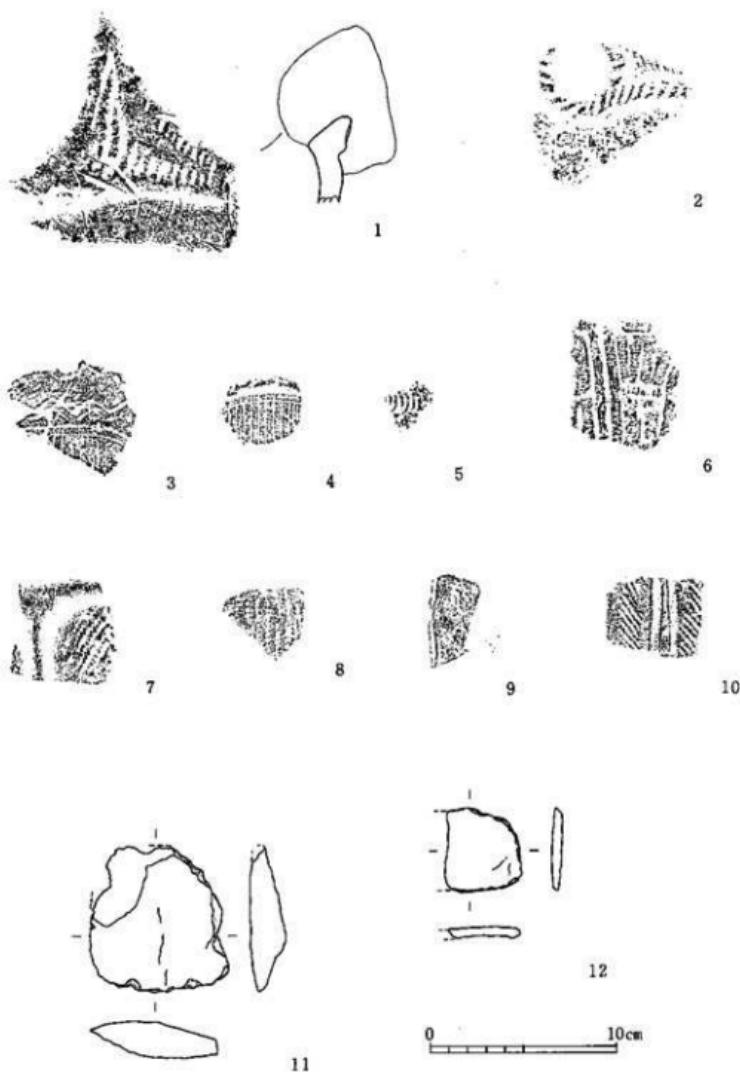
弥生時代後期の住居址は1軒を確認したのみで具体的な状況は判断し難いが、当地方該期の集落の通例では少なくとも数軒の家で構成されており、調査範囲の南側一帯に広がる湿地帯縁辺部に展開しているものと判断される。

いずれにしても、天龍川西岸の中位段丘先端部に立地する縄文時代中期の大集落の存在を今回の調査により確認したわけであり、今後の考古学研究はもちろん地域の歴史解明に果す役割は多大であり、本書による成果と遺跡そのものの持つ重要性が将来に生かされてこそ、文化財保護の姿が現実のものとなると考えられる。

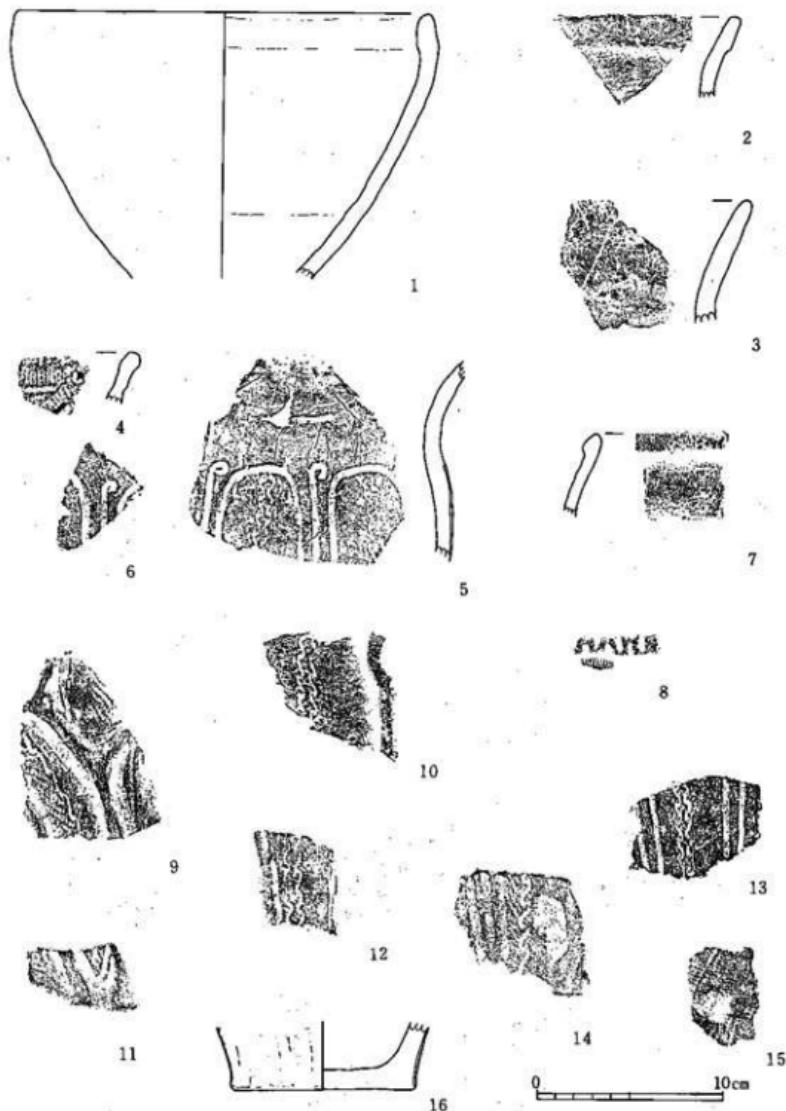
最後になりましたが、文化財保護に深いご理解と、ご協力をいただいた株式会社平和時計製作所に対して記して感謝の意を表する次第です。

(小林正春)

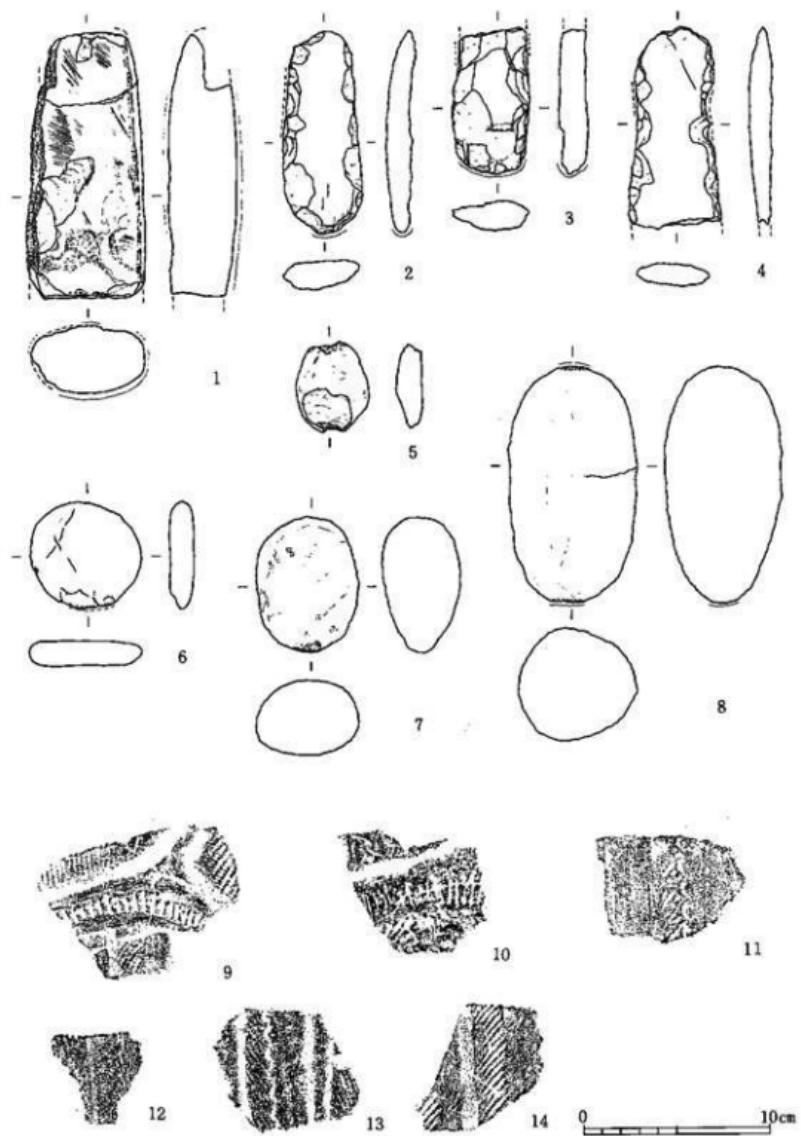
# 図 版



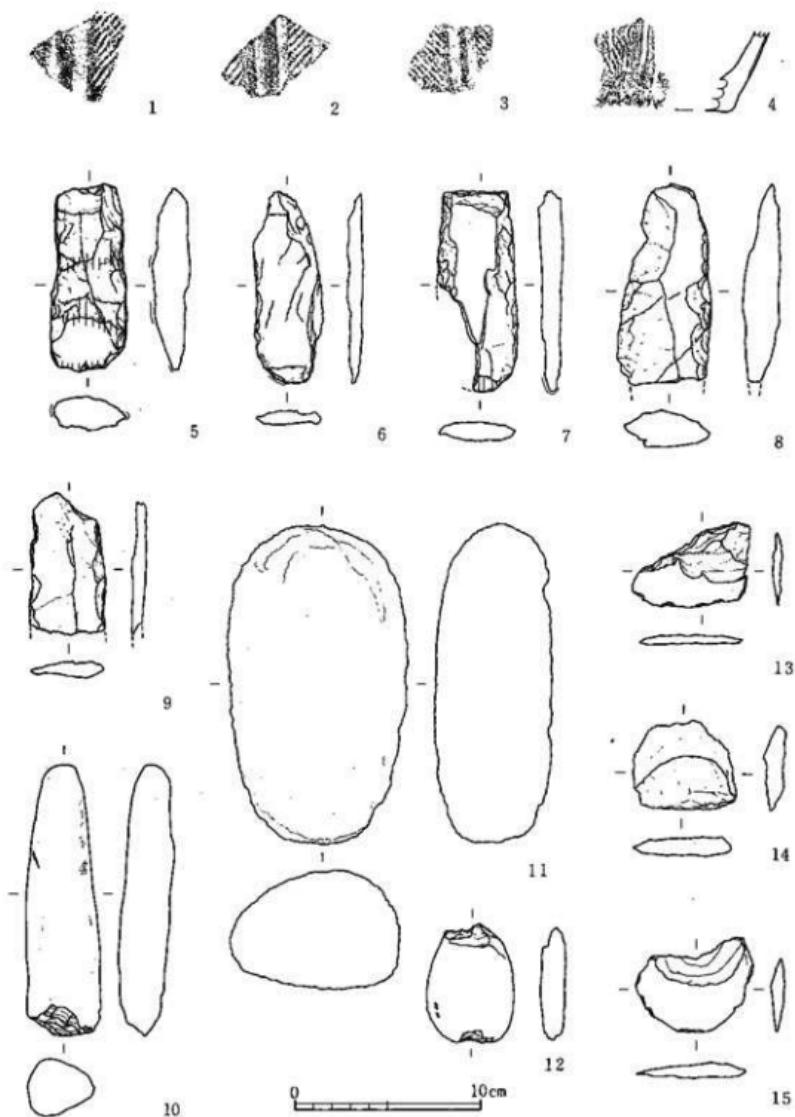
第1図 TSH 1号住居址出土遺物



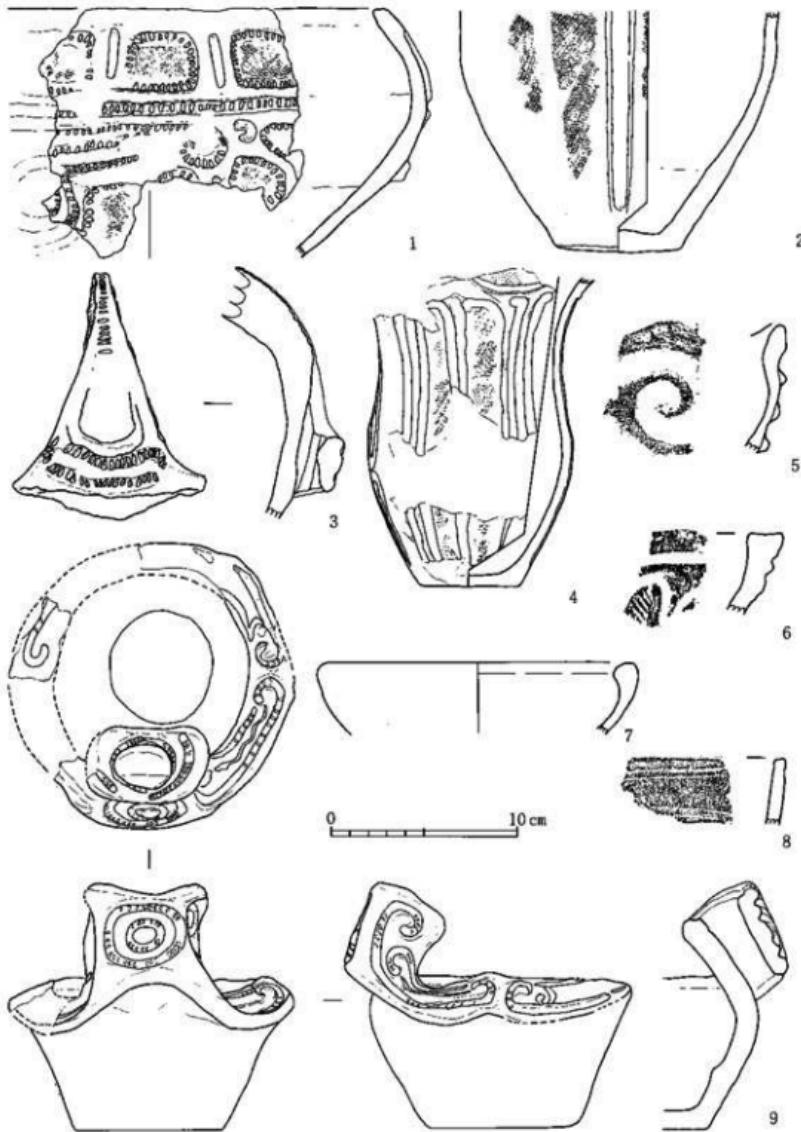
第2図 TSH 2号住居址出土遺物



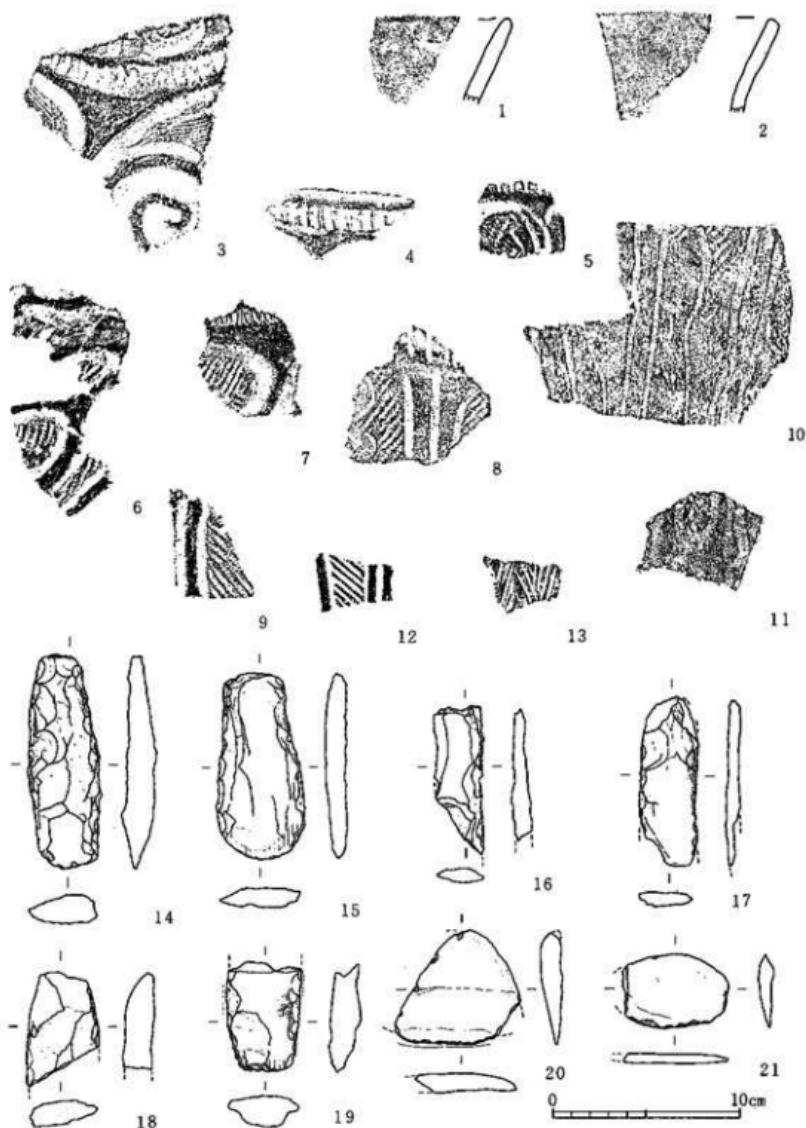
第3図 TSH 2・4号住居址出土遺物 (1~8 2号住, 9~14 4号住)



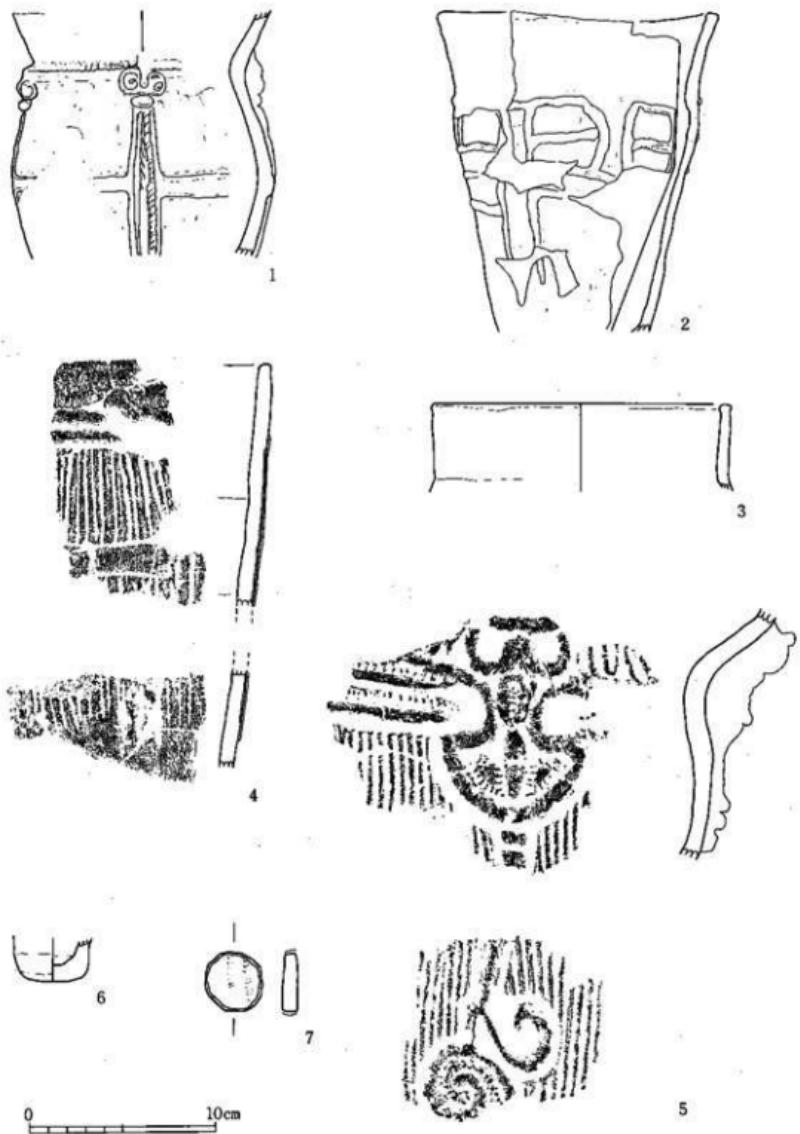
第4図 TSH 4号住居址出土遺物



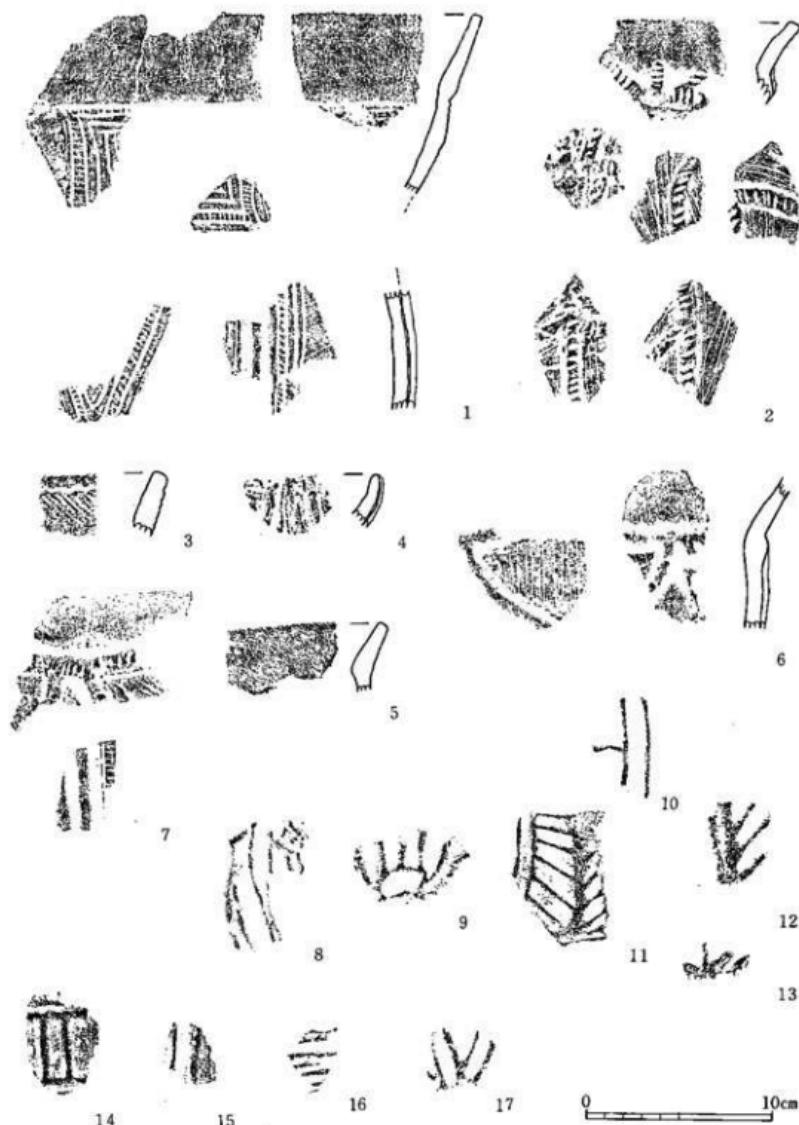
第5図 TSH 5号住居址出土遺物



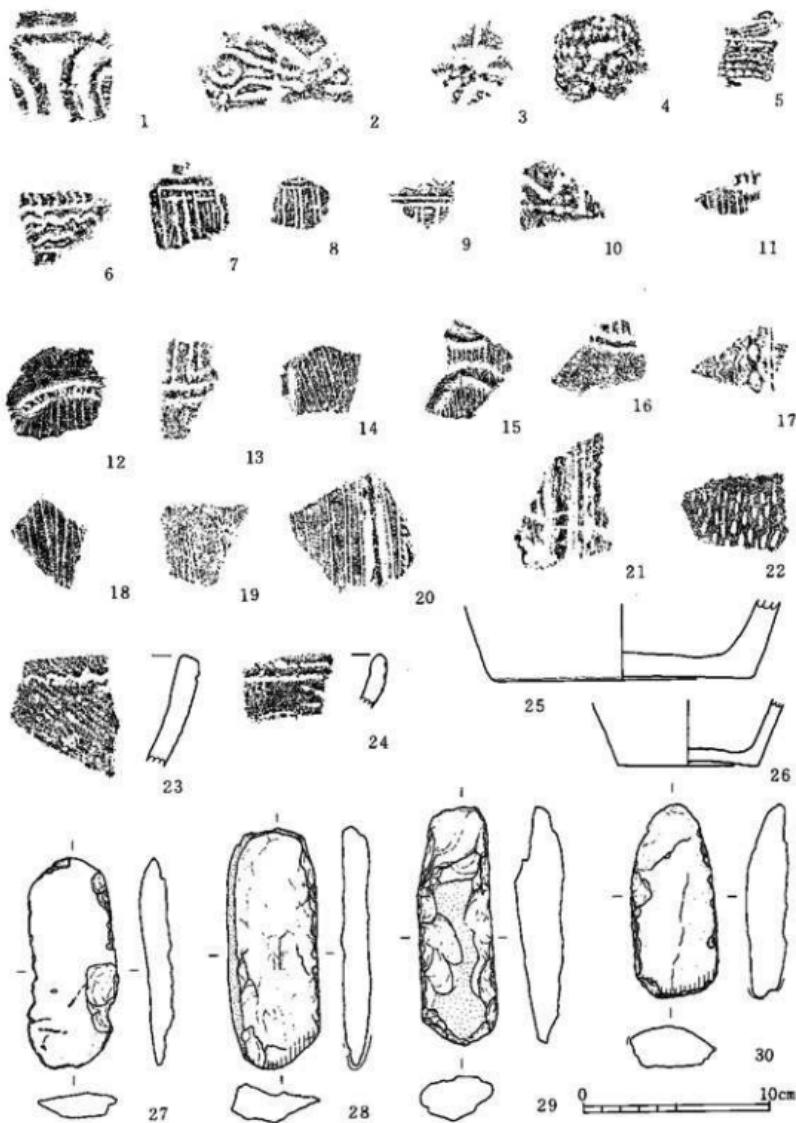
第6図 TSH 5号住居址出土遺物



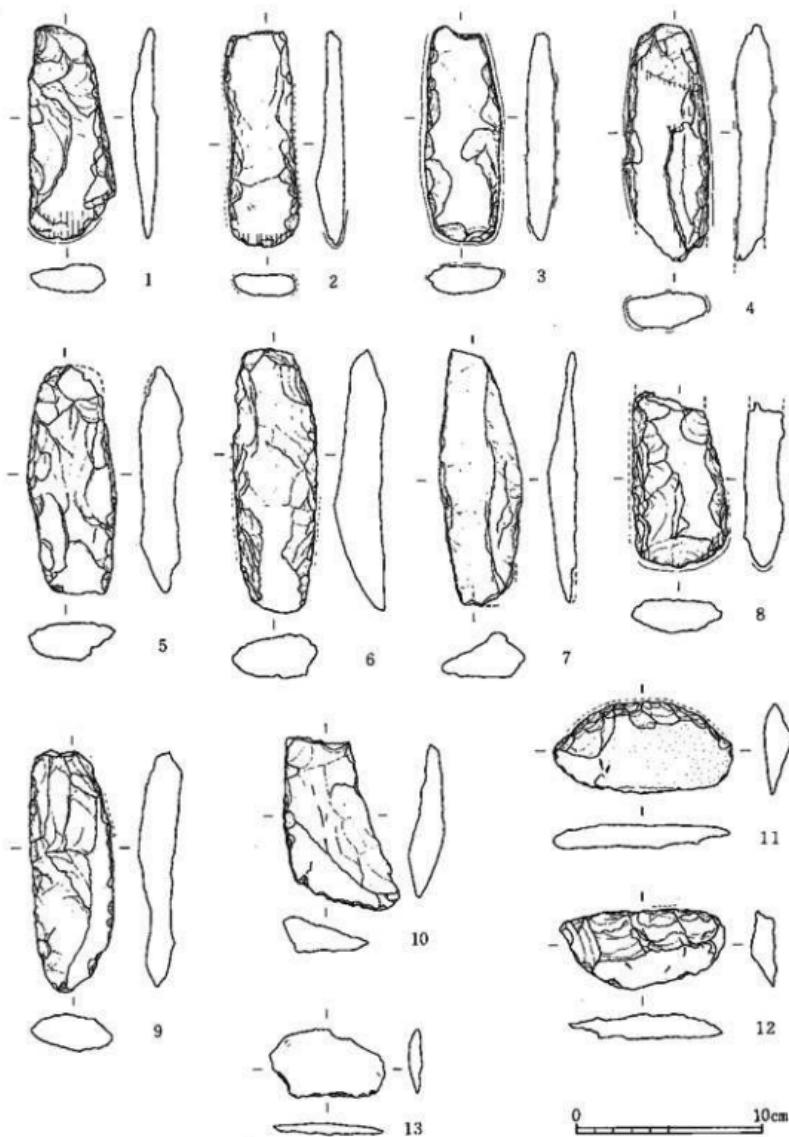
第7図 TSH 6号住居址出土遺物



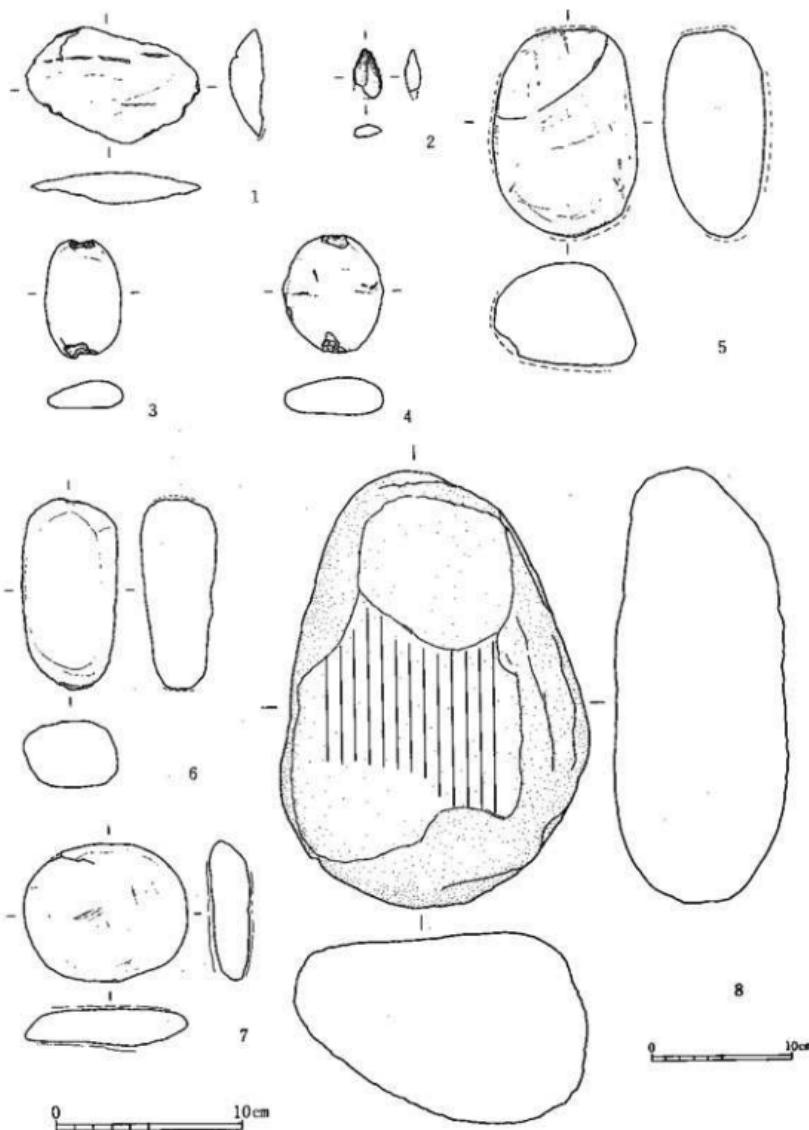
第8図 TSH 6号住居址出土遺物



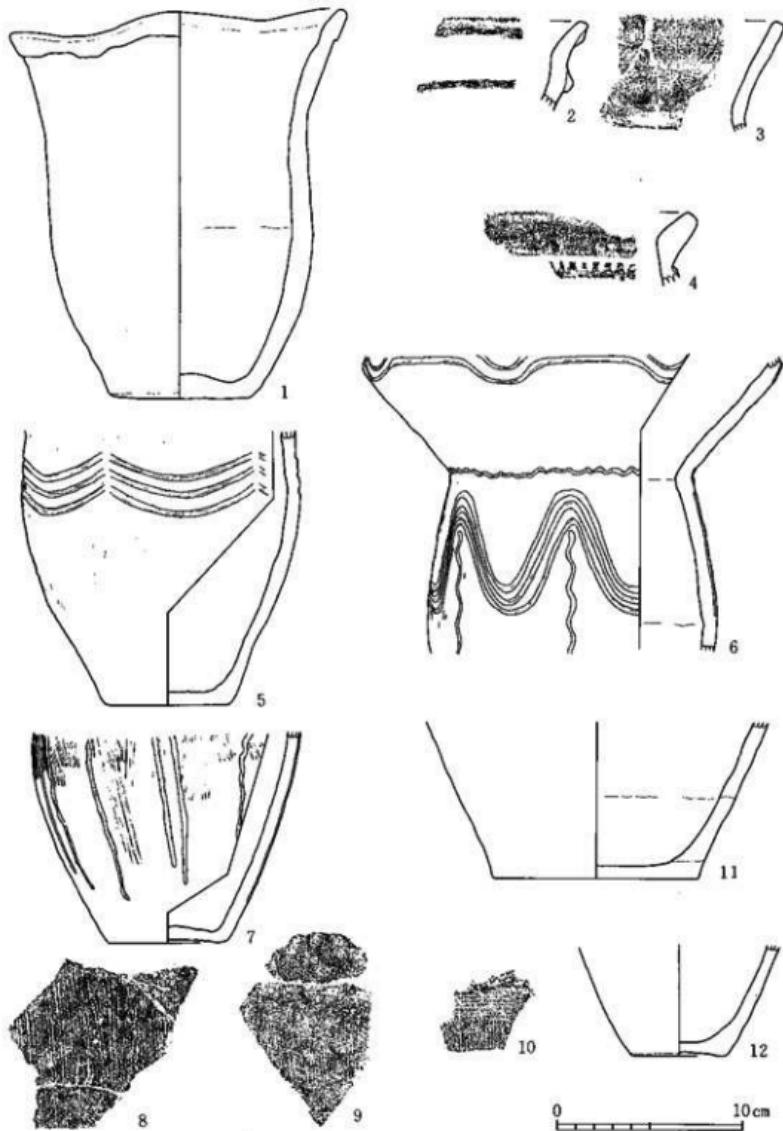
第9図 TSH 6号住居址出土遺物



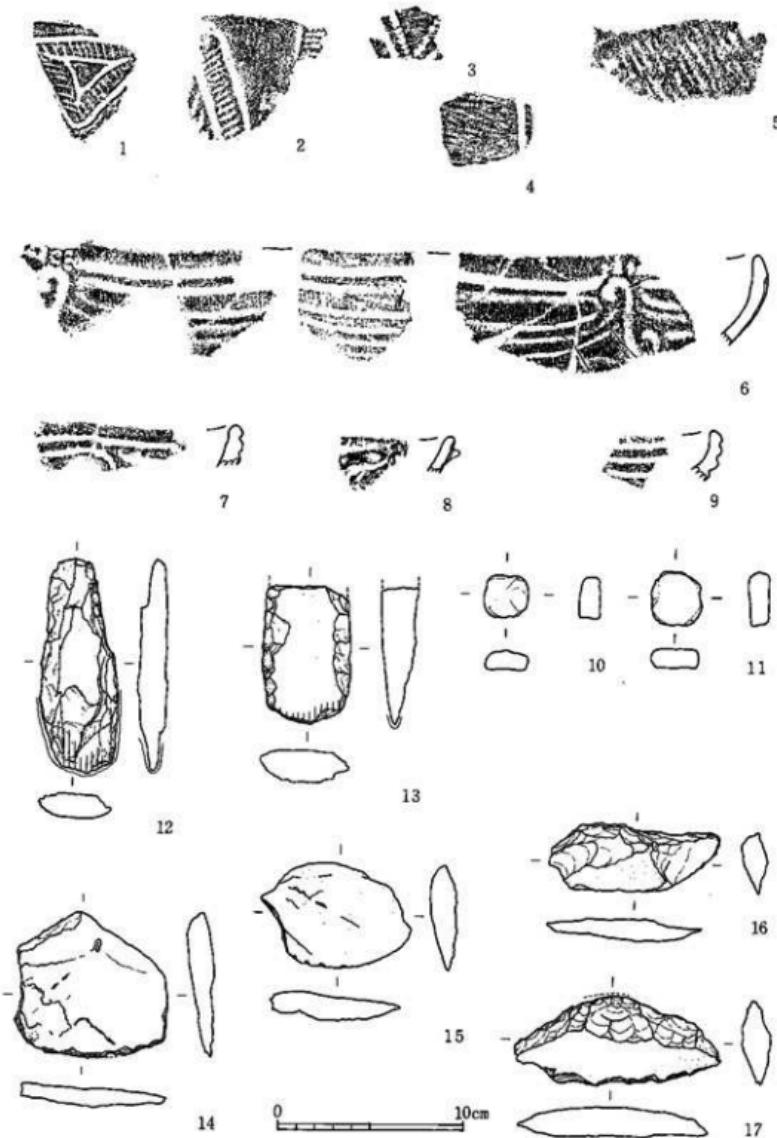
第10図 TSH 6号住居址出土遺物



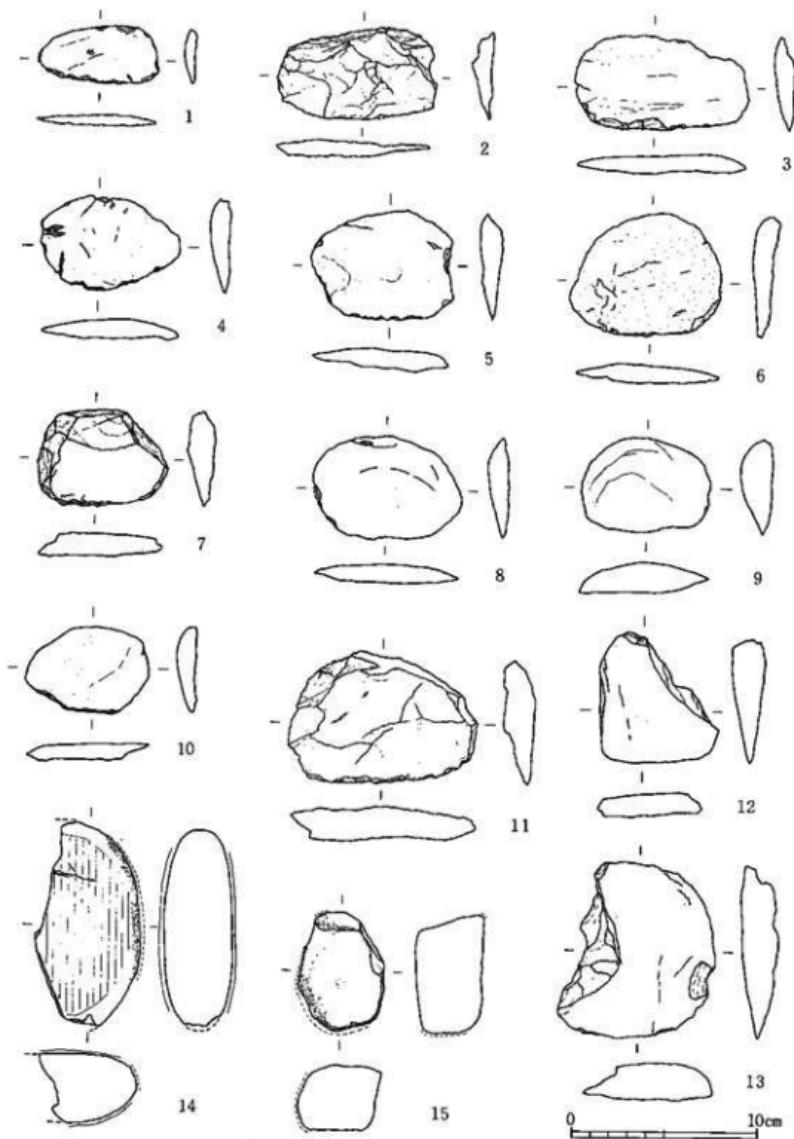
第11図 TSH 6号住居址出土遺物



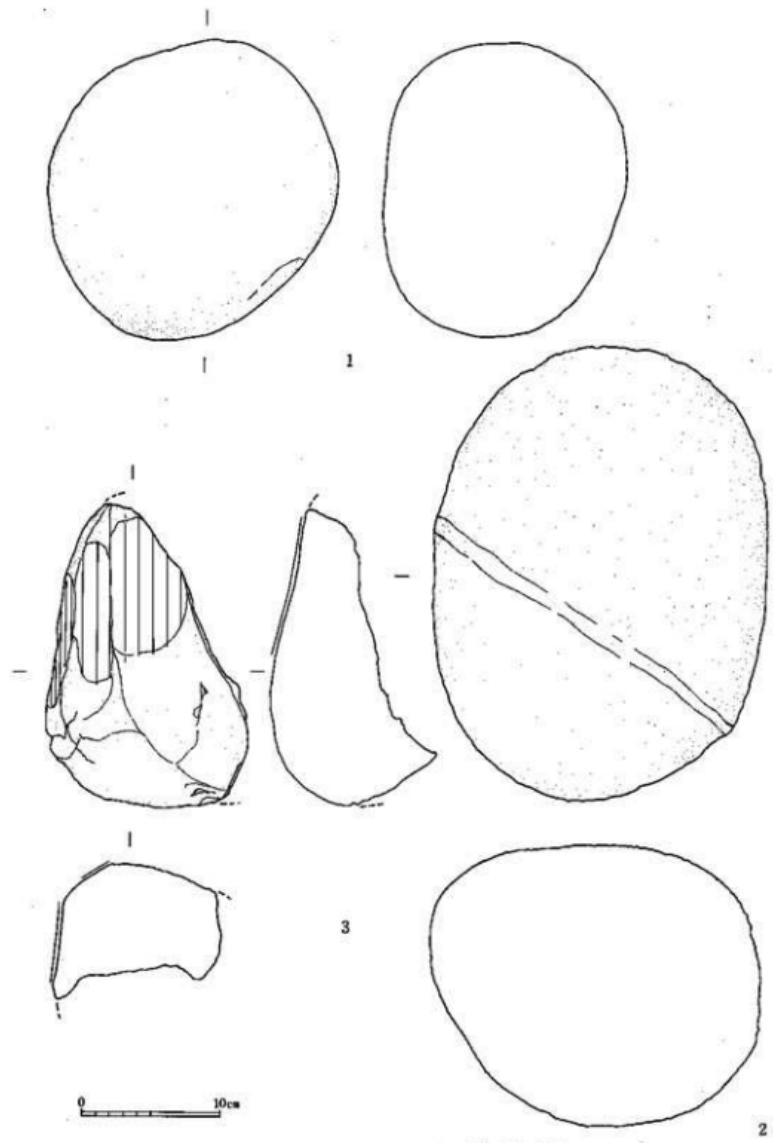
第12図 TSH 7号住居址出土遺物



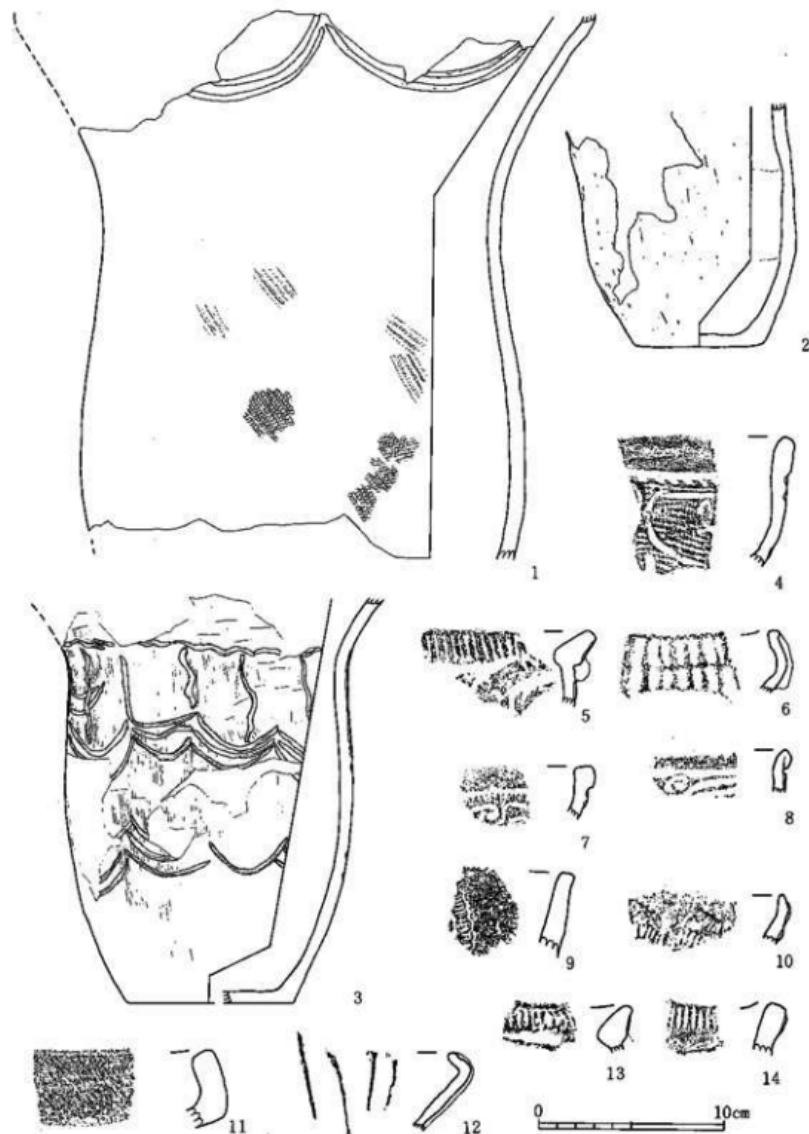
第13図 TSH 7号住居址出土遺物



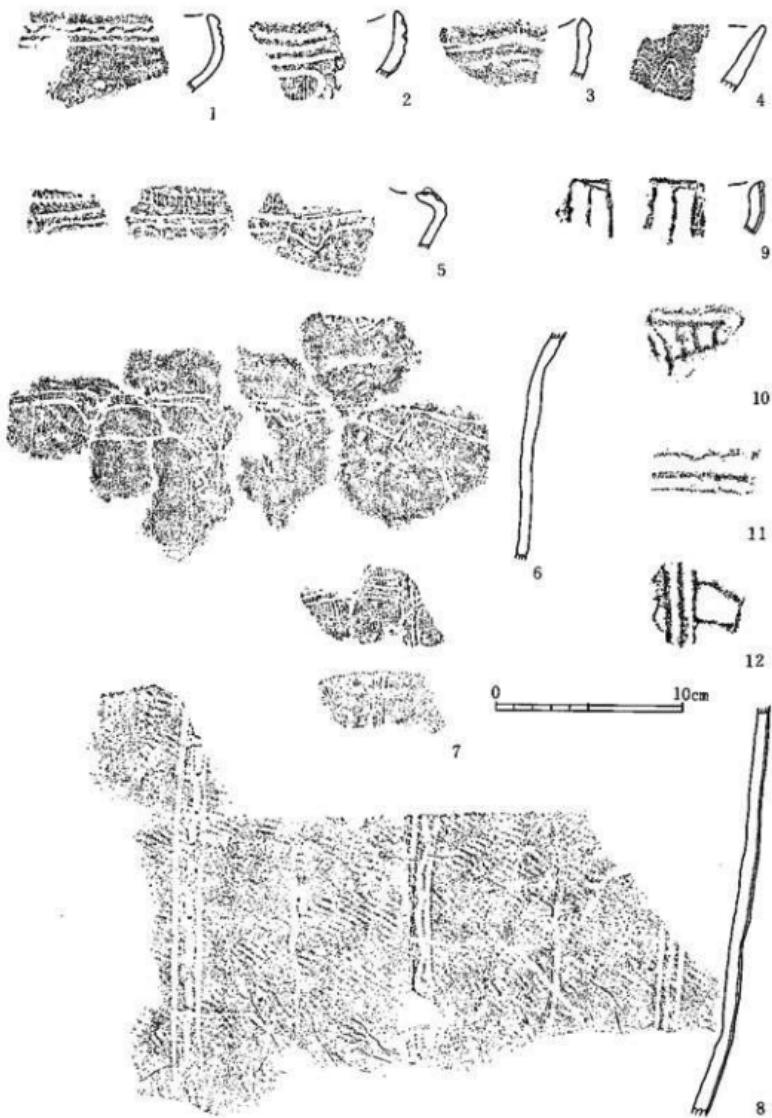
第14図 TSH 7号住居址出土遺物



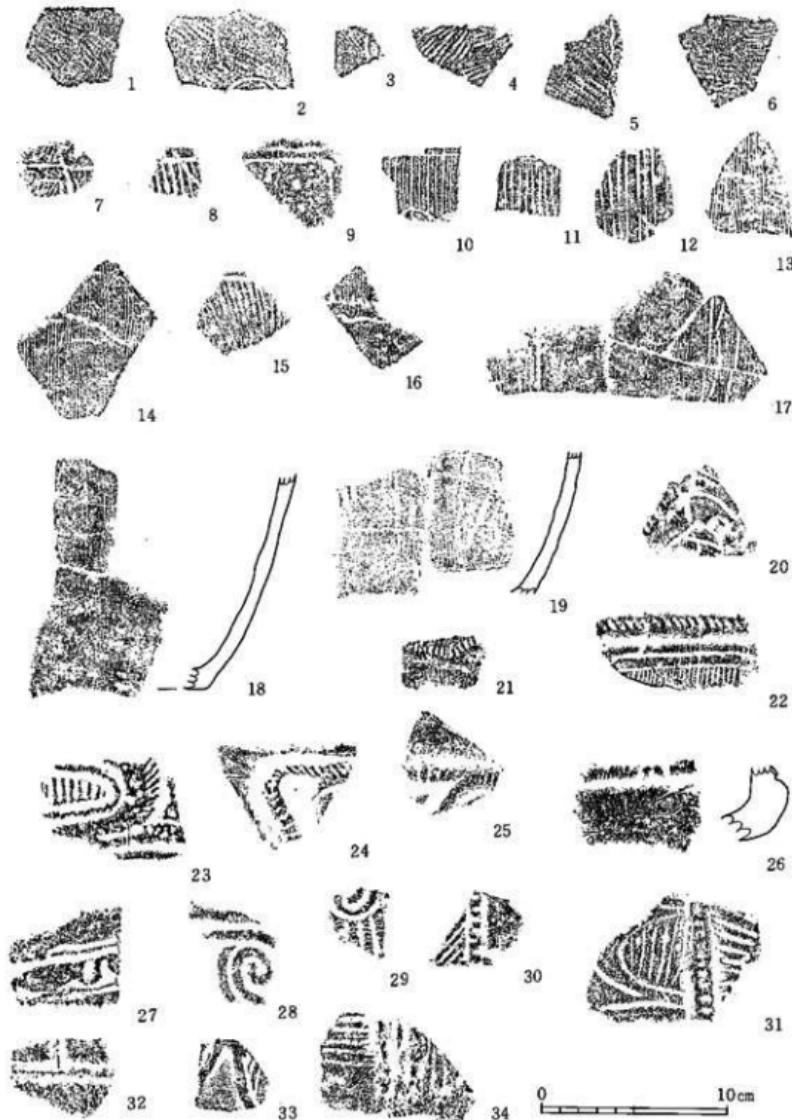
第15図 TSH 7号住居址出土遺物



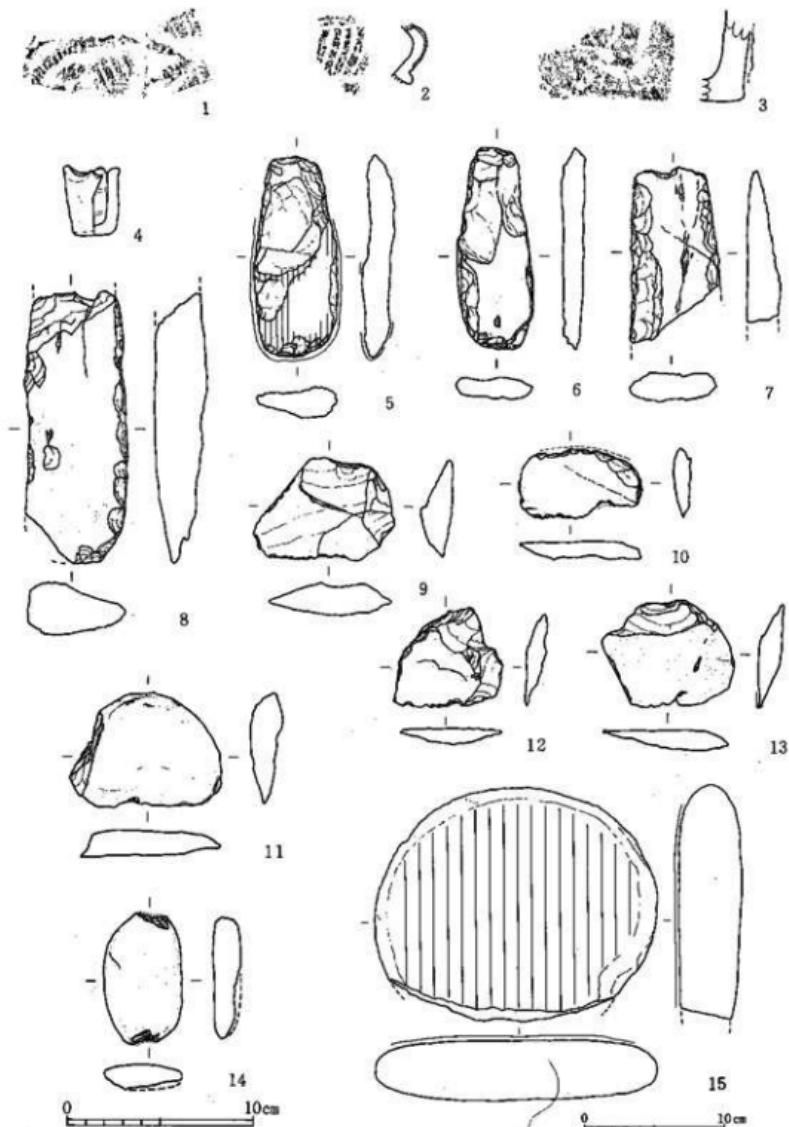
第16図 TSH 8号住居址出土遺物



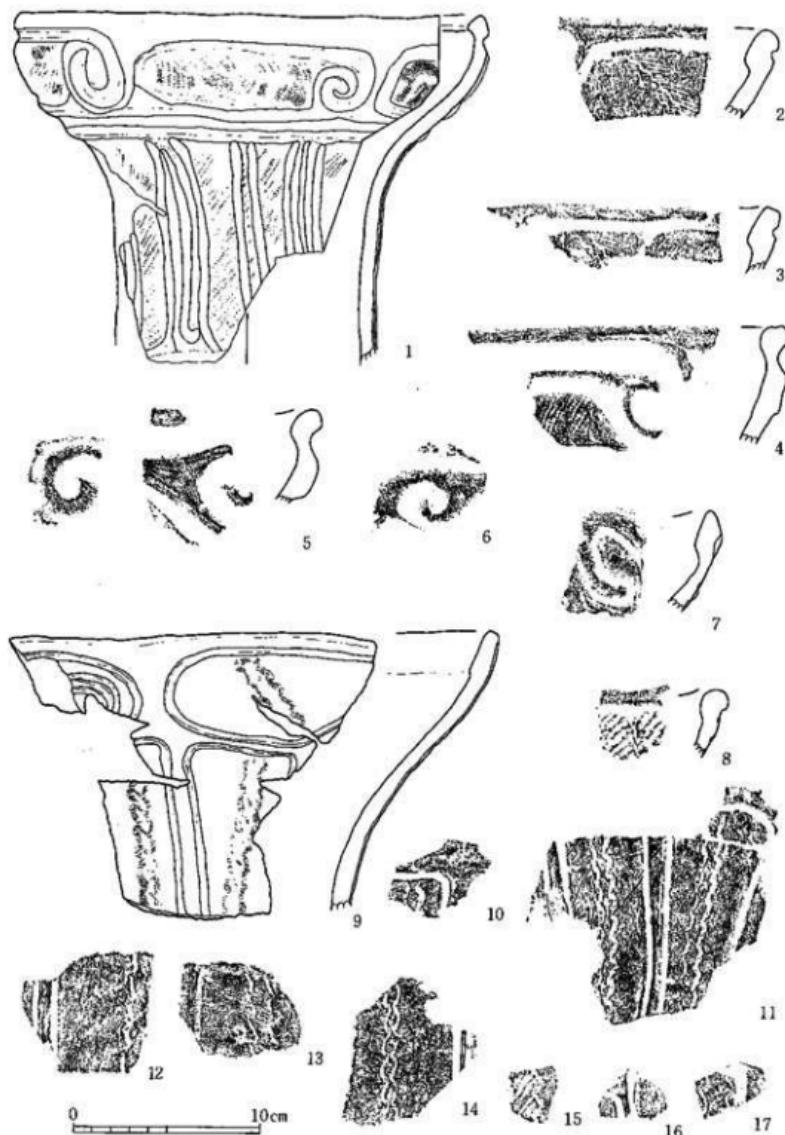
第17図 TSH 8号住居址出土遺物



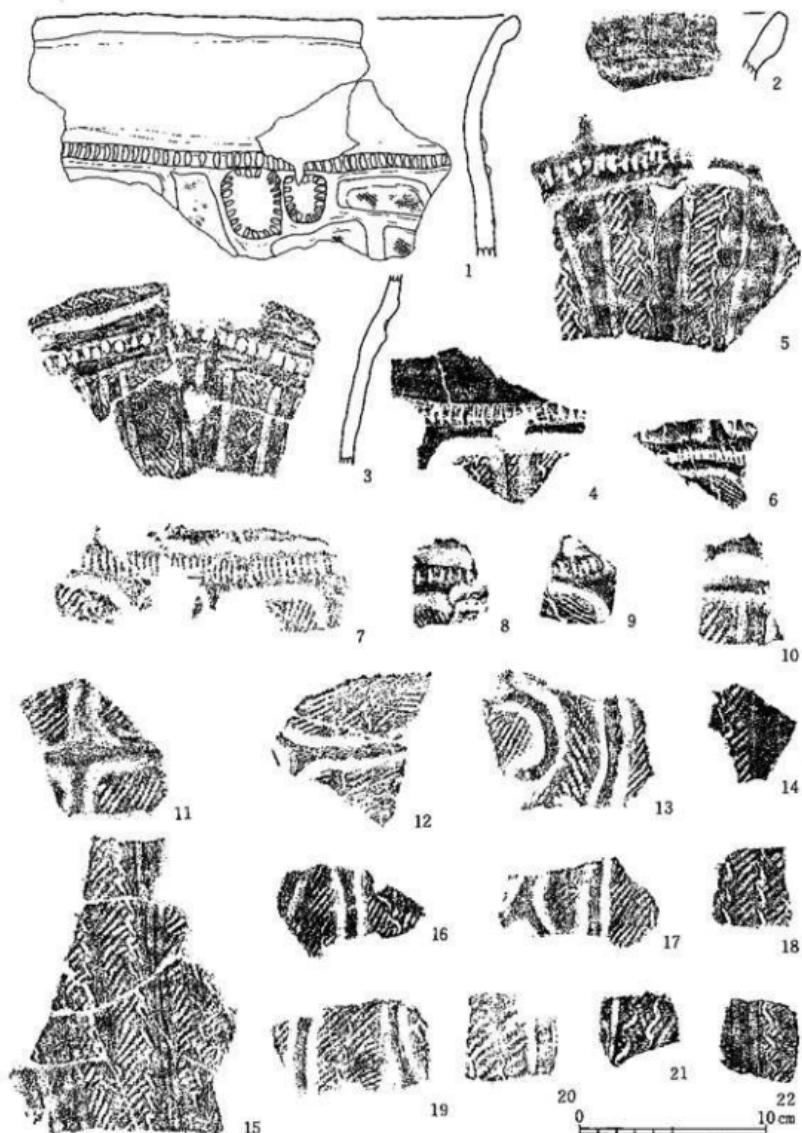
第18図 TSH 8号住居址出土遺物



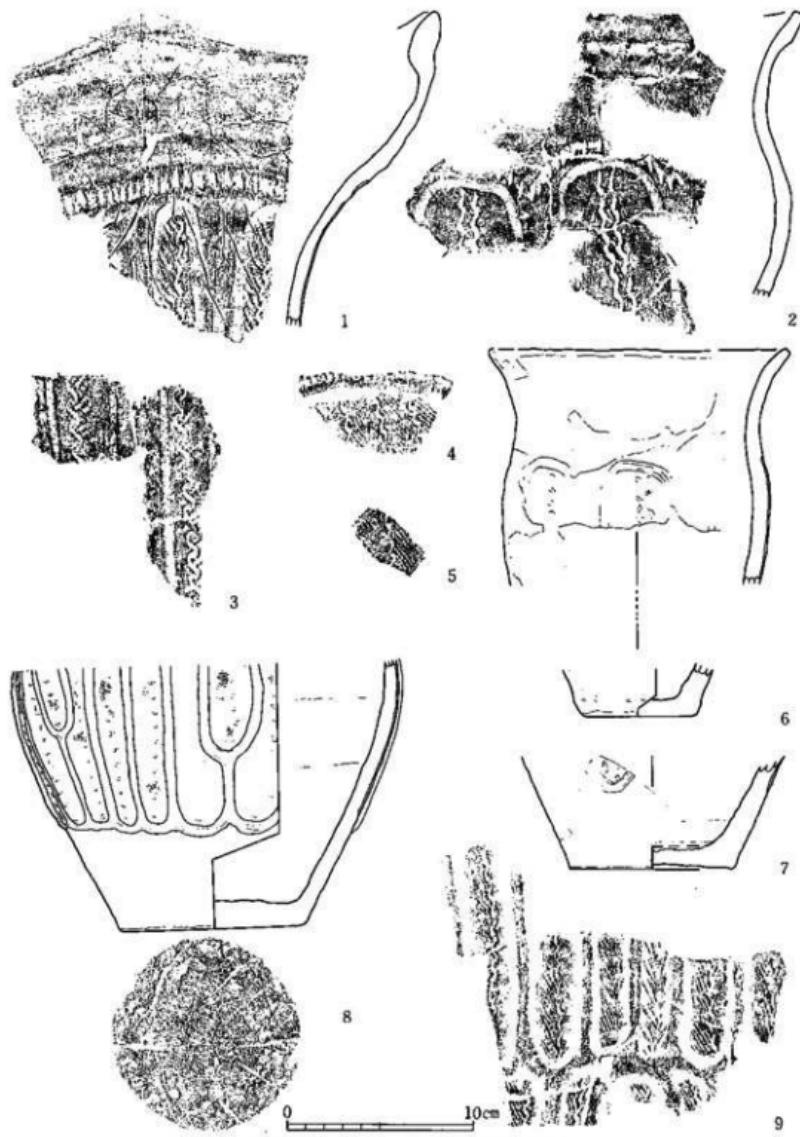
第19図 TSH 8号住居址出土遺物



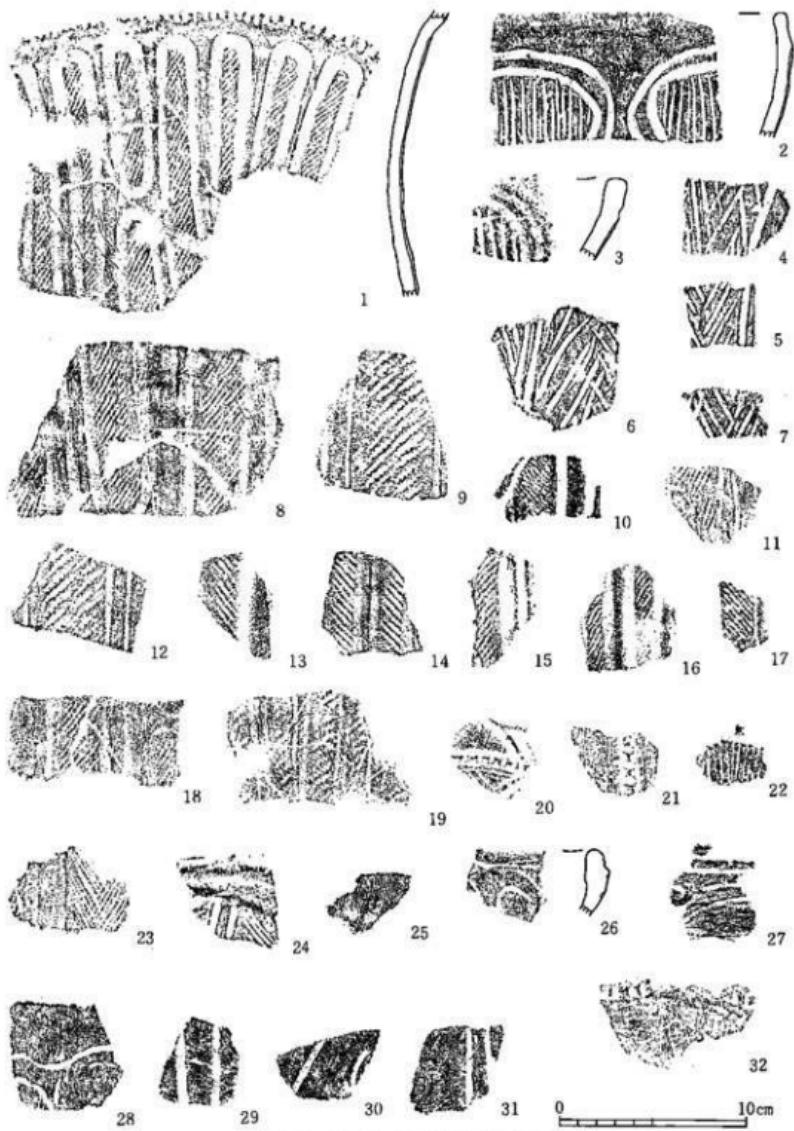
第20図 TSH 9号住居址出土遺物



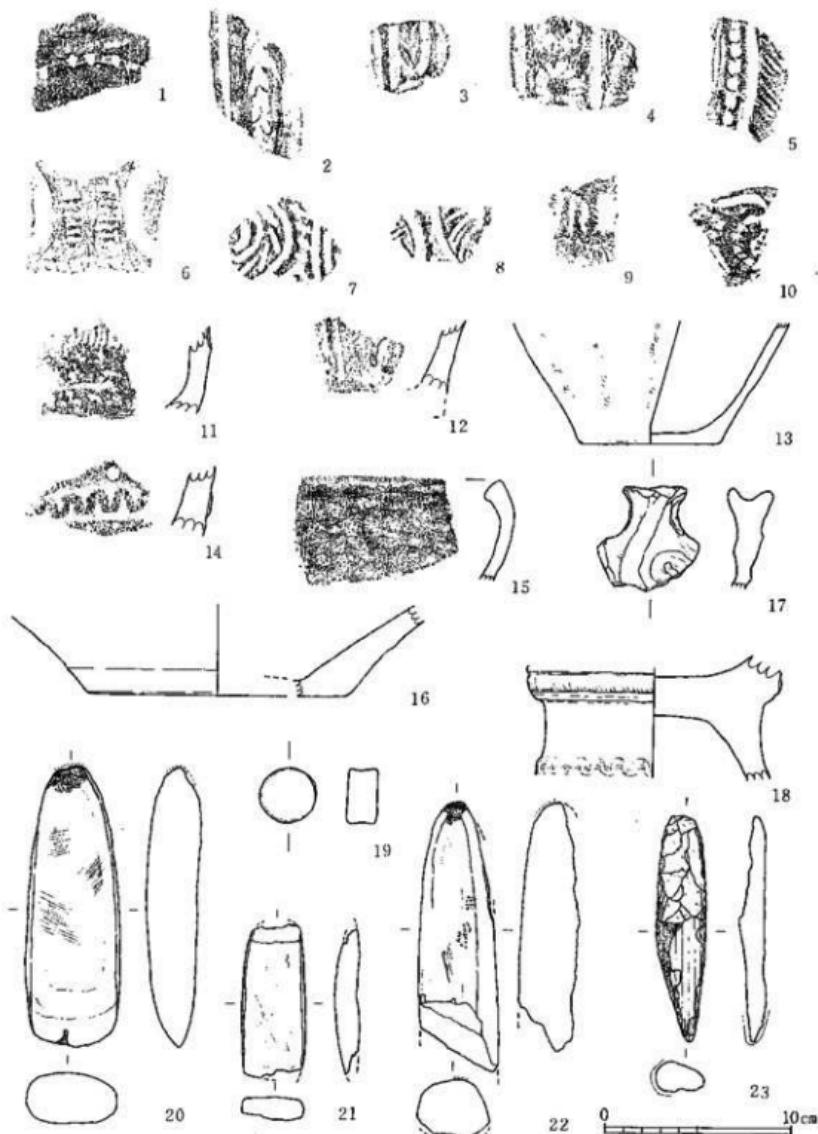
第21図 TSH 9号住居址出土遺物



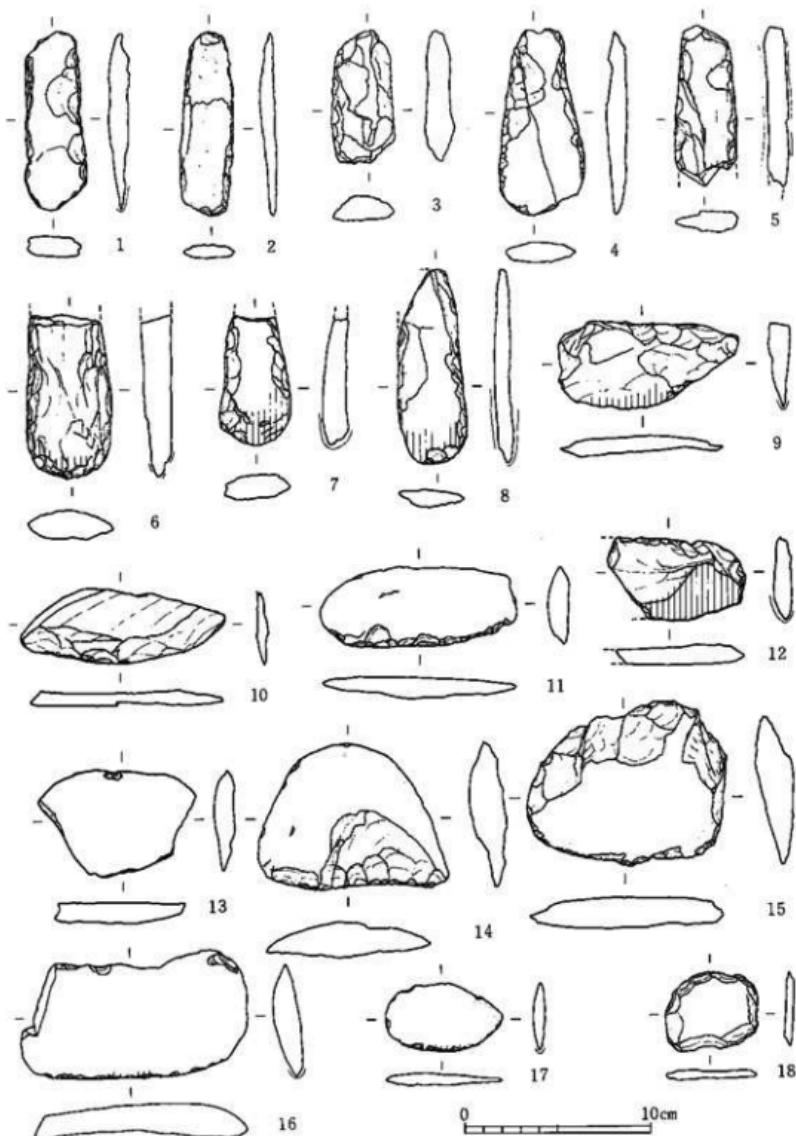
第22図 TSH 9号住居址出土遺物



第23図 TSH 9号住居址出土遺物



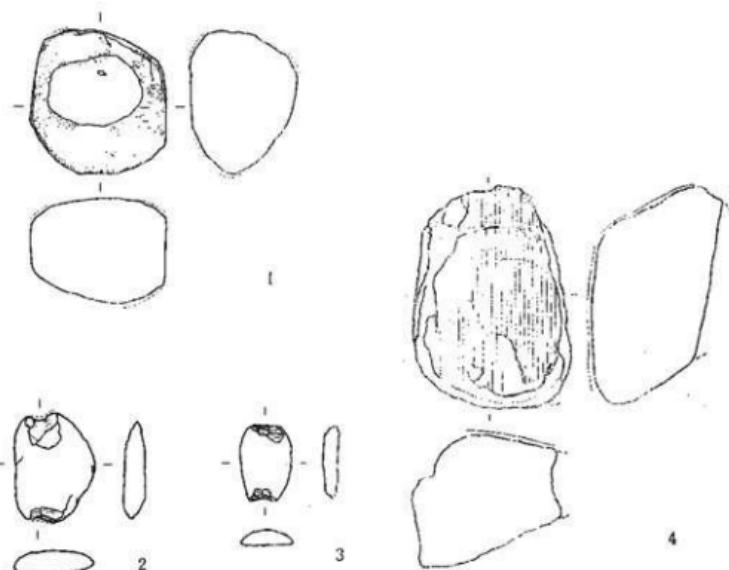
第24図 TSH 9号住居址出土遺物



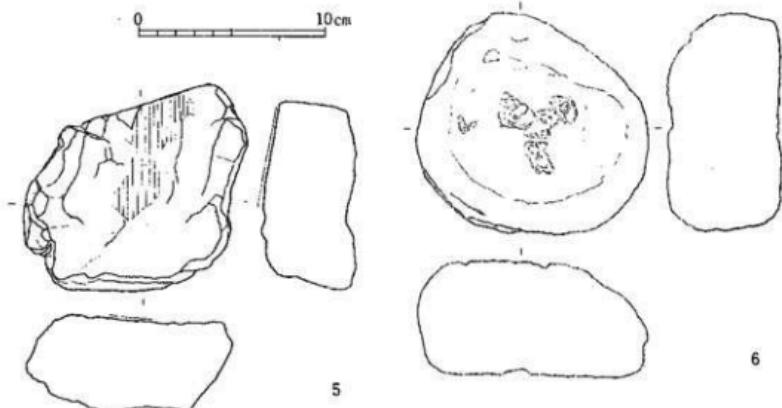
第25図 TSH 9号居住址出土遺物



第26図 TSH 9号住居址出土遺物

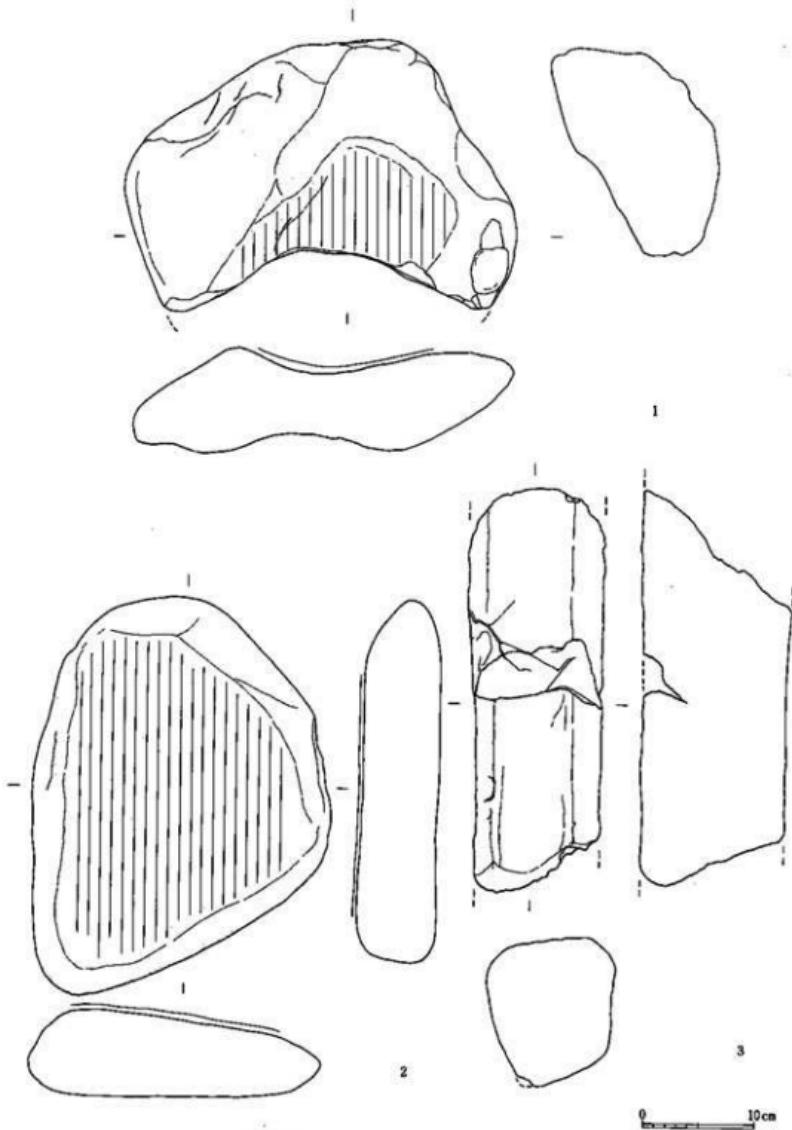


0 10cm

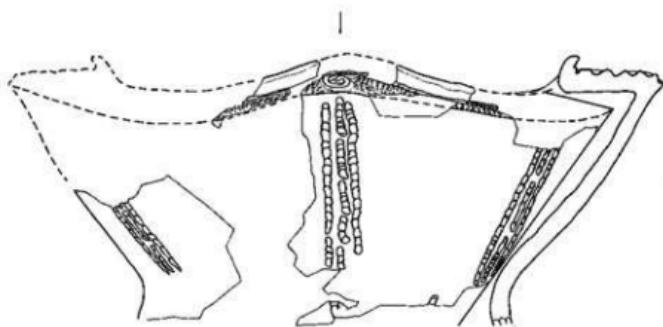
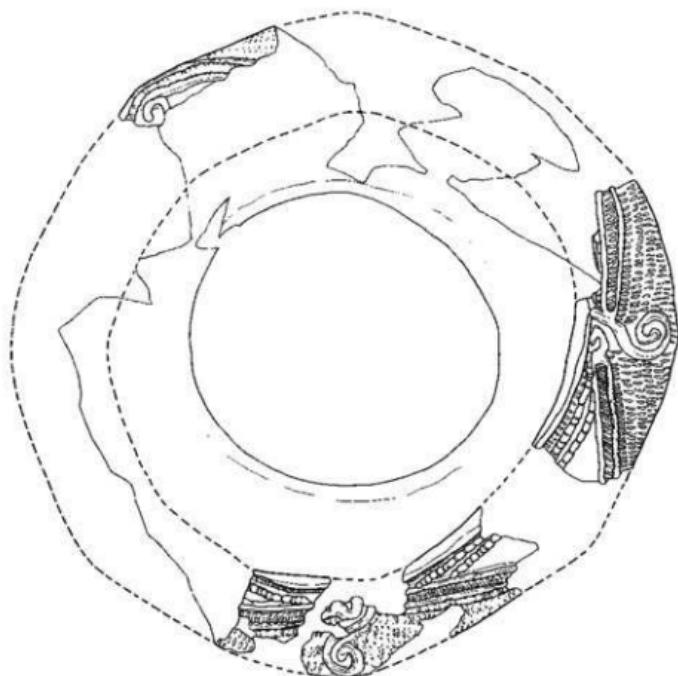


0 10cm

第27図 TSH 9号住居址出土遺物

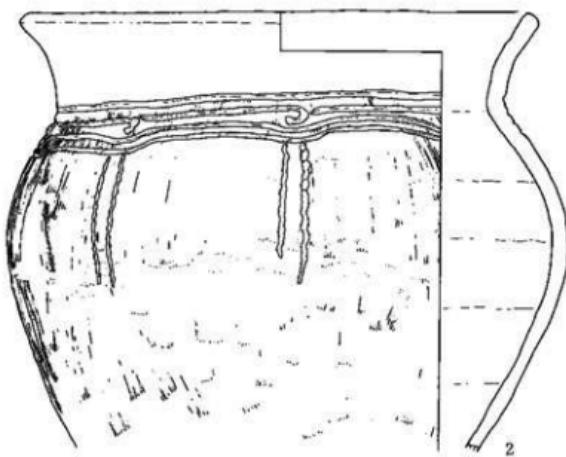
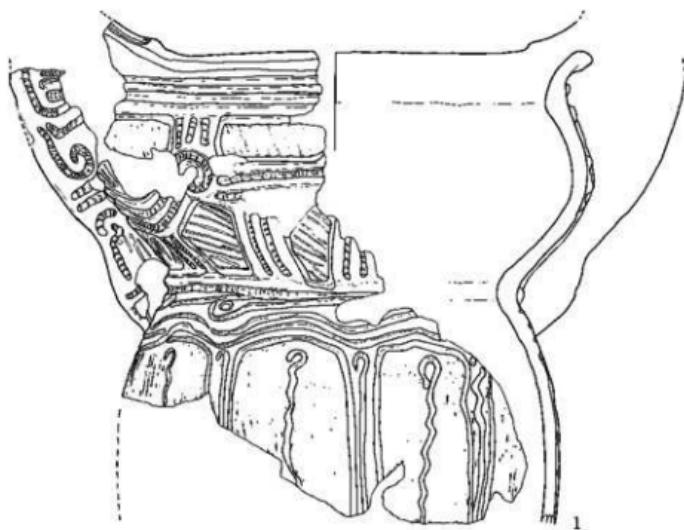


第28図 TSH 9号住居址出土遺物



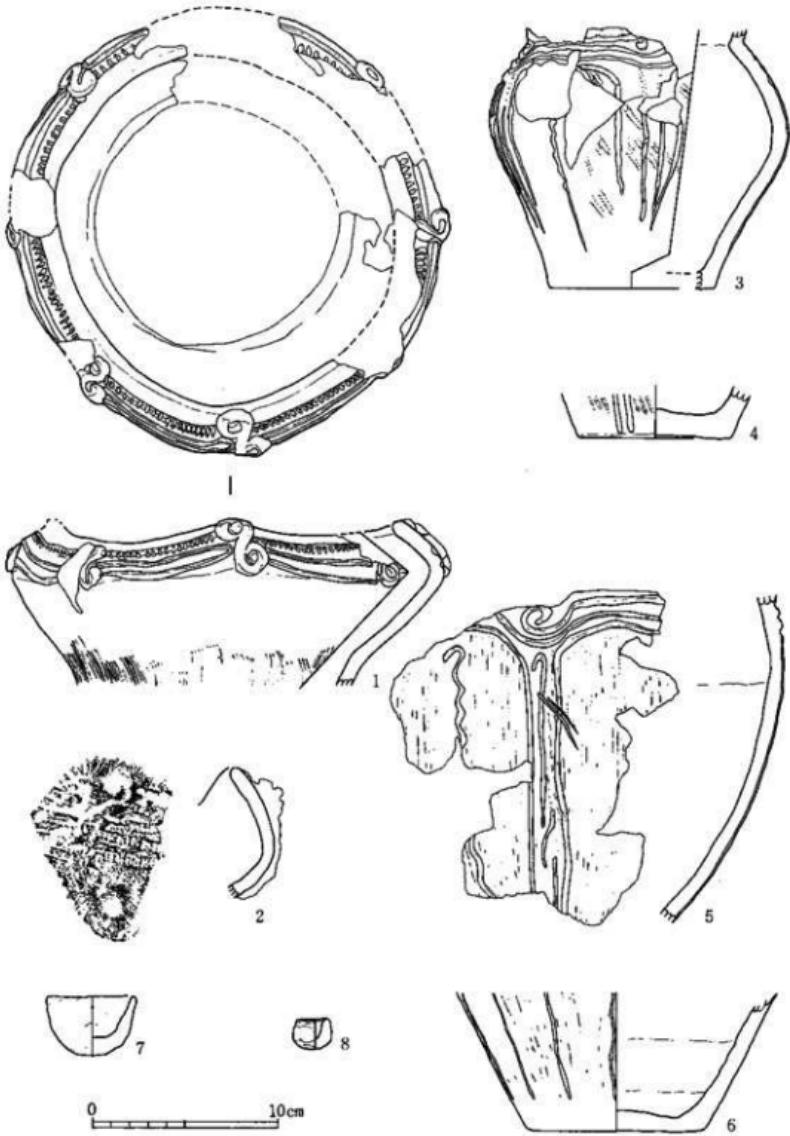
0 10cm

第29図 TSH 10号住居址出土遺物



0 10cm

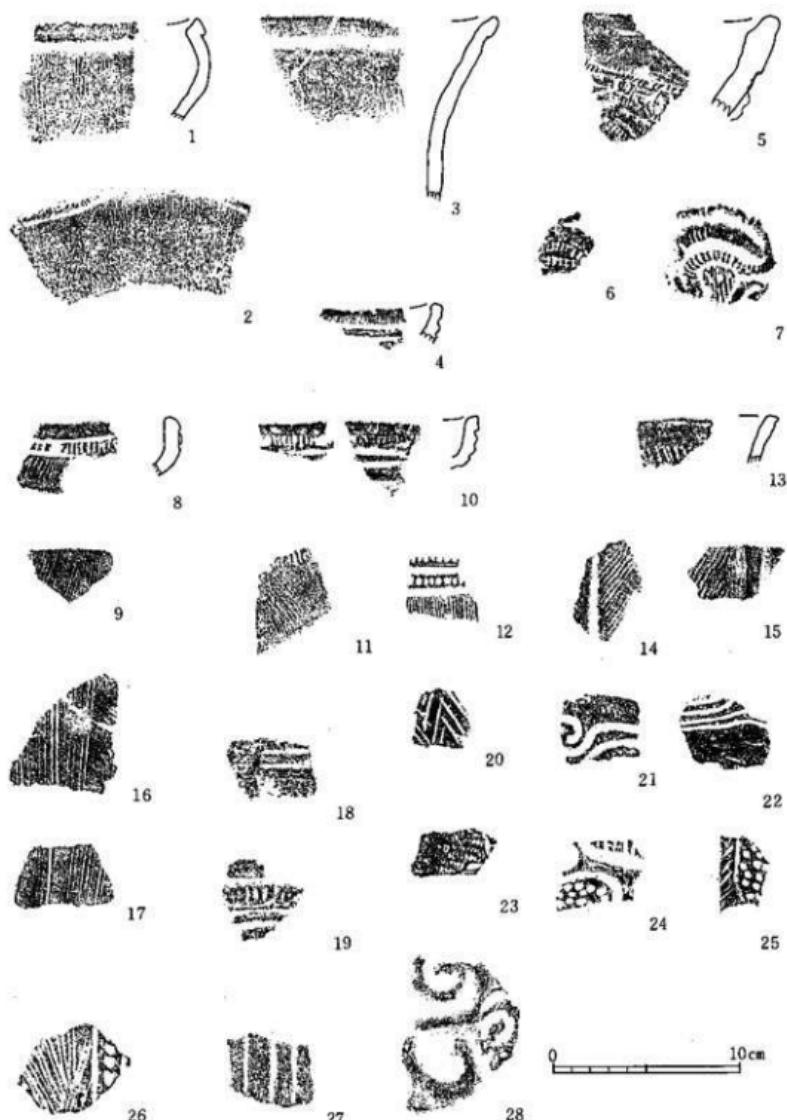
第30図 TSH 10号住居址出土遺物



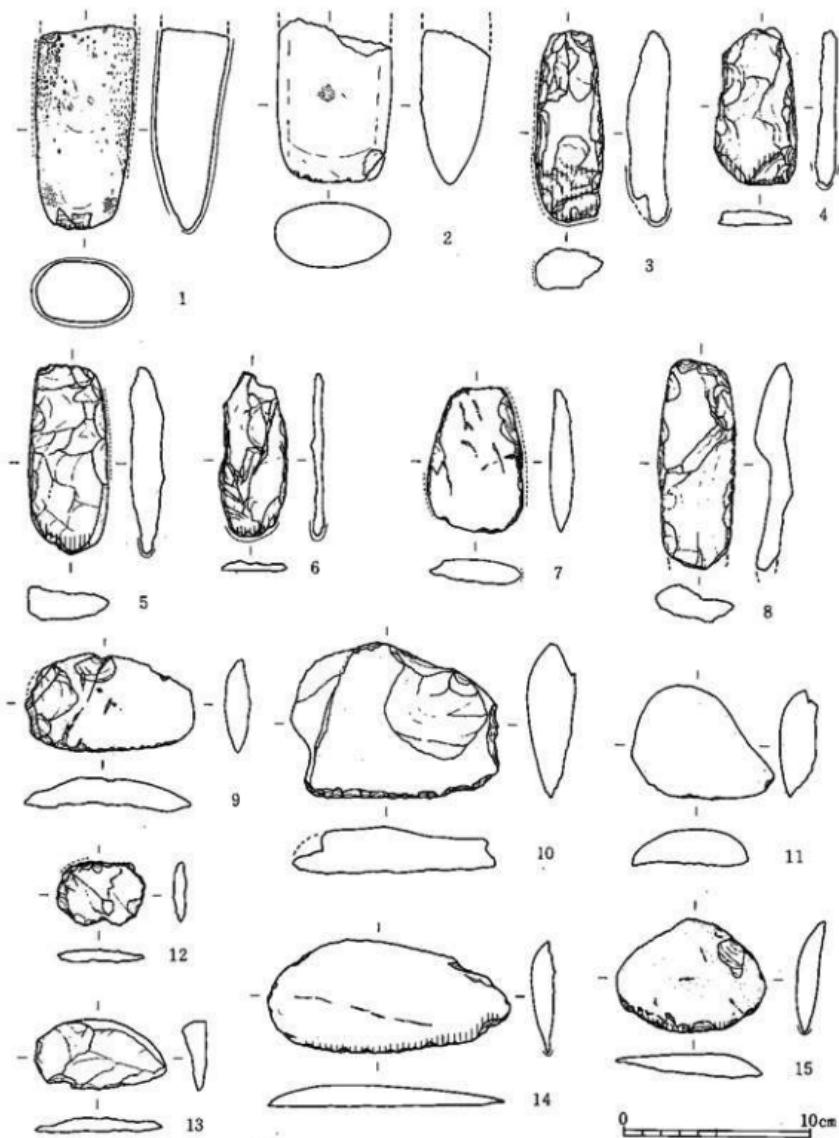
第31図 TSH 10号住居址出土遺物



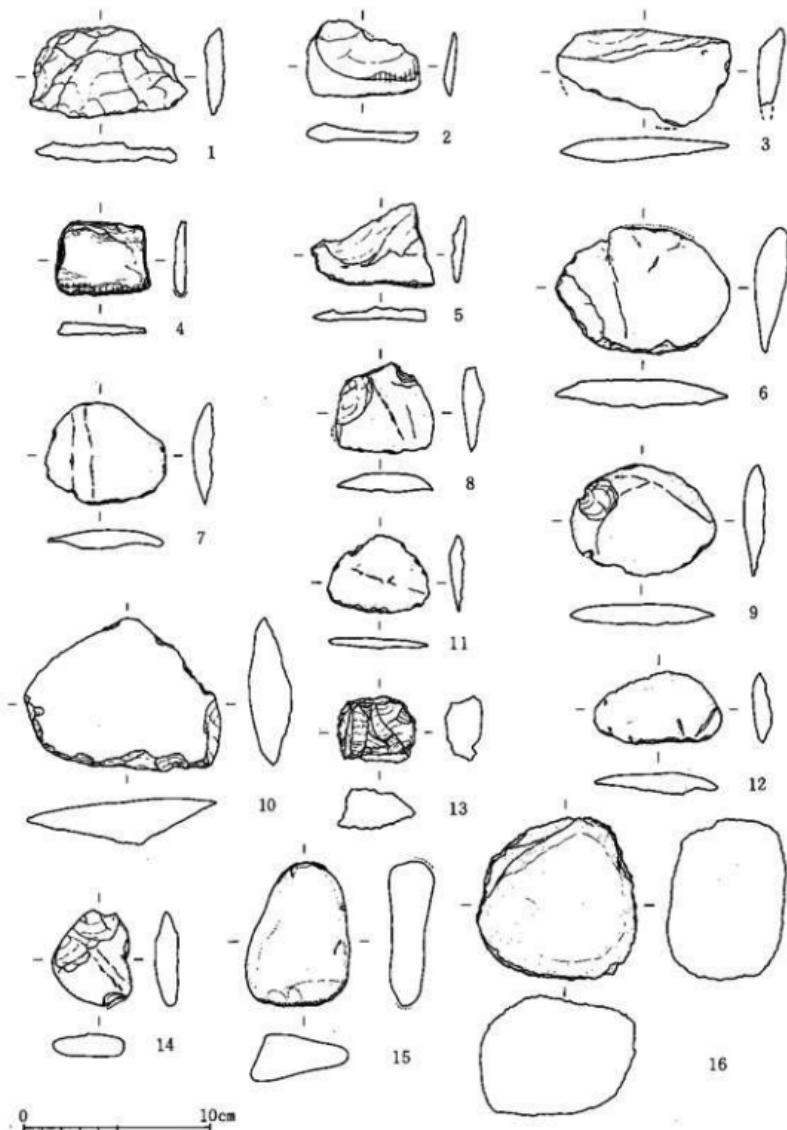
第32図 TSH 10号住居址出土遺物



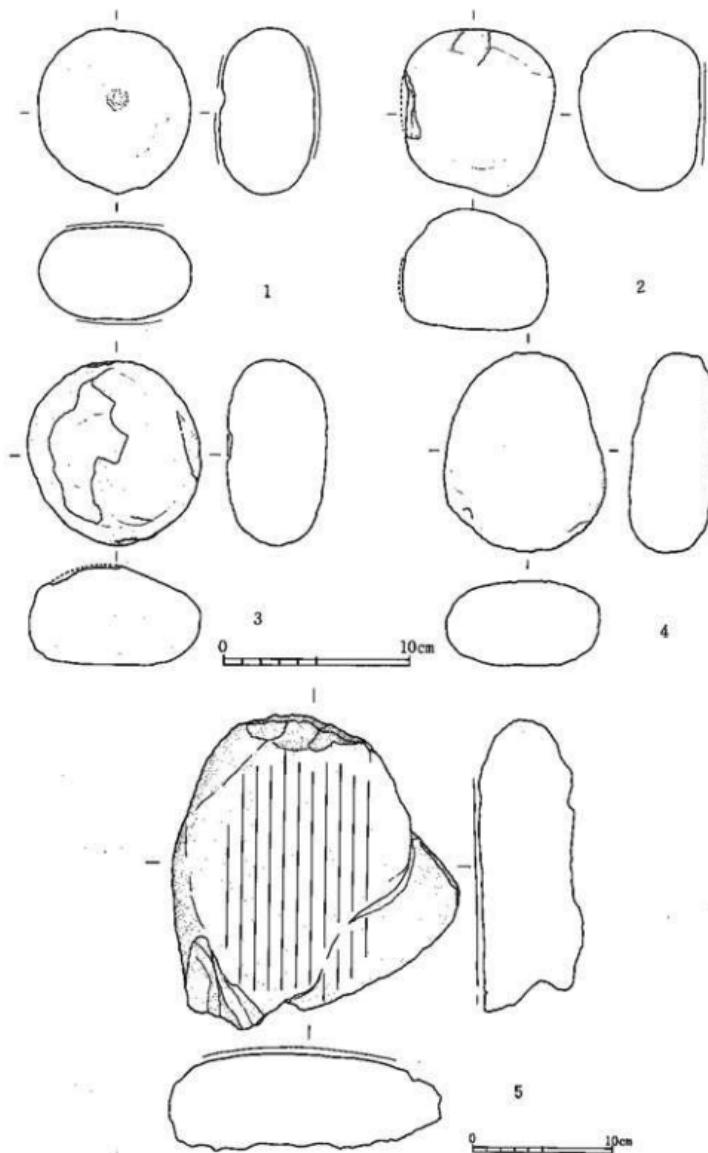
第33図 TSH 10号住居址出土遺物



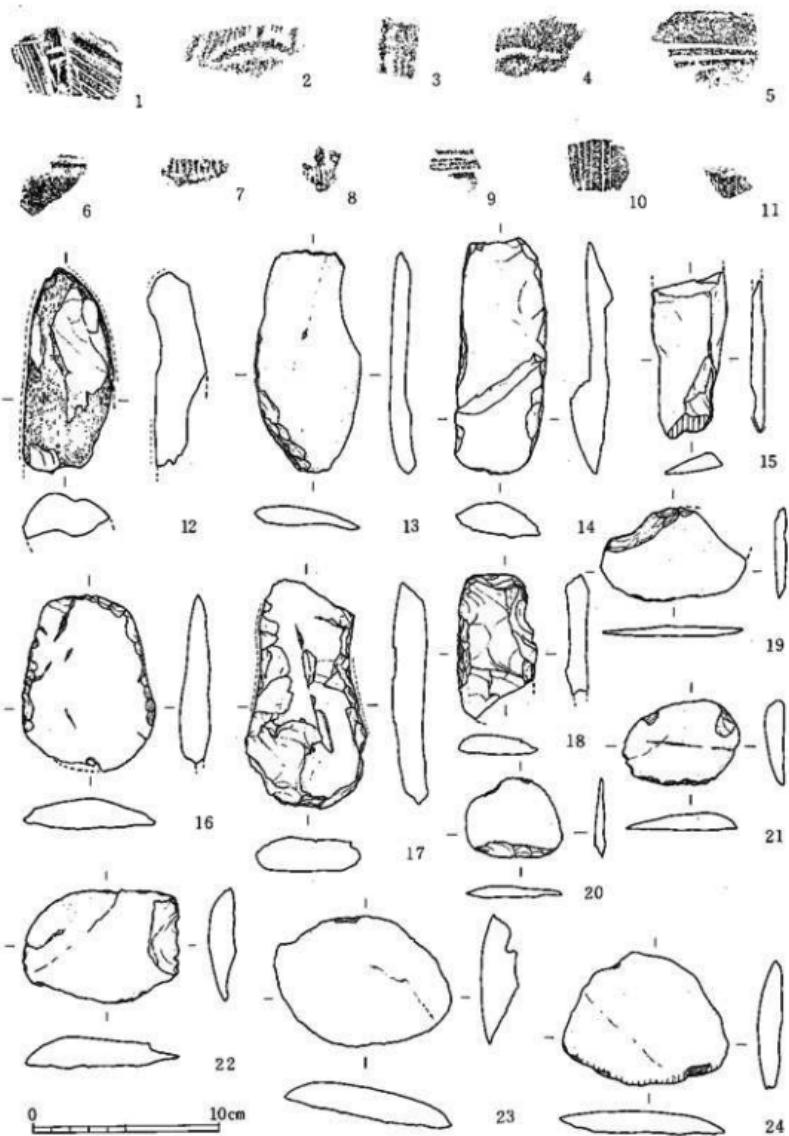
第34図 TSH 10号住居址出土遺物



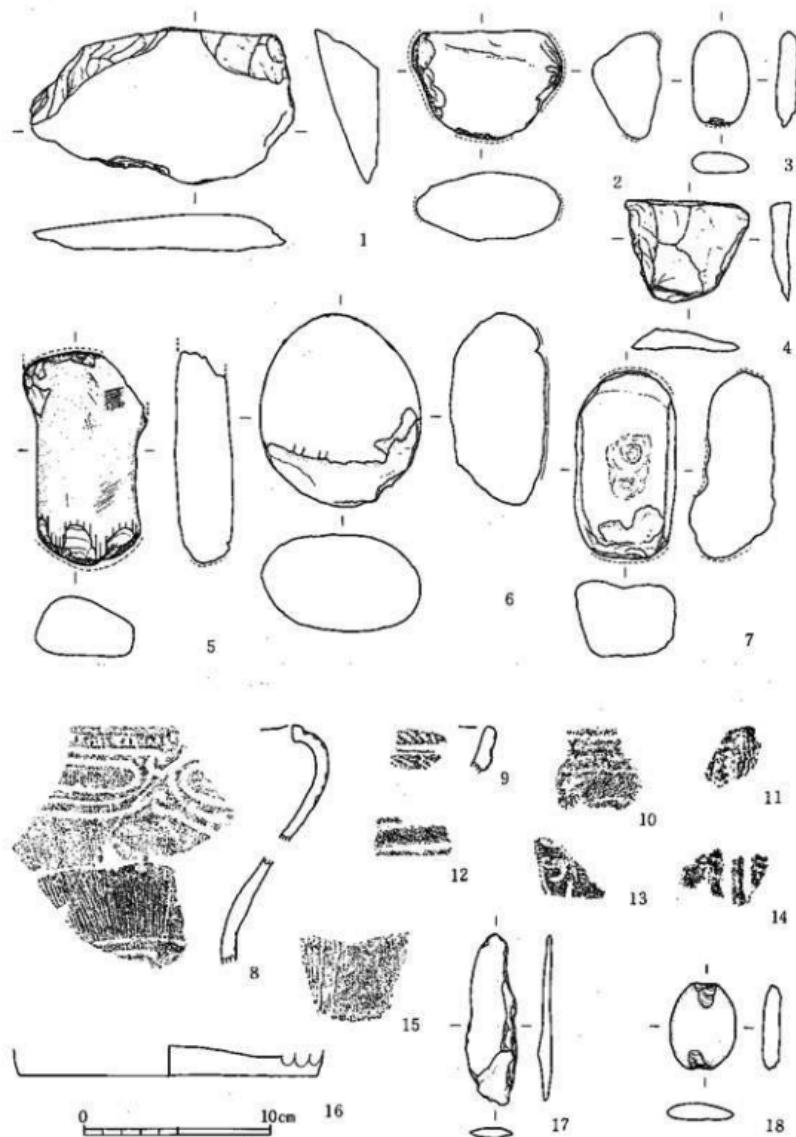
第35図 TSH 10号住居址出土遺物



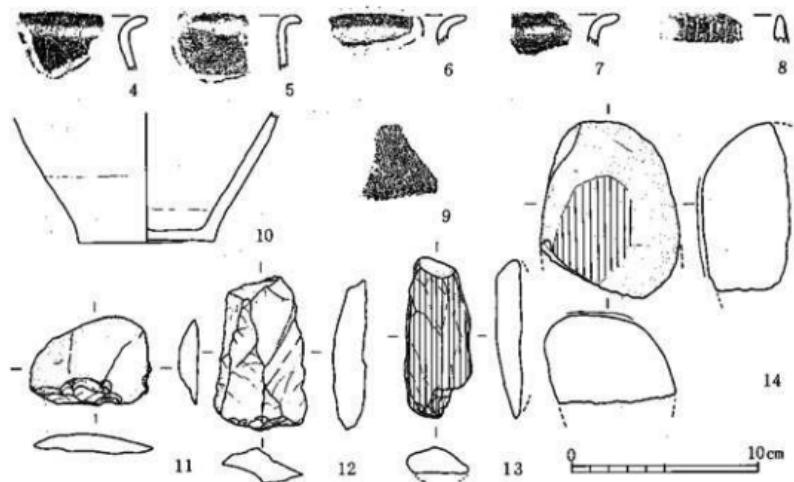
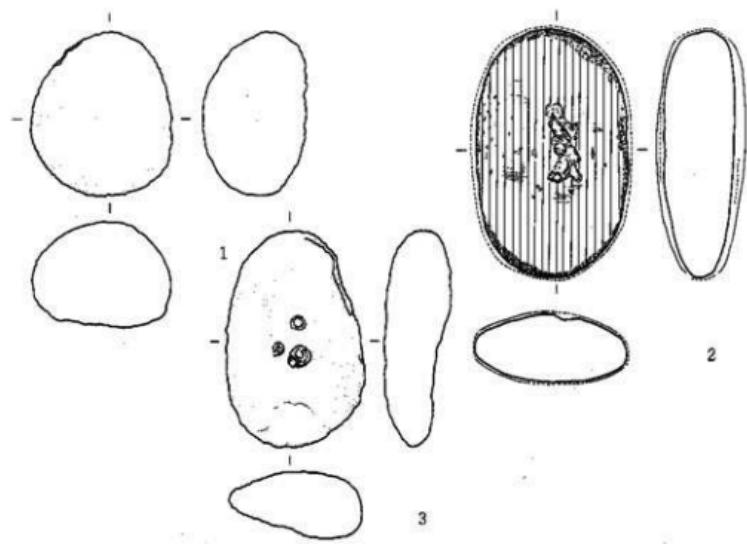
第36図 TSH 10号住居址出土遺物



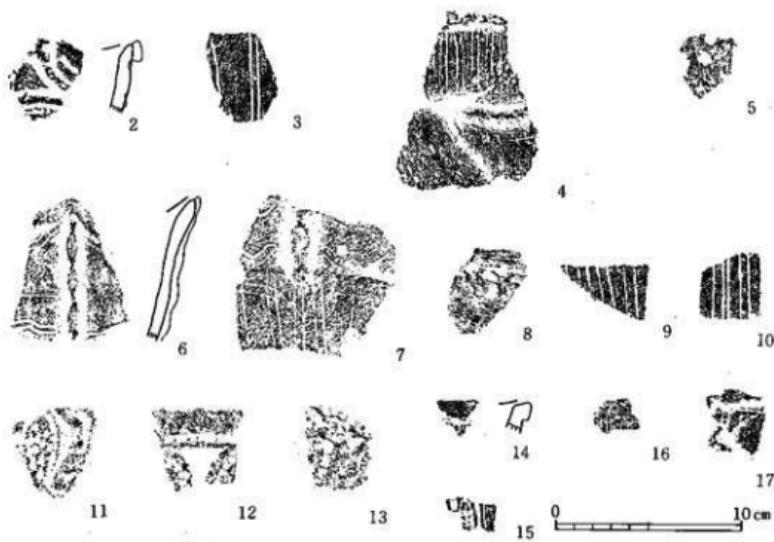
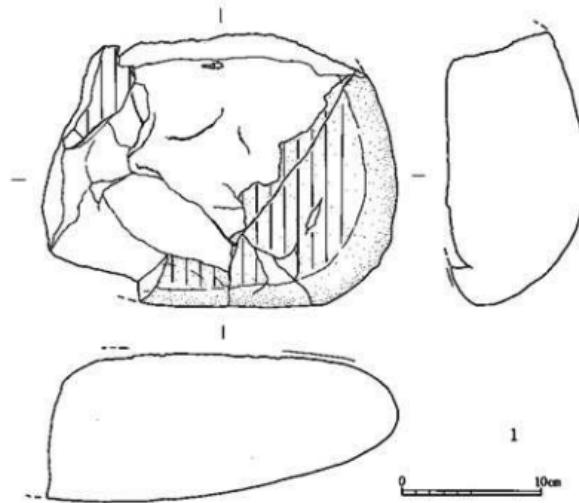
第37図 TSH 12号住居址出土遺物



第38図 TSH 12・13号住居址出土遺物 (1～7 12号住、8～18 13号住)

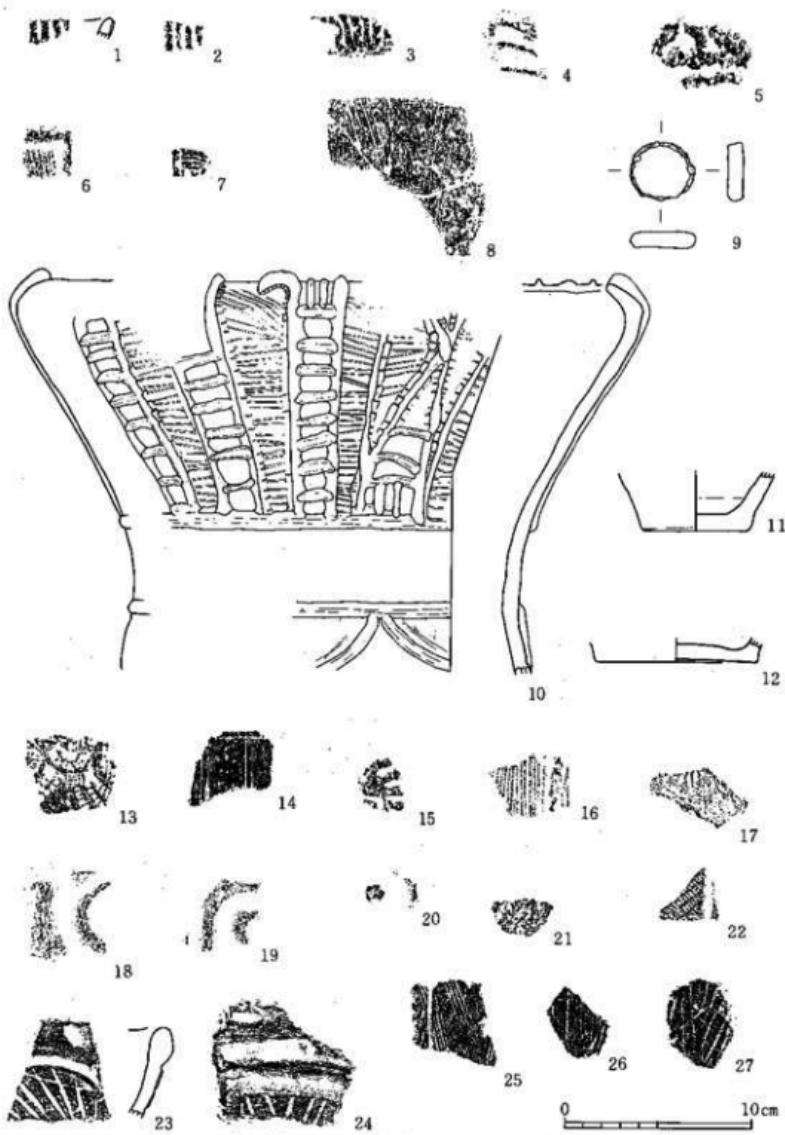


第39図 TSH 13・11号住居址出土遺物 (1～3 13号住, 4～14 11号住)



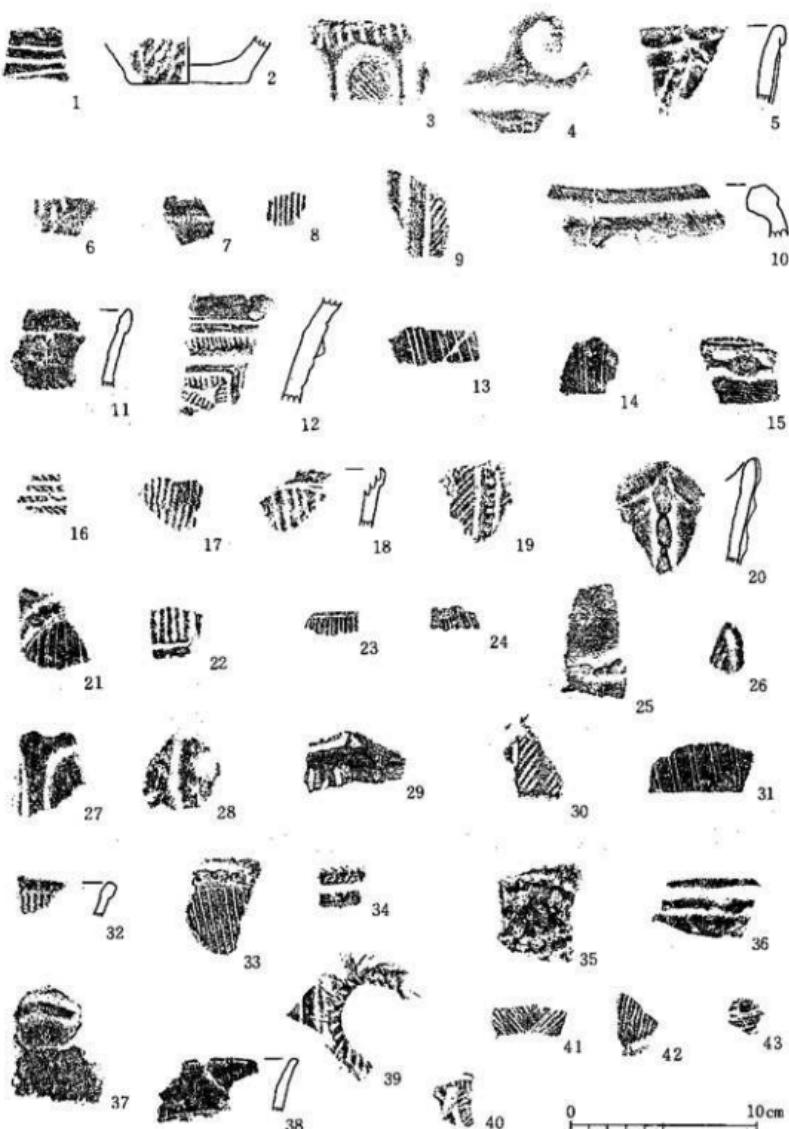
第40図 TSH 11号住居址・土坑3~8出土遺物

(1 11号住, 2・3 下3, 4 下4, 5 下5)  
(6~13 下6, 14~16 下7, 17 下8)



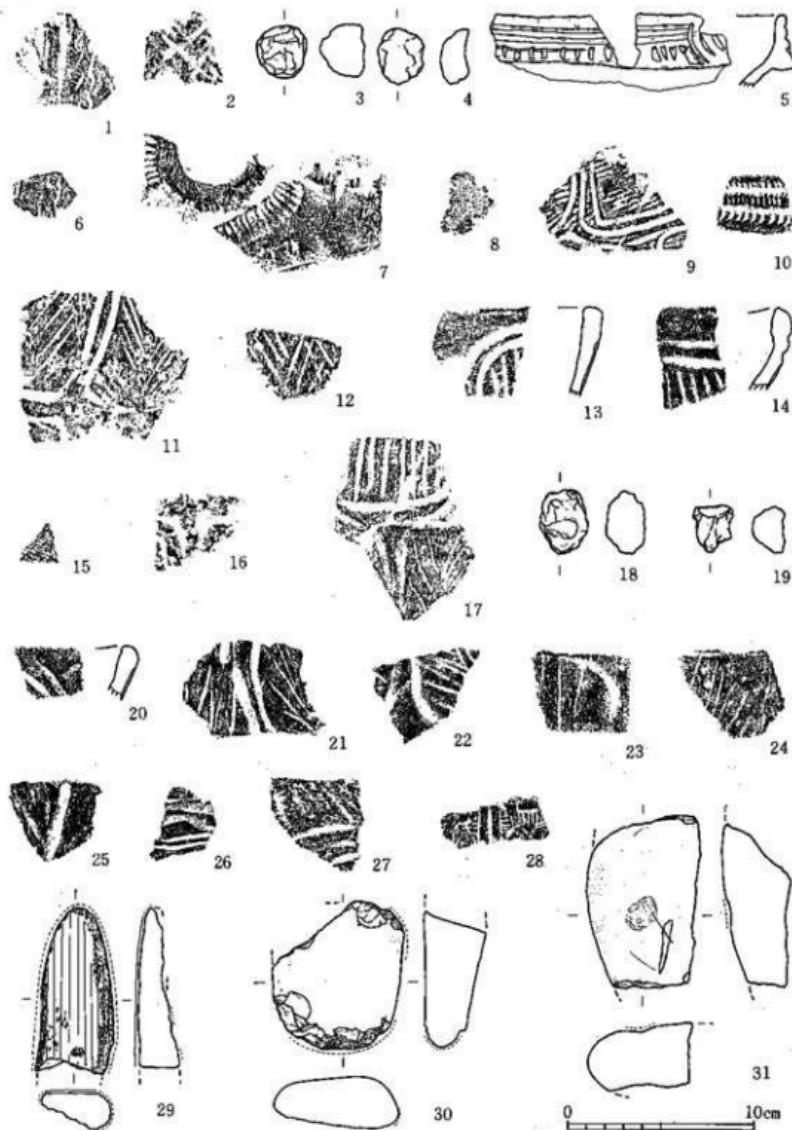
第41図 TSH 土坑9~15・17出土遺物

( 1~5 19, 6~8 10, 9 11, 10~12 12  
 ( 10・13・14 13, 15~17 14, 18~22 15  
 23~27 17 )



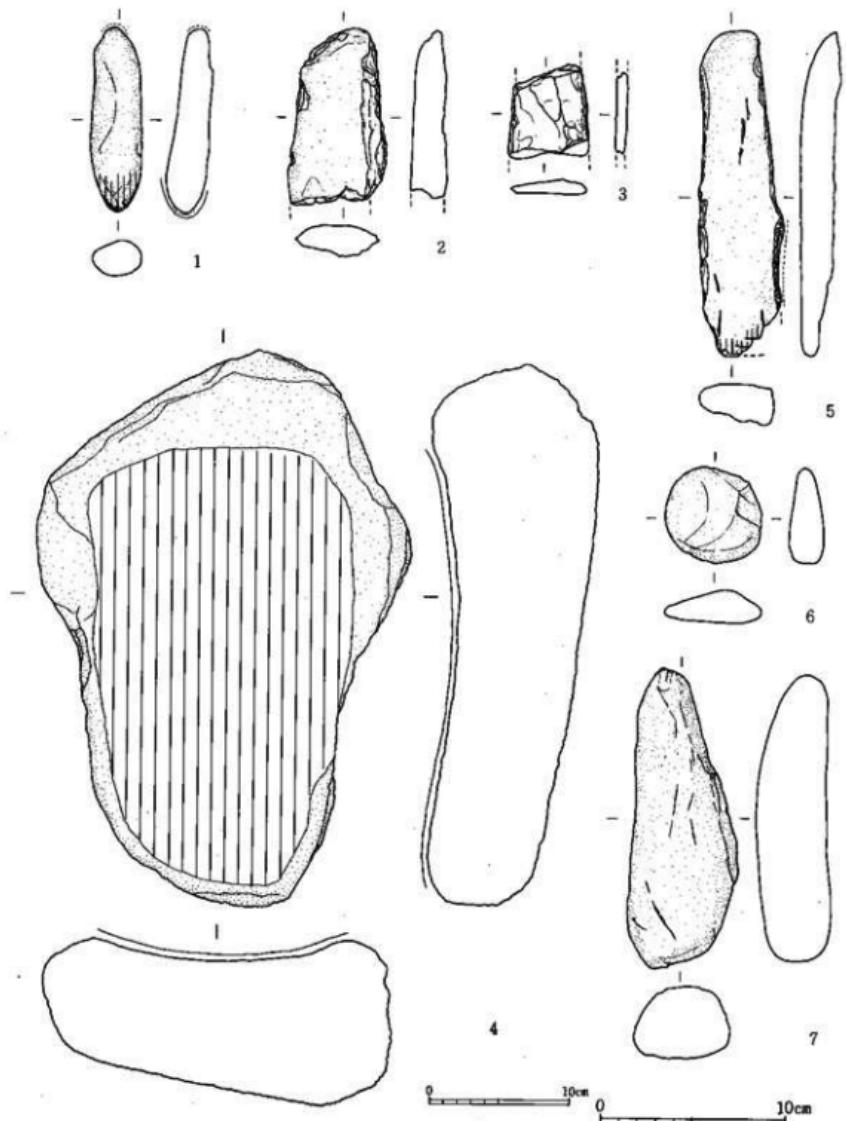
第42図 TSH 土坑17・19~21・23~26・28~31・35~38・41出土遺物

( 1・2 17, 3・4 19, 5・6 20, 7~9 21  
 10~17 23, 18~19 24, 20~22 25, 23~24 26  
 25 28, 26~28 29, 29~31 30, 33~34 35  
 35~37 36, 38 37, 39~40 38, 41~43 41 )

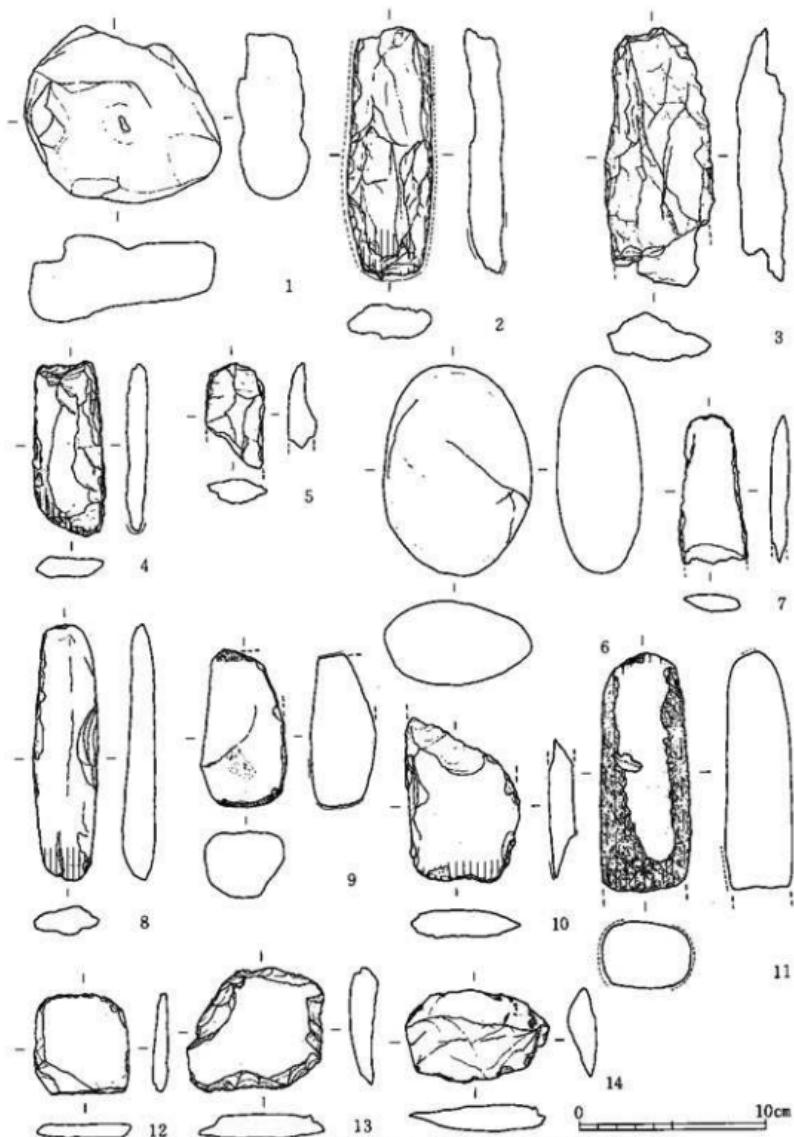


第43図 TSH 土坑42~45・47~50・51~53・54~56・6 出土遺物

( 1 42, 2 ~ 4 43, 5 ~ 6 44, 5 45, 7 47  
 8 50, 9 ~ 12 51, 13 ~ 19 53, 20 ~ 27 54  
 28 56, 29 ~ 31 6 )

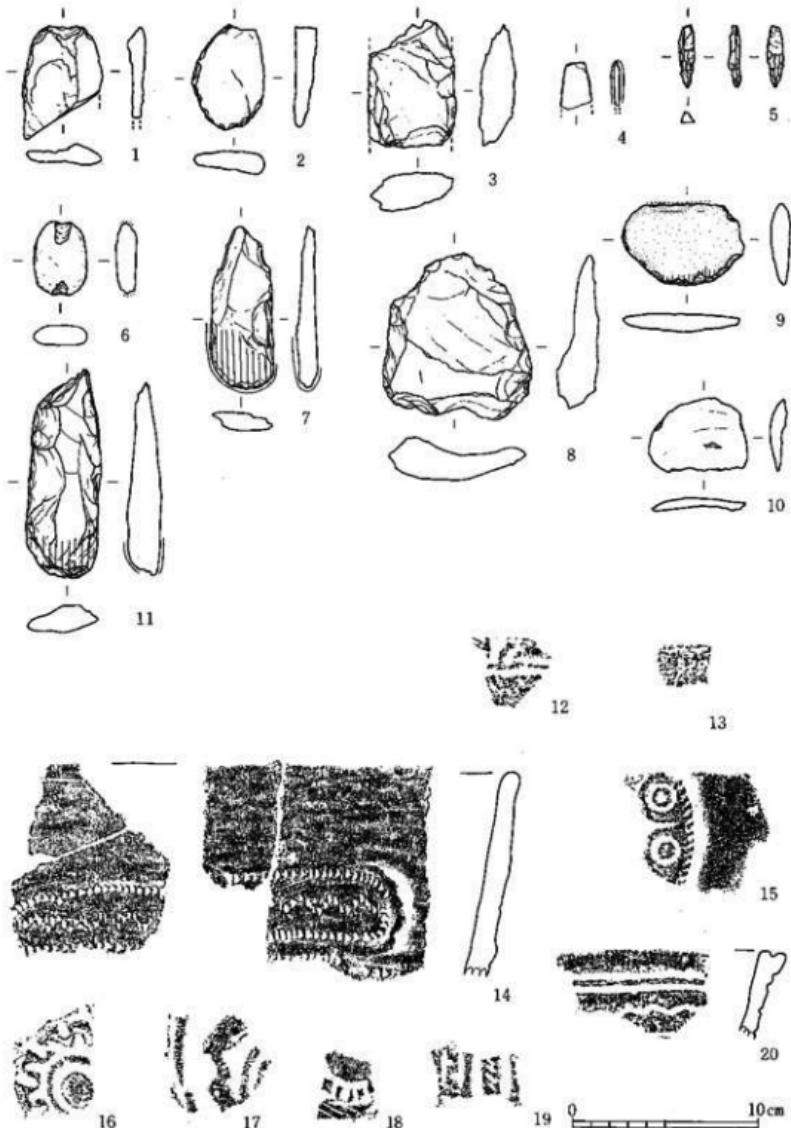


第44図 TSH 土坑 8~10出土遺物 (1 ド 8, 2~4 ド 9, 5~7 ド10)



第45図 TSH 土坑10・12・13・17・23・24出土遺物

(1 10, 2 12, 3 13, 4~6 17)  
(7~9 23, 10~14 24)

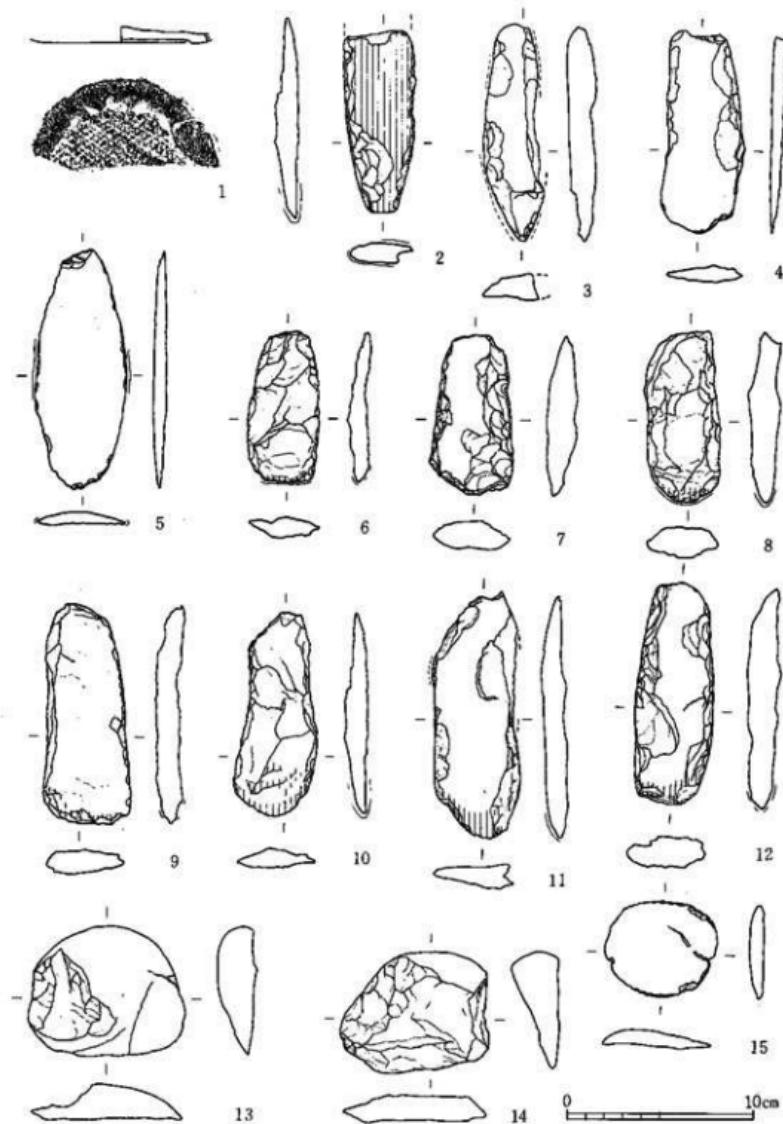


第46図 TSH 土坑25・27~29・38・39・50・51・54・56遺構外出土遺物

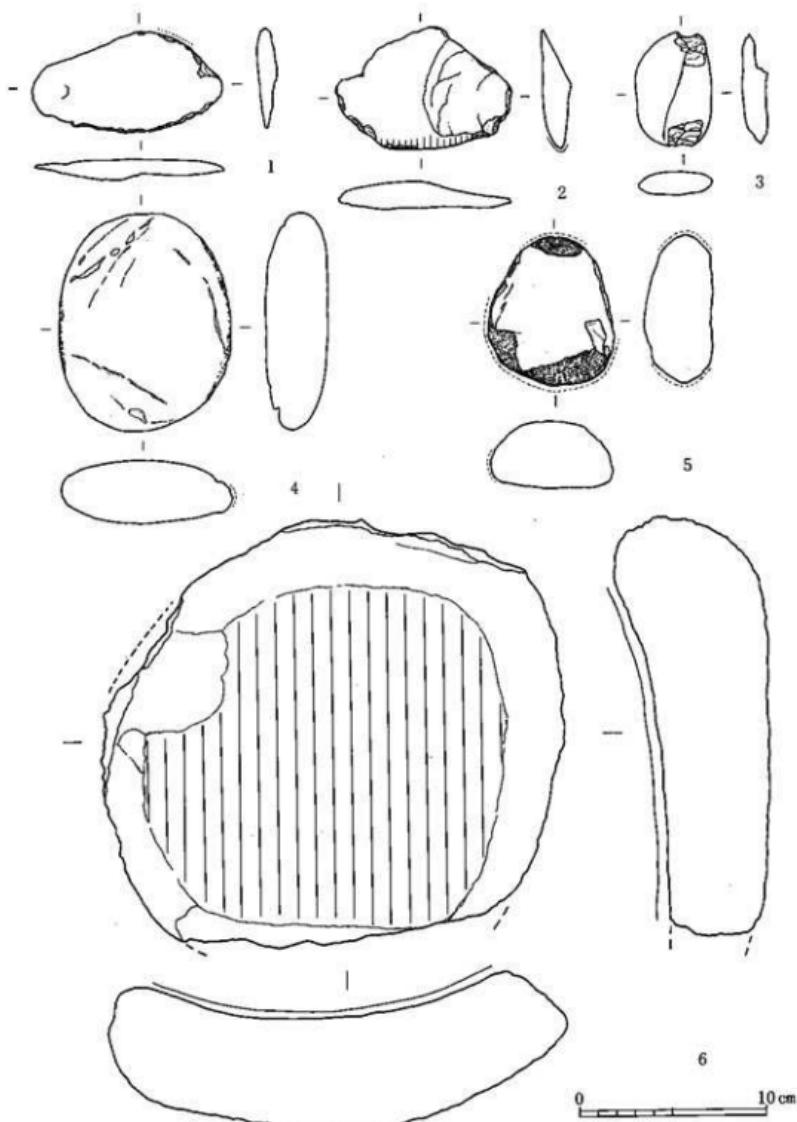
(1 ト25, 2 ト27, 3 ト28, 4 ト29, 5 ト38, 6 ト39)  
 (7・8 ト50, 9 ト51, 10 ト54, 11 ト56, 12~20遺構外)



第47図 TSH 造構外出土遺物



第48図 TSH 遺構外出土遺物



第49図 TSH 造構外出土・表面採集遺物（1～5 造構外、6 表採）

# 写 真 図 版

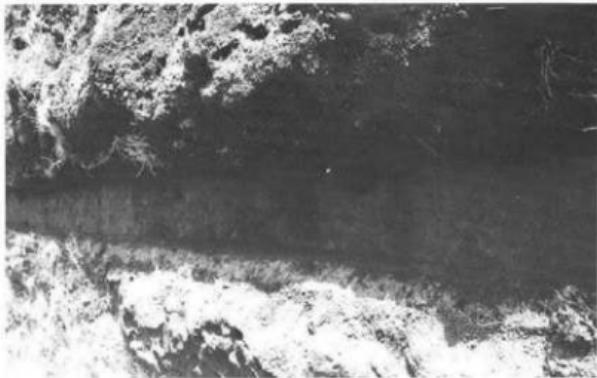
図版 1



下原遺跡調査区全景



下原遺跡遺構分布状況



2号住居址



4号住居址



5号住居址

図版 3

6号住居址



7号住居址



8号住居址



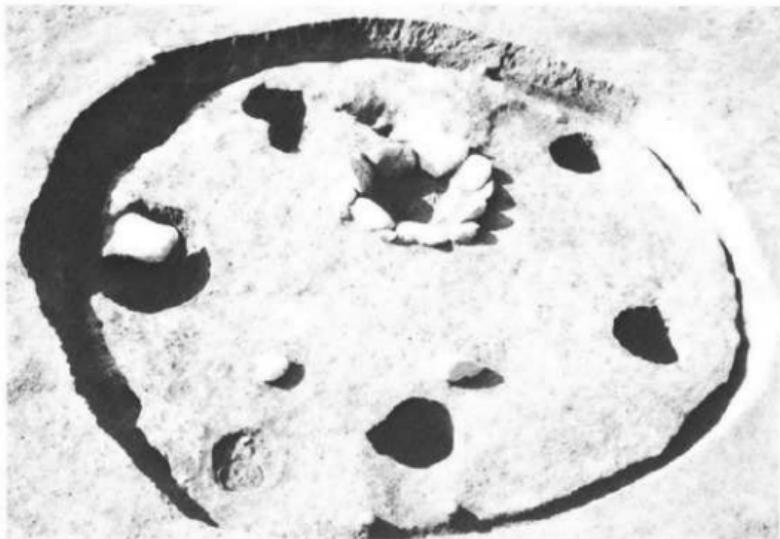


9号住居址



9号住居址炉址

图版 5



10号住居址



10号住居址埋甕

図版 6



12号住居址



13号住居址



11号住居址

图版 7



土坑 6



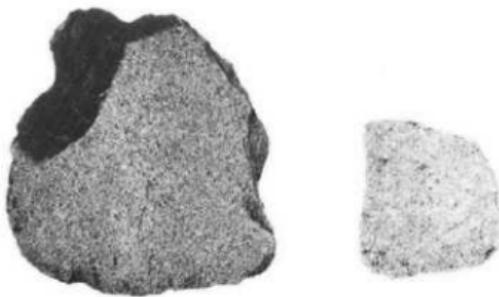
土坑 10



土坑 12·13

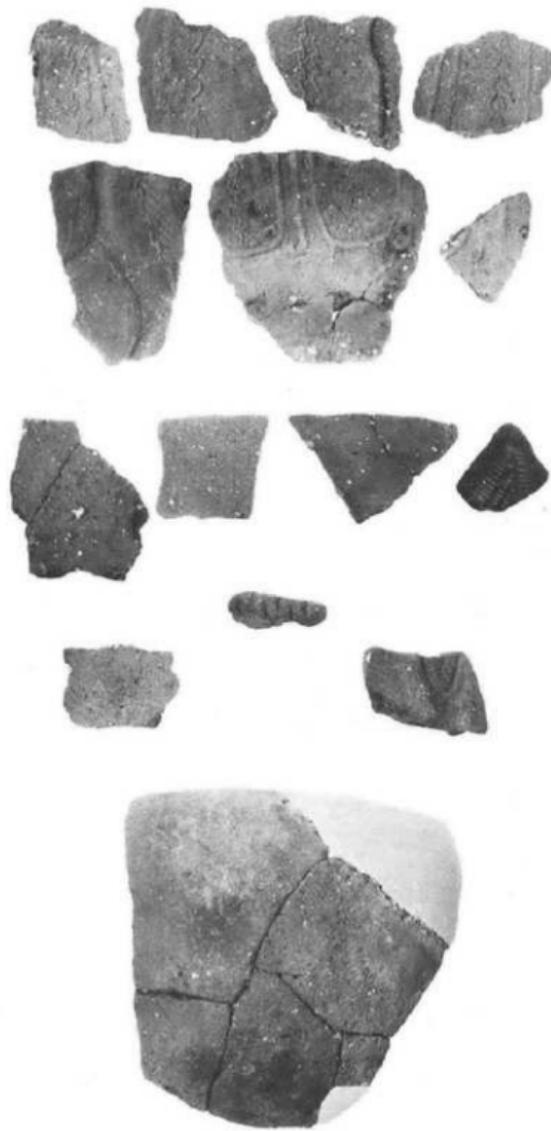


土坑 25



1号住居址出土遺物

図版 9

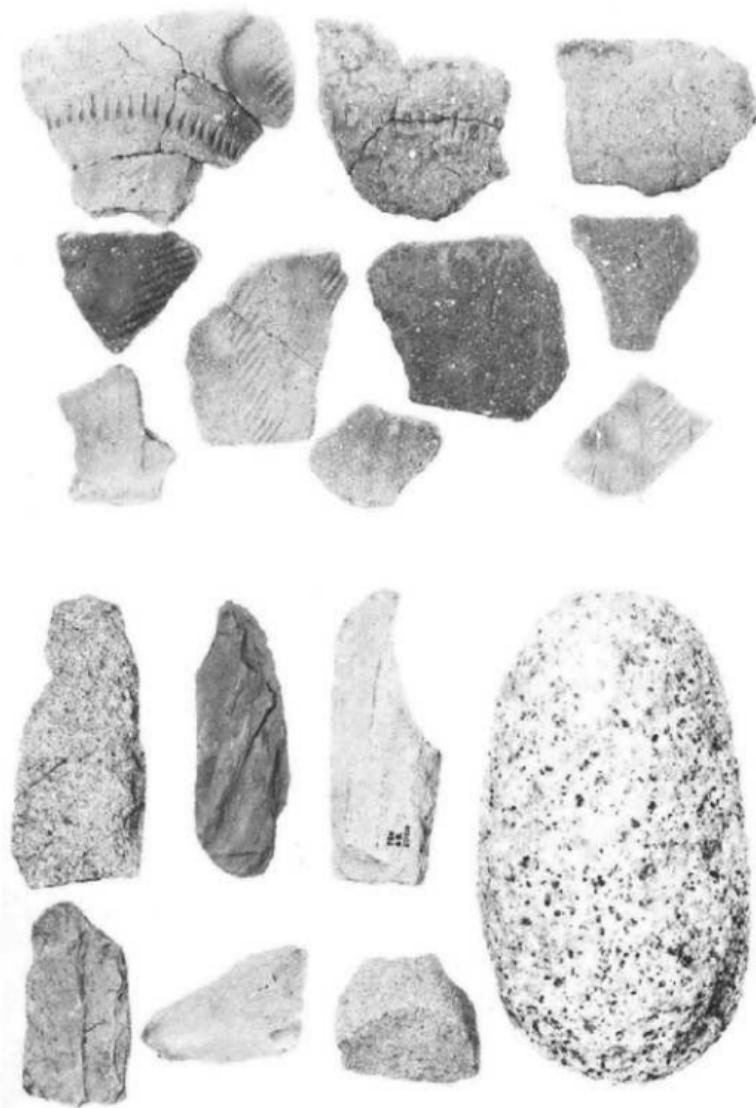


2号住居址出土遺物

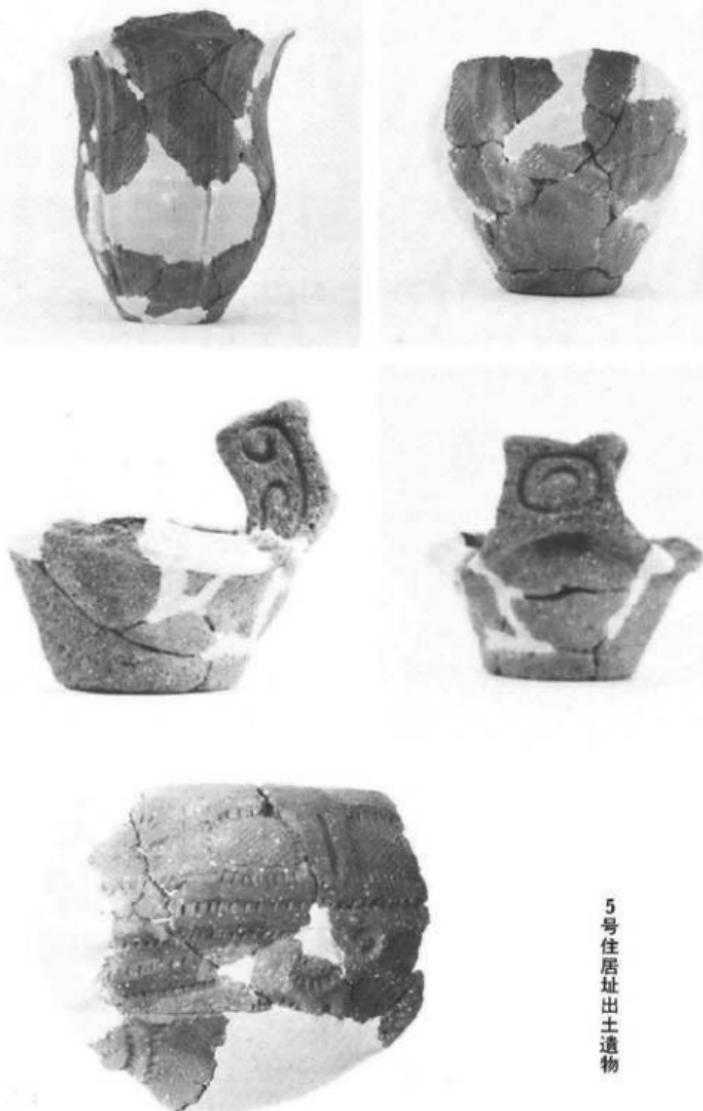


2号住居址出土遗物

图版II



4号住居址出土遗物

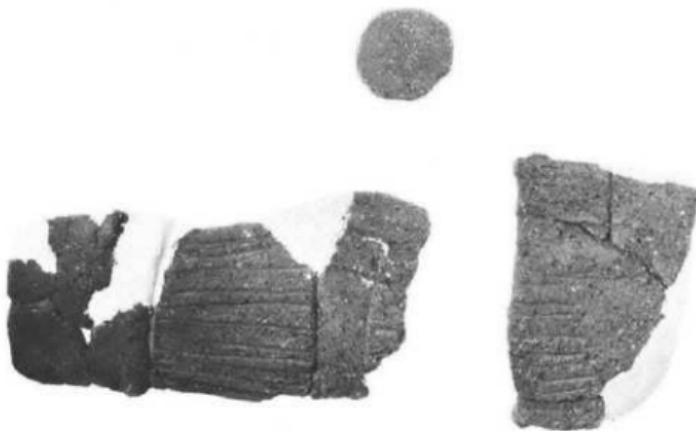
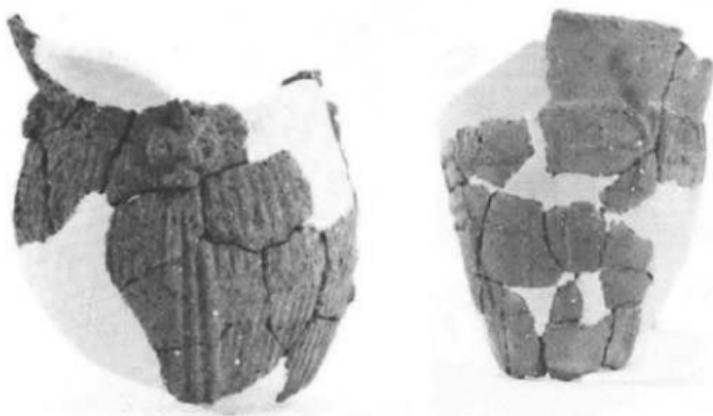


5号住居址出土遗物

図版13



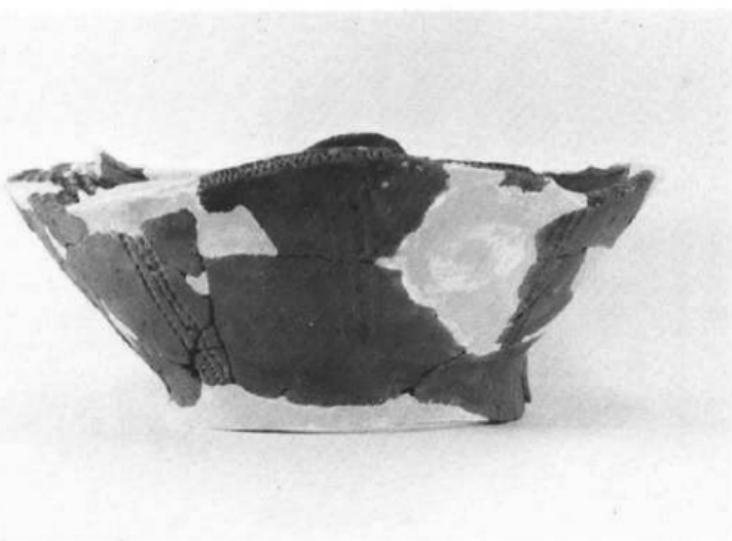
5号住居址出土遺物



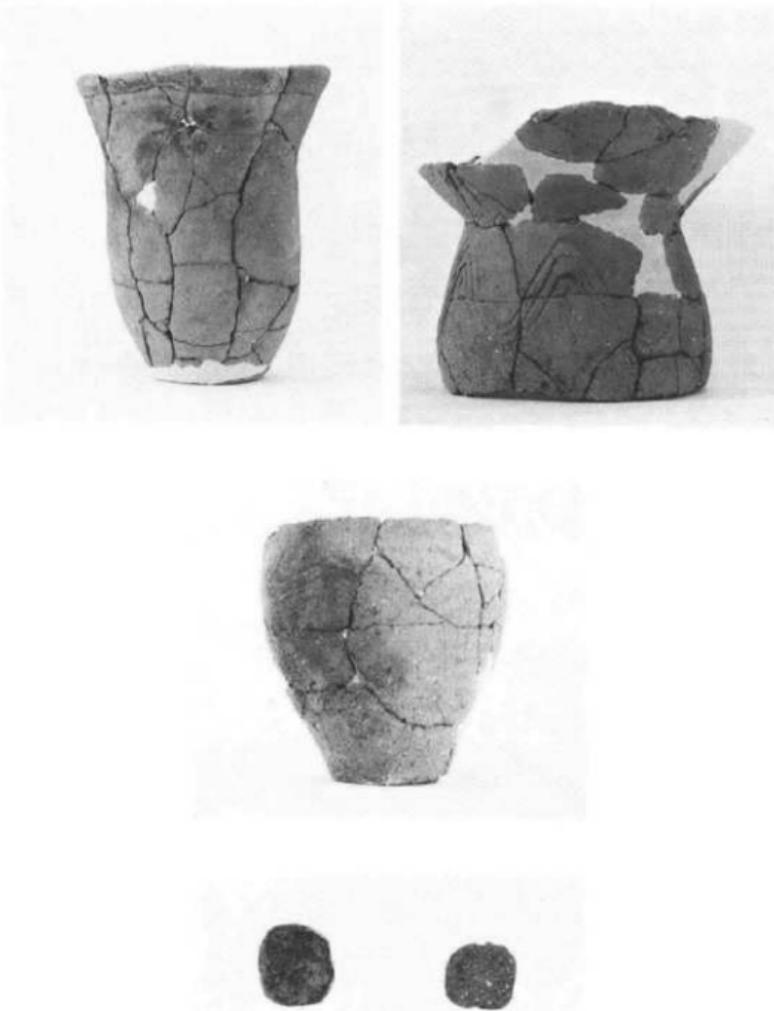
6号住居址出土遺物



6号住居址出土遺物

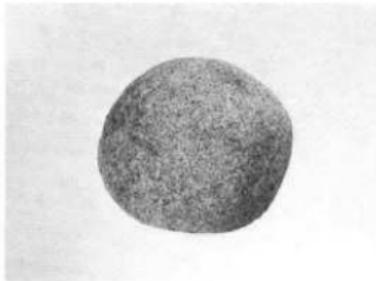
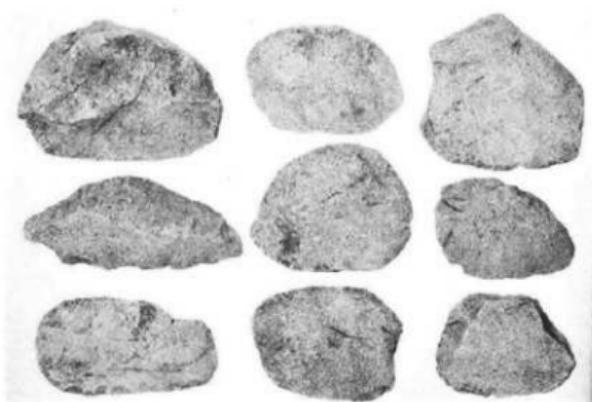


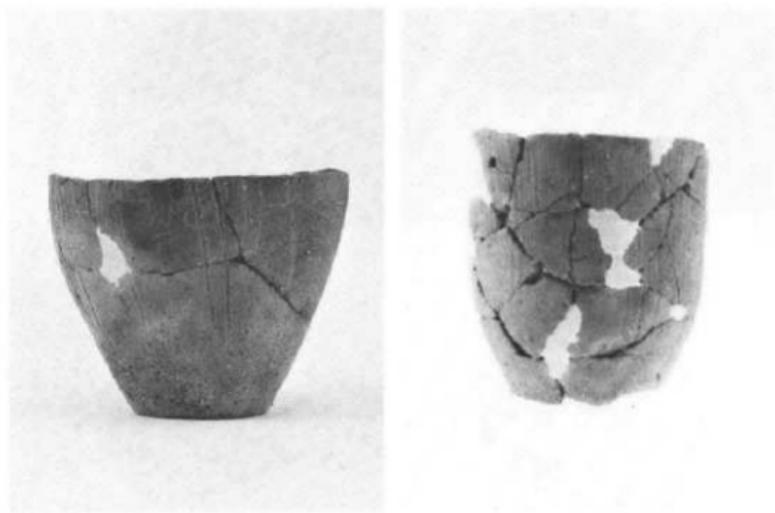
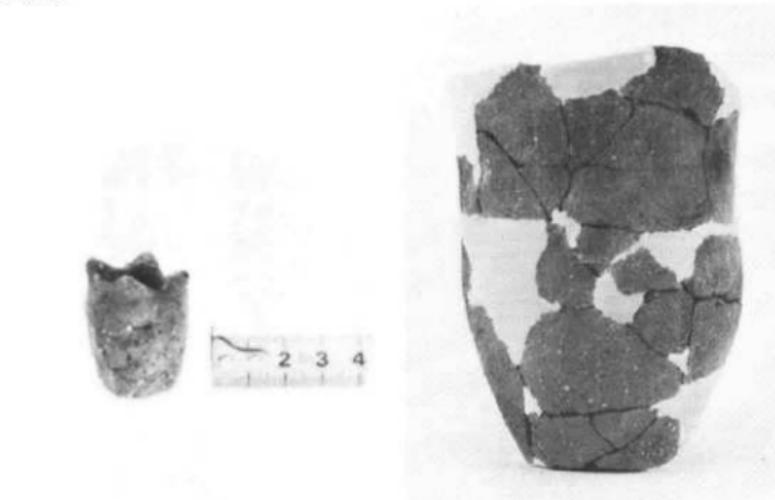
7号住居址出土遺物



7号住居址出土遺物

7号住居址出土遺物





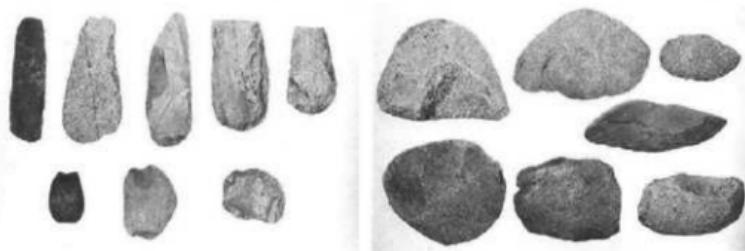
8号住居址出土遺物



8号住居址出土遺物



9号住居址出土遗物

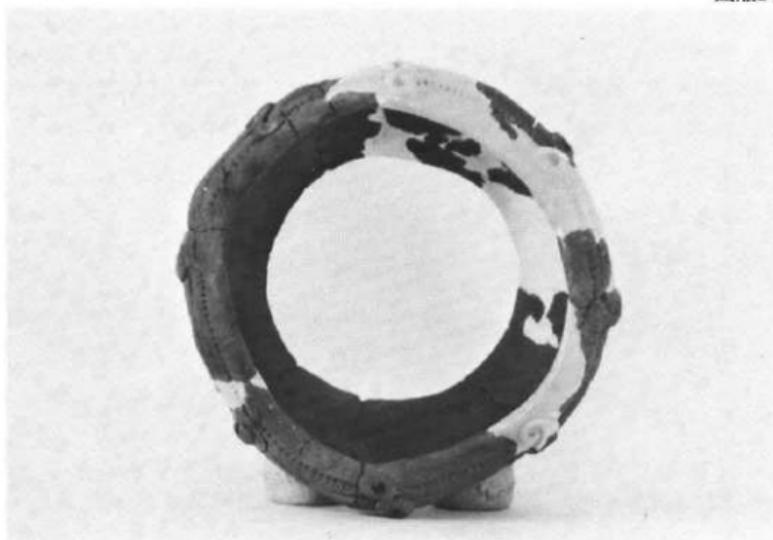


9号住居址出土遗物

图版23



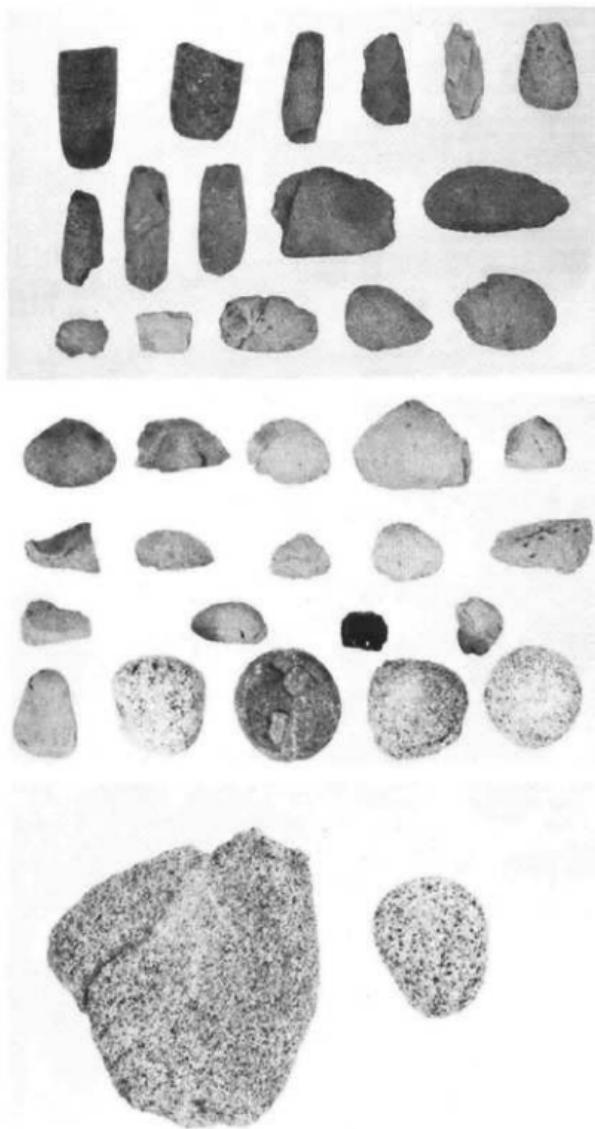
9号住居址出土遗物



10号住居址出土遺物



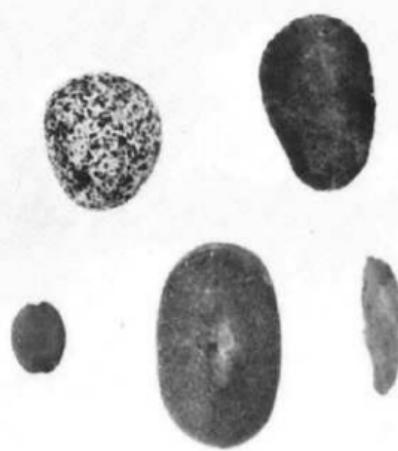
10号住居址出土遗物



10号住居址出土遺物



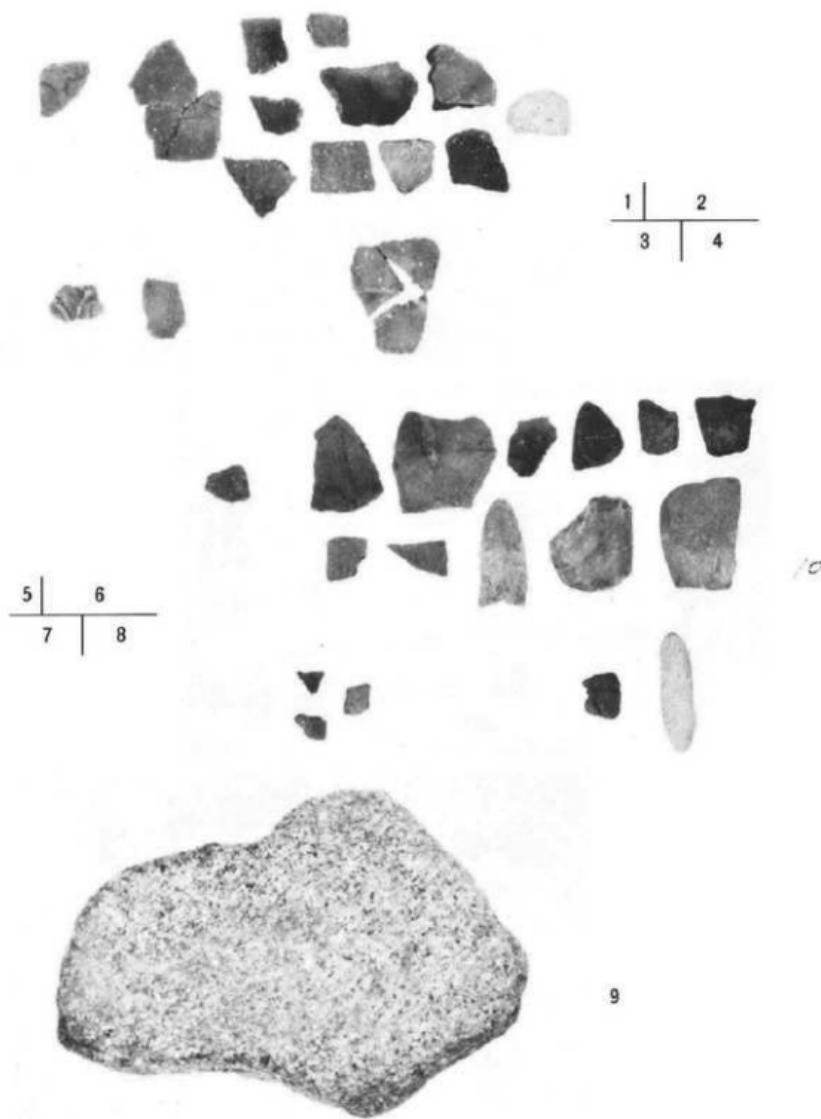
12号住居址出土遺物



13号住居址出土遺物



11号住居址出土遗物



土坑1～9出土遺物  
-123-

土坑  
12・13  
出土遺物

12 | 13  
— 14 | 15 —

21 | 23  
— 24 —



土坑12～15, 21-23-24出土遺物



遺構外出土遺物

図版33



調査風景

---

株式会社平和時計製作所が飯田市下殿岡に  
工場建設するのに先立つ埋蔵文化財包蔵地  
発掘調査報告書

## 下 原 遺 跡

平成元年 3月30日 印 刷

平成元年 3月31日 発 行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
飯田市教育委員会

印 刷 飯田共同印刷株式会社

---

